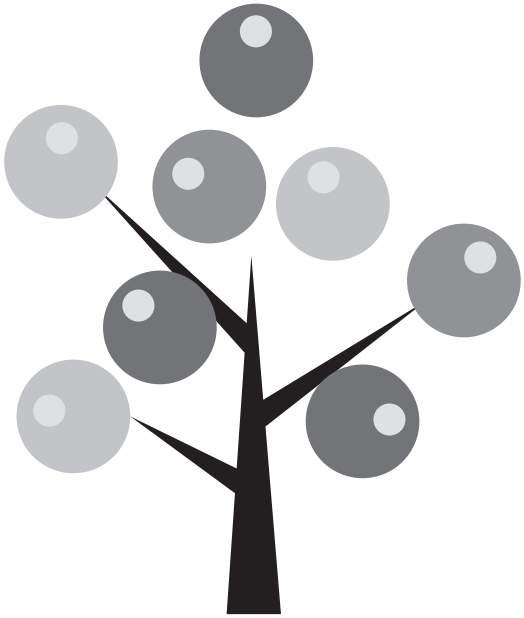
第17回　保育実践研究　報告集

令和 5 年 3 月



社会福祉法人　日本保育協会

はじめに

平成18年度からスタートした「保育実践研究」は、おかげさまで本年度、第17回を迎えることが出来ました。

各施設で本研究をご執筆されていた令和４年も、新型コロナウイルス感染症が猛威を振るい、従来の保育業務に加えて、感染症対策の一層の強化を講じなければならない状況でしたが、本年度は14件のご応募をいただきました。

これもひとえに関係各位のご協力のおかげと厚く御礼申しあげます。

令和５年４月に、こどもまんなか社会を目指す“こども家庭庁”が創設されます。

国民は、“こども家庭庁” の下でこども政策がどのように進んでいくのか、注目しています。

そのような今こそ、「自分たちの保育施設は、日頃どのような保育を行っているか」を保護者だけでなく、地域全体に広め、保育施設の必要性をより理解していただくことが大切です。また、保育の振り返りにより、保育の質の向上に努めることが重要です。

私たちは、保育者が日々の保育実践の中から課題を見つけ、それを分析し、検討を加え、より良い方向へと改善するというこの「保育実践研究」が、質向上に必ずつながると考えます。

この事業は、あくまで保育実践の研究について募集したものであり、各施設における保育内容の評価を目的としたものではありません。

会員各位にはより積極的に応募していただけるよう、私たちは課題等についてさらに検討を加え、今後の募集に生かしたいと考えています。

内容がより充実していくことを期待し、あわせて積極的に皆様が保育研究を行っていただくことを願っています。

令和５年３月

「保育実践研究」企画審査委員会

第17回「保育実践研究」募集要項（概要）

１．目　　的

日本保育協会では、保育の専門性の向上を図るため、日々の保育を振り返り、検証していく保育実践に関する研究を募集します。

応募いただいた研究は審査を経て表彰し、報告集やホームページ、「保育界」等で公表することにより、今後の保育内容の向上と充実に資することを目的とします。

２．主　　催

社会福祉法人 日本保育協会（日本学術会議協力学術研究団体）

３．応募資格

日本保育協会会員施設の施設長、職員（個人研究、施設内グループ研究、地域のグループ研究等）及び保育科学研究所研究会員（保育所等との共同研究を含む）
※委託を受けた外部の講師等は対象外。

４．部　　門

日常の保育実践を振り返る中で見つけた課題について、なぜ関心を持ったか、解決するためにどのような仮説を立てたのか、どのように取り組んだのか、どのような発見、気づきがあったかを、できるだけ掘り下げてください。必ずしも問題解決の成果や成功例を求めているわけではなく、課題の発見とその解決に向けたプロセスを指針等をもとに、具体的にまとめてください。

（１）課題研究部門

以下からテーマを選び、課題や取り組みについてまとめてください。

①　人との関わり
子どもが人への信頼感や主体性、社会性を形成していくために人間関係は大切です。子どもと人との関係性をつないでいくための関わりについて取り組みをお寄せください。

②　遊びと学び
遊びや日々の生活においても子どもが学ぶ機会はたくさんあります。日常的な遊びや生活が学びにつながっていくことについての取り組みをお寄せください。

③　子どもの健康・安全
施設での保健活動、感染症対策、事故防止対策、防災等の危機対応などについて、具体的な取り組みの内容をお寄せください。

④　新型コロナウイルス感染症対策について
具体的な取り組みの内容をお寄せください。

（２）自由研究部門

テーマは自由です。下記の例に限らず、幅広いテーマで課題や取り組みについてまとめてください。

（例）
- 施設での実践事例（特別な配慮の必要な子どもの保育、乳児保育での課題、苦情解決の取り組み、保育環境向上のための取り組み（物的、人的）、入所（園）の際の配慮、保育日誌の工夫・改善等）
- 人材育成の事例（園内研修の取り組み、研修を職員間で活かす取り組みなど）
- 地域における公益的な取組の事例（子育て家庭への支援・地域との連携など）
- 災害への対応（防災計画の策定等）
- 新型コロナウイルス感染症以外の感染症対策の取り組み

５．審査において評価する内容

応募作の評価は企画審査委員会が行います。目的や課題を明確に示し、それに対しどのように取り組んでいったかという経過等について、事実を基に客観的・具体的に記述され、その結果に対して考察がなされていることが大切です。また、問題提起が明確か、論旨が通っているか、オリジナリティはあるか、データは適切か等についても評価を行います。

第17回「保育実践研究」審査結果報告

今回の第17回「保育実践研究」では14件のご応募がありました。

「保育実践研究」企画審査委員会において、厳正なる審査を行った結果、最優秀賞は該当なし、優秀賞５件、研究奨励賞６件、奨励賞１件となりました。

なお、入賞作一覧は次ページの通りです。

受賞作の研究報告は、７ページより掲載いたします。

第17回「保育実践研究」入賞作一覧

○最優秀賞

該当なし

○優秀賞

・課題研究部門①人との関わり

保育日誌の分析にもとづくダウン症児Ａと他児とのかかわりの変化の可視化

松山　春女、桑田　幸生、大塚　裕子（神奈川県・子中保育園）

・課題研究部門②遊びと学び

２歳児の遊びと学び「自然を感じる ～光と影から色・形への気づき～」

二宮　歩美、加藤　あや音、森田　愛菜（三重県・認定こども園杜の街ゆたか園）

・自由研究部門

乳児保育園における怪我・かみつきの分析と対策について

岡安　莉沙（東京都・府中めぐみ保育園）

幼児教育施設と小学校の連携を円滑に進めるために必要なことは何か

浅香　聡彦（石川県・大徳学園）

遊戯室の利用実態Ⅱ ―遊戯室の遊びの計画は必要か―

藤井　しのぶ、安田　未有、浅香　聡彦（石川県・大徳学園）

○研究奨励賞

・課題研究部門①人との関わり

友達と思いを伝え合う大切さを教えてくれたさくらちゃんの存在 ～リレーの取り組みから～

網　沙耶香（富山県・射水おおぞら保育園）

・課題研究部門②遊びと学び

日常の連続性を大切にした保育活動 ―行事の改革を通じて―

中野　真綾（千葉県・布佐宝保育園）

・自由研究部門

新砂運動遊び改革プラン ～運動遊びの標準化を目指して～

白須　咲良（東京都・新砂保育園）

保育テーマ設定による保育内容充実及び保護者への保育内容説明の効果

岩本　恵子（東京都・花房山目黒駅前保育園333）

運動あそびおよび戸外あそびから育つこと ～コロナ禍を過ごした子どもたち～

堀　友貴奈、岡本　幸子（京都府・幼保連携型認定こども園愛光こども園）

「生きる力」を育む保育を目指して ～ 園庭環境を見直す取り組み ～
横井　香澄、森　悠希（鹿児島県・幼保連携型認定こども園建昌こぎく保育園）

○奨励賞

・課題研究部門①人との関わり
ペア活動を通して育まれる心の成長
長谷川　瞳（大阪府・幼保連携型認定こども園成育児童センター）

目　次

はじめに

第17回「保育実践研究」募集要項（概要）

第17回「保育実践研究」審査結果報告

第17回「保育実践研究」入賞作一覧

１．総　評

総　評…… 3
委員長　小林　芳文

２．入賞作の紹介及び講評

（１）優秀賞
〈課題研究部門〉
・課題研究部門①人との関わり
保育日誌の分析にもとづくダウン症児Ａと他児とのかかわりの変化の可視化
松山　春女、桑田　幸生、大塚　裕子（神奈川県・子中保育園）…… 7

・課題研究部門②遊びと学び
２歳児の遊びと学び「自然を感じる ～光と影から色・形への気づき～」
二宮　歩美、加藤　あや音、森田　愛菜（三重県・認定こども園杜の街ゆたか園）…13

〈自由研究部門〉
乳児保育園における怪我・かみつきの分析と対策について
岡安　莉沙（東京都・府中めぐみ保育園）……19

幼児教育施設と小学校の連携を円滑に進めるために必要なことは何か
浅香　聡彦（石川県・大徳学園）……26

遊戯室の利用実態Ⅱ ―遊戯室の遊びの計画は必要か―
藤井　しのぶ、安田　未有、浅香　聡彦（石川県・大徳学園）……34

（２）研究奨励賞
〈課題研究部門〉
・課題研究部門①人との関わり
友達と思いを伝え合う大切さを教えてくれたさくらちゃんの存在
～リレーの取り組みから～
網　沙耶香（富山県・射水おおぞら保育園）……47

・課題研究部門②遊びと学び
日常の連続性を大切にした保育活動 ―行事の改革を通じて―
中野　真綾（千葉県・布佐宝保育園）……52

〈自由研究部門〉
新砂運動遊び改革プラン ～運動遊びの標準化を目指して～
白須　咲良（東京都・新砂保育園）……59

保育テーマ設定による保育内容充実及び保護者への保育内容説明の効果
岩本　恵子（東京都・花房山目黒駅前保育園333）……64

運動あそびおよび戸外あそびから育つこと ～コロナ禍を過ごした子どもたち～
堀　友貴奈、岡本　幸子（京都府・幼保連携型認定こども園愛光こども園）…73

「生きる力」を育む保育を目指して ～園庭環境を見直す取り組み～
横井　香澄、森　悠希
（鹿児島県・幼保連携型認定こども園建昌こぎく保育園）……79

（3）奨励賞
〈課題研究部門〉
・課題研究部門①人との関わり
ペア活動を通して育まれる心の成長
長谷川　瞳（大阪府・幼保連携型認定こども園成育児童センター）……89

「保育実践研究」企画審査委員会
委員長　小　林　芳　文（横浜国立大学名誉教授・和光大学名誉教授）
天　野　珠　路（鶴見大学短期大学部教授）
石　川　昭　義（仁愛大学教授）
髙　木　早智子（埼玉県・花園第二こども園園長）
田　和　由里子（広島県・春日こども園園長）
馬　場　耕一郎（内閣府子ども・子育て本部参事官（認定こども園担当）付
教育・保育専門官）
日　吉　輝　幸（石川県・平和こども園園長）

1. 総　評

総評　　委員長　小　林　芳　文

総　評

小　林　芳　文（委員長）

我が国では、今、以前にも増して子ども・子育て支援等を含め保育に関わる様々な事柄に熱い眼差しが注がれています。

残念ながら昨年末には、保育士が園児に対して不適切な対応を取ったという報道がありました。私たち保育関係者は、このことに大きなショックを受け、保育の原点の大切さを知ったところです。

私は、日頃から自分たちの保育をしっかり振り返り、共有して改善していくという子ども中心の柔軟な環境があれば、不適切な対応を防ぐことができたのではないかと思っています。ですから、この「保育実践研究」を実施していく意義は大変大きいと考えます。

これまで日本保育協会では、保育者の専門性の向上を願い、各保育施設において、日々の保育を検証し、取り組み状況や成果についてまとめた「保育実践研究」を長年にわたり募集してきました。そして、令和４年度で第17回を迎えるに至りました。今年度も機関誌『保育界』令和４年４月号の付録として募集要項を掲載し、同年11月の締め切りで受付けました。

今回応募された総数は、過去最多のご応募があった昨年度に比べ少なくなっていますが、どの保育施設も、コロナ禍で日常保育以外の時間を確保することがむずかしいと思われる状況の中、子どもたちの成長や発達、幸せな子どもの姿を願って意欲的に研究に着手し、発表にこぎつけたことがしっかり伝わってきました。全体的にその内容にも深みが見られたこと、また、今日的な課題に結び付けたタイムリーなテーマ設定をした研究が多くなったこと等、保育実践研究の委員として保育の勢いやエネルギーを感じました。

応募作については、令和５年１月18日に企画審査委員会を開催し、各賞を決定しました。応募作毎に３名の委員による査読をもとに、募集要項に掲げている「論旨は通っているか」、「オリジナリティはあるか」、「データは適切か」等の事項について評定しました。全ての応募作に講評を添えて応募者の努力に応え、今後の保育実践や保育内容の向上と取り組みの充実に資するようフィードバックに繋げた審査を行いました。

審査の結果、最も評価の高い最優秀賞は今回該当がなく、優秀賞が課題研究部門で２題、自由研究部門で３題の計５題、研究奨励賞は６題、奨励賞は１題となりました。

企画審査委員会を代表して、私からすべての応募者に対し、保育実践研究に意欲的に取り組まれたことに心から敬意を表したいと思います。そしてこの保育実践研究が、今後の我が国の保育の資質向上に寄与することを願ってやみません。

２．入賞作の紹介及び講評

（１）優秀賞

〈課題研究部門〉

・課題研究部門①人との関わり

保育日誌の分析にもとづくダウン症児Ａと他児とのかかわりの変化の可視化

松山　春女、桑田　幸生、大塚　裕子（神奈川県・子中保育園）

・課題研究部門②遊びと学び

２歳児の遊びと学び「自然を感じる ～光と影から色・形への気づき～」

二宮　歩美、加藤　あや音、森田　愛菜

（三重県・認定こども園杜の街ゆたか園）

〈自由研究部門〉

乳児保育園における怪我・かみつきの分析と対策について

岡安　莉沙（東京都・府中めぐみ保育園）

幼児教育施設と小学校の連携を円滑に進めるために必要なことは何か

浅香　聡彦（石川県・大徳学園）

遊戯室の利用実態Ⅱ ―遊戯室の遊びの計画は必要か―

藤井　しのぶ、安田　未有、浅香　聡彦（石川県・大徳学園）

《課題研究部門》

課題研究部門①　人との関わり
保育日誌の分析にもとづくダウン症児Ａと他児とのかかわりの変化の可視化

神奈川県・子中保育園　**松山　春女・桑田　幸生・大塚　裕子**

１．はじめに

本研究の目的は、2022年度、当園で初めて保育することになったダウン症１歳児Ａと同じクラスの１歳児３名とのかかわりの変化について、保育日誌を分析することにより可視化することである。本稿では、この目的のため、今年度４月から９月までの日誌を、行為の主体（主語）と、行為や動作（述語や述部）と、主体から見た際の行為の対象者に着目して整理、分析した。この分析を通し、毎日の様々な子どもの姿やかかわり方を記述した保育日誌から、Ａと他児とのかかわりの変化を明確に示すことができた。また、この可視化により、Ａと他児とのかかわり方は、定型発達児のそれと変わりなく、あらためて、ダウン症児が他者、とくに子ども同士で関わることの重要さを示すことができたと考える。さらに、保育者が日々記録している保育日誌が保育における知見を得る有効なデータであることも示唆された。なお、本研究については、Ａの保護者の承諾を得ている。

２．ダウン症児の保育

ダウン症は、1866年イギリス医師ダウンの論文により初めて報告され、1959年フランスのジェロム・レジューンにより21番染色体の過剰が原因であると証明された。なぜ過剰が生じるのかは解明されておらず、人種などに関係なく、すべての人に起こりうる現象である。日本国内では、2006年の試算により、1000人あたり1.77人の出生頻度が示されている［菅野2020］。原因の発見以後、ダウン症の医療、教育・福祉、合併症に対する治療や健康管理、早期支援などが行われるようになった。

令和２年版障害者白書［内閣府2020］によれば、厚生労働省においては、障害のある児童の保育所での受入れを促進するため、1974年度より障害児保育事業において保育所に保育士を加配する事業を実施してきた。また、保育現場における障害児保育を向上するため、保育士等キャリアアップ研修では障害児保育をテーマに盛り込んでいる。

しかし、現実的には受け入れが難しい保育所も多い。横浜市の意見公募では、ダウン症児を持つ保護者から保育所への入所の困難さが指摘されている［横浜市2022］。実際、Ａの保護者も当園への問い合わせの際、他園で入所を断られた状況について述べていた。当園でも、園全体としての配置基準の保育士数は満たしているものの、加配保育士の雇用には至っていない。保育所の立地や地域によっては、いまだに保育士不足は続いている。

３．分析の方法と結果

冒頭に述べたとおり、本研究は、１歳児クラスの担任である松山が、2022年度４月１日から９月30日まで記録した[i] 保育日誌を研究対象としている。当園では保育システムを利用し、日誌をタブレットPC入力で記録している。１歳児クラスはＡを含め４名で、Ａ以外の３名は０歳児から在籍している。

上記期間の日誌内容を日ごとに手作業でExcel表に複写したところ、126日分の記録があった。本稿ではダウン症児をＡ、他３名をそれぞれＢ、Ｃ、Ｄと記す。この126件を対象に、各自の名前が記述された日の記録を月別に取り出したところ、表１のとおりであった。１日分の日誌の中には複数回、同じ園児が記述されることがあるが、その場合も１回と数えている。Ａは、新入園児でもあることから、他児よりも記述が多かったことが伺える。他児については、GW前後の休みや、夏季休暇、体調不良の日数によって出現回数に差はあるが、大きな偏りが無いことは見てとれる。

表１　対象期間の日誌における１歳児の出現日数

	出現回数（日数）			
月	A	B	C	D
4	13	12	12	13
5	14	9	12	9
6	14	10	12	13
7	15	12	10	12
8	13	7	10	7
9	13	8	11	8
計	82	58	67	62

研究の目的を踏まえ、本稿では、Ａが出現している82日分のうち、目視により、ＡとＢ、Ｃ、Ｄを含む他児とのかかわりが記述された36日分の日誌を抜き出した。この36日分の日誌テキストを以後「かかわりテキスト」と呼ぶ。かかわりテキストを対象に、Ａと他児とのかかわりの中で、主語、述語や述部、行為や動作の対象者や相手を抜き出して、分析データを作成した。これを「かかわり分析データ」と呼ぶ。１件のかかわりテキストの中で、行為や動作が複数ある場合は、行為や動作ごとに抜き出した。主語は抜き出す際の目安にはしているが、必

ずしも「～が」で表記されている園児ではなく、行為の主体となっている園児を抜き出した。例えば、「Ａが泣いてからは、３人共心配そうに見たり戸惑う様子が見られた」という記述では、行為の主体として「３人」、行為の表現として「心配そうに見る」「戸惑う」、行為の対象として「Ａ」を取り出しデータ化している。同様に、省略された主語も補って取り出した。これにより、36日分のテキストから、80件のかかわり分析データを作成することができた。

かかわり分析データを対象に、Ａが主語となっている場合、Ａ以外の園児が主語となっている場合、という観点から整理したものが表２である。表２の結果が出た際、日誌を記録した本人である松山自身も驚いた。それは、次の２点においてである。一つは、入園当初は泣いていることが多かったＡが、４月中旬頃から他者に関心を持ち始めたという印象と、表２の数値が合っていた点である。Ａは、Ｂ、Ｃ、Ｄの働きかけに対して当初受け身であったが、４月後半は自分からＢ、Ｃ、Ｄに興味を示すようになった。また、後で詳しく述べるが、７月頃から保育士の支えが無くても歩行できるようになったことが、７～９月のかかわりにおいてＡが主語である記述が増えたことに関連していると考える。

もう一つ驚いた点は、Ａ以外の園児が、主体となるＡとのかかわりが記録の上では少なくなっているように見えることである。日常の保育活動においては、Ａ以外の子どもたちからのＡへの働きかけが減った印象や感覚が無いため、かかわりテキストや、かかわり分析データを対象に、より細かく日誌の記述内容を見ていく。

表２　かかわり分析データにおける行為主体の変化

	行為の主体（頻度）	
月	Ａ	Ａ以外
4月前半	1	25
4月後半	8	3
5	4	3
6	2	1
7	9	2
8	11	1
9	9	1

４．結果の考察

ここでは、ＡとＢ、Ｃ、Ｄをはじめとする他児が、この半年間にＡとどのようなかかわりを持ったかを概観するため、かかわり分析データから月ごとに、Ａと他児とのかかわりの際の具体的な行為や動作の述語、述部の表現を表３に示した。これらの主語や述語表現が現れた具体的な記述と合わせて考察する。なお、四角枠で囲んだ記述は日誌から抜粋している。

表３　Ａと他児とのかかわりにおいてＡあるいはＡ以外が主体の際の行為や動作

月	行為主体がＡ	行為主体がＡ以外（主にＢ、Ｃ、Ｄ）
4月前半	顔をよく観察する	「大丈夫よ～」と言う、優しく頭を撫でる、心配そうに見る、手を握る、遠慮する、バイバイと手を振る、気になる、「泣いてるね」と心配そうにやってくる、朝の会で声をかける、口や涙を拭く、心配そうに眼で追う、声をかける、玩具の器を見せる、自分の好きな玩具を見せる、足を洗ってあげる、涙を拭く、背中や頭をさする、等
4月後半	顔をよく観察する、見ている、じっと観察する、髪を掴む、ぺんと叩く、手を伸ばす、よく見る、見て近づく　等	気にかける、顔を覗き込む　等
5	表情をよく見ている、遊んでいるタイヤの方まで移動した、じっと見る、手を出す	優しくする、水筒を持ってくる、（Ａが帰ったあと）担任に甘える
6	眼を見開いて観察する、笑い合って楽しんでいた	（Ａがやってくると）隣に座る
7	自ら側に寄る、頭を押し入れ仲間に入ろうとする、後ろからカゴを押す、近づいて触る、他児が行っている遊びに興味を持つ、一緒に絵本を読む	（他クラスの年上の子どもたちが）「かわいい」と言って名前を呼ぶ、（Ａが「あー」という声を出すと、それに応えるように）「あー」と言葉を返す
8	絵本を指さして喃語を話す、近づき覗き込むように見る、優しく頭を触る、やり方を見て真似して平均台に登る、遊びに加わろうと近寄る、真似して水を汲んだり泥遊びをする、興味を示して近くに寄る、二人がひっぱるカゴを後ろから押すように手をかけて歩く、４人がお互いトラブルの解決後、許して楽しく話したり優しくしたり世話を焼いたりする	絵本を見せながら色を教える

9	（おままごとで、Ｃの作ったご飯を）スプーンを使って食べる、０歳児が食べている姿を見ていっしょにもぐもぐ口を動かす､顔を近づけてもぐもぐしてみせる､（Ｄの）後について歩行遊具で遊ぶ、一緒にキャンプ遊びを楽しむ、自ら側に行き、観察し拍手して笑う	（０歳児が）Ａの口の動きを真似て口を動かす

Ａは、保護者の協力を得て、約３週間かけて慣らし保育を行った。１～２時間程度で降園するスケジュールを本児に無理の無いよう１週間ほど続けた。入園当初、Ａは不安感のため泣いていることが多く、その状況に対して、同じく１歳児のＢ、Ｃ、ＤがＡを気遣い、優しさを示していた。表３の「『泣いてるね』と心配そうにやってくる」「口や涙を拭く」などの行為からも見て取れる。具体的には下記のような行為であった。Ｂ、Ｃ、Ｄの行為を表現するには「気遣う」よりも「寄り添う」というほうが適切かもしれない。

４月５日　（略）Ａが泣いているのを見ると、Ｄが気になって「泣いてるね～」と心配そうにやってくる。毎日同じように朝の会の際に声をかけていた。（略）

４月７日　（略）Ａが泣いているのに反応し、（Ｃは）よだれ掛けでＡの口や涙を拭く。Ａが泣いたままうつ伏せになると、隣にＣもうつ伏せになり、Ａの顔を心配そうに見ていた。その後もＡを心配そうに目で追い、声をかける。（略）

一方で、１歳児であるという年齢を考えれば、このような行動はＢ、Ｃ、Ｄの優しさであると同時に“頑張ろう”とする行動でもあるため、同時期に下記のような記述もあった。

４月４日　（略）Ｂ、Ｄは、本を見る際や保育士に何かしてもらいたいことがある際、Ａが泣いていることを見ており、待つ姿が見られていた。まだ慣れないで泣いているＡを心配したり遠慮したりする気持ちの現れだと感じた。Ａが帰ると思い切り甘えて、ダイナミックに遊んでいた。Ｄは、Ａが帰る際にバイバイと手を振っていたことから、友達という意識がこれから少しずつ出て来るかなと感じた。

４月６日　（略）Ｂ、Ｃ、Ｄは、甘えたい気持ちや見てほしい気持ちから不安定な行動が見られる。表情も険しかったが、戸外で一緒に遊び意識的に関わると柔らかくなり落ち着いた。他保育士と連携をとりながら交代でＡを抱っこして３人とも関わる時間を大切にしていきたい。

Ａは保育室や園庭での探索行動、すなわち施設や物への働きかけについては２週めくらいから積極的に行っていたが、人への関心は表３に示すように「観察」に留まっていた。４月後半になると、Ａも積極的に周囲に関心を持ち、働きかける様子が出てきた。その働きかけには「よく見る」「近づく」といった行為だけでなく、「ぺんと叩く」「髪を掴む」といった行為も徐々に見られるようになった。４月後半から５月に見られたＡのこのような行為については、対話的に「相手の子が嫌な気持ちになること」であることをＡに伝えると共に、本稿筆者らを中心に、ダウン症についてあらためて学び直すことも行った。Ａの行為をよく観察すると、周囲が「叩いている」と見た動きについて、腕や手のコントロールがうまくできなかったと思われる場合もあったからである。ダウン症児の特徴である筋肉の緊張の低さ（低緊張）についての知識と理解が必要であった［玉井2016］。このような課題について、本稿筆者らで振り返りを行い、Ａの姿やダウン症児の基礎的知識について共有した。

また、同時期に、Ａは耳の手術を行うことにより、聴力や体調がよくなった。さらに、６月頃から這い這いでの移動に加え、保育者の支えがなくても自律的に歩行できるようになってきた。Ａ自身の意思で移動ができるようになったのである。Ａや保育者の、このような変化により、Ａの他児へのかかわり方も変化した。表３のＡが行為主体となる７月の行為を見ると、「自ら側に寄る」「頭を押し入れ仲間に入ろうとする」「後ろから（カゴを）押す」など、自主的な移動をともなった行為を記述している。

７月４日　先週から牛乳パックの長椅子をバイクに見立て遊び始めたＢであったが、今度は車に見立て遊ぶようになった。今日は丸い廃材をハンドルに見立てて遊んでいたので、チラシでハンドルを作り、“のりものあつまれ”の曲をかける。すると嬉しそうに、Ｂ、Ｃ、Ｄで並んで座り、ハンドルを回して遊ぶ。その様子を見たＡも、自ら側に寄り、（Ｂ、Ｃ、Ｄが）座っている間に頭を押し入れ、仲間に入ろうとする。Ａは先週から３人の遊びに積極的に参加する様になり、仲間意識が強くなる。今日も同じハンドルを欲しがり、用意すると嬉しそうに手に持ち、ブンブン振っていた。（略）

7月12日　（略）Ｂは、カゴに縄跳びをつけて走らせ「先生、これ、ぶーぶー」といって見せにきた。それを見てＤもカゴを持ってきて引っ張り始める。

すると Aも来て、カゴを掴んで立ち上がり、Dが引っ張るカゴを後ろから押し始める。（略）遊び後に足をC、B、Dで洗っていると、（Aが）自らハイハイで隣にやってきて仲間意識がAの中で芽生え始めていると感じた。

A以外を主語として、Aと他児とのかかわりを記述することは日誌のうえでは減っていたが、印象や感覚としては、B、C、DのAへの関心がなくなったわけでも、働きかけが減ったわけでもない。今、振り返ってみると、B、C、DのAへの行為が“特別”ではなくなった、あるいは保育者が特別視しなくなったのだと考える。日誌の抜粋にも示すように、B、C、Dには4月当初、新しく入ってきたAに優しくしようという頑張りが見られた。しかし、担任から見ると、その意識は変化し、Aに対する対等な仲間意識になってきたと考える。例えば、Dは基本的な態度は4月と変わらないが、5月頃からはAが物を投げたり、人を押したりする場合には「ダメね！」と注意するようになった。B、C、Dは、Aに対して頑張って関わろうとするのでなく、同じクラスの仲間として自然に振舞うようになったのだと考える。

8月9日　（略）室内では、絵本を読んだりゆっくりと過ごした。BはAに絵本を見せながら「あか」など色を教えていた。Aもそれを見て指を指し、喃語を話していた。言葉がたくさん出ている。

8月19日　朝登園すると、お互い挨拶をしたり手を振ったり反応をする。（略）

9月8日　Dは、おままごとを出して遊ぶ。BとCも入り、一緒に遊ぶ。（略）Aは、身体を動かして歩行を楽しんだり、輪の中に積極的に入って遊んだ。Cの作ったご飯をスプーンを使って食べたりと、一緒に見立て遊びを楽しんだ。

8月9日の日誌には、BがAに教えてあげる、優しくしてあげるという一方的な関係性ではなく、BとAとの対話的な姿を示している。また、8月19日は1対1の関係でなく、1歳児クラスの子どもたちがお互いに挨拶する様子を記している。9月8日のままごとや見立て遊びの姿は対等な仲間関係そのものに見える。

このような変化はAにも見られた。AがB、C、Dに接する姿と、0歳児に接する姿は異なってきた。下記のとおり、0歳児に対しては、4月に自分がB、C、Dからしてもらった行為をしているように見える。

8月12日　（略）Aは0歳児が泣いてしまったのを見て、近づき覗き込むようにして見ていた。少しすると優しく頭を触り、慰めているような姿が感じられた。（略）

9月9日　（略）給食の際、0歳児が食べている姿を見ていたAは、自分もお腹が空いていたこともあり、一緒にもぐもぐ口を動かす。それを見た0歳児が真似るように口を動かす。保育者が「Aの真似してるね」とAに声をかけると、今度は0歳児に顔を近づけてもぐもぐしてみせる。0歳児もその様子に喜び、楽しみながらもぐもぐしながら食事をしていた。

子どもたちの関わりについて、保育者として気を付けてきたことがある。それは、4月のB、C、Dの行為や態度について、「我慢させた」や「可哀想」と思うのではなく、感謝の気持ちを持って見ていたことである。振り返ると、5月の日誌にその思いを記していた。

5月9日　Bは久しぶりの登園だったが、Aに対して優しくしたり思いやる姿も見られた。給食の際には、CがBの水筒が無いのに気づき、Bの分も持ってくる。机の上に置くと、BはAの水筒がないのに気づき持って来ていた。（略）（Bは）Aに対して優しさに溢れており、無理して行なっている感じもしなかった。Bの優しさを見かけた際には、Aの代わりに「ありがとう」を必ず伝えるようにして、当たり前の事ではなく、感謝の気持ちを伝え続けていきたい。

保育者が子どもたちに何かを“してあげる”と思うのではなく、子どもたちが“してくれる”こともたくさんあると認識し、それらに対して感謝する気持ちを持つことは大切であると考える。5月9日の記録をあらためて読み返すと、Bの優しさを誘発したのはCであるともいえる。保育者からの感謝の気持ちはBだけでなく、A、C、Dに対しても、今後もこれまで同様に持ち続け、かかわっていきたいと考えている。

5．おわりに

ダウン症児Aの他児とのかかわりについて、保育日誌にもとづき分析および考察を行った。本研究は、Aの変化の要因について論じるものではない。Aと他児とのかかわりを可視化することにより、その変化の在り方が定型発達児と変わりないことを示すことができたと考えている。もちろん、これも一概に言えることではなく、一例に過ぎないことも理解している。しかし、事前に、完璧にダウン症について理解していなくても、眼前の子どもの個性を把握しつつ、学びながら保育することにより、Aのようなかかわりの変化が見られるのであれば、より多くの保育所で、ダウン症児を受け入れることができるのではないかと考える。身体発達の遅れ、呼吸器、眼、鼻、

耳、歯、口腔、皮膚に問題が生じやすいことが、一般的に指摘されているが、早期治療により、日常生活に支障が無いことも多い。これらの問題についても、ダウン症児によって個人差が大きいため、保育所の側でも加配保育士がいないと保育が難しいと決めつけずに、ひとり一人と向き合うことが重要であると考える。

また、保育日誌を分析することにより、「なんとなくこうだったと思う」のように主観的、直感的に感じていたことを、明確に客観化できることも分かった。記録の重要性と、保育者自身の記録の蓄積が有意義な知見になることをあらためて実感できた。

参考文献：

［菅野2020］菅野敦，玉井邦夫，橋本創一，小島道生編，ダウン症ハンドブック改訂版：家庭や学校・施設で取り組む療育・教育・支援プログラム，日本文化科学社，2020.

［内閣府2020］内閣府，令和２年版障害者白書，2020.

［横浜市2022］横浜市こども青少年局保育・教育認定課，「横浜市給付認定及び利用調整に関する基準の一部改正に関する意見公募について」に対して寄せられた御意見について，https://www.city.yokohama.lg.jp/kurashi/kosodate-kyoiku/hoiku-yoji/shisetsu/hoikuriyou/r05kijunkaiseikekka.files/0012_20220906.pdf令和４年９月12日.

［玉井2016］玉井浩，里見恵子編，ダウン症児の学びとコミュニケーション支援ガイド，診断と治療社，2016.

i）担任が休みの際には他保育士が記述している。

講評：保育日誌の分析にもとづくダウン症児Ａと他児とのかかわりの変化の可視化

評者：小林　芳文

入園してきたダウン症児の成長や発達について、どのような保育をするのが適切であるかそれを探るために、日常の記録や観察を保育日誌に着目して分析したことは、素晴らしい研究の試みと言えます。ご存じのように、近年、インクルーシブ保育が叫ばれるようになり、その対象児を支える実践について色々な報告や取り組みがされるようになりました。

保護者の願いも受け入れて、対象児と他児とのかかわりを、ことば（言語）に目を向けて継続観察をしたことで可視化したことは、「保育園、子ども、保護者」のトライアングルシステムであり、１歳から卒園までの障がい児の持続的な支援に、大切な流れを作ったと言えます。その点からも、Ａ児の全体的な発達の情報の記述が添えられ、その状況をもう少し遊びなど具体的に整理されていたら良かったと思います。今後の継続的な保育を期待しています。

評者：石川　昭義

この研究は、園で初めて保育することになったダウン症１歳児Ａと、同じクラスの１歳児３名とのかかわりをたどったものです。その可視化及び考察の方法として、保育日誌の記述内容を分析するという方法をとったことは、とてもいい試みでした。つまり、保育を振り返る際の素材としての活用方法を示唆するものでした。保育日誌の記述自体において、子どもの様子を細かいところまでうまくとらえて文章化していたと思います。こうした日誌の分析を通して、子どものかかわり方を丁寧に振り返りつつ、日頃直感的に感じていたことを改めて確認する（可視化する）ことができたことは、評価できます。一般的に、日誌に書く内容は限定されてきますが、たとえば、Ａ児の保育をめぐる保護者との対応の中で、特記すべきことやエピソードがあれば、考察の幅も広がったのではないかと思います。

今後は、保育日誌の振り返りを通じて、保育士自らの気づき、さらに保育士相互の気づきを考察に加えていけるとさらに良い研究になると思います。

評者：髙木　早智子

この研究で私が優れていると思った事は、保育者が日々つけている保育の記録を分析し、数値化することで、保育者が自身の保育を客観視することが可能であることを示した点です。

「つけなければならない」からつける記録ではなく、日々の保育を振り返るための重要な資料となることを示したことは、保育の質の向上を目指す他の保育者にも参考になると思います。また、初めて園としてダウン症児を受け入れた時に、加配がいないと保育ができないと決めつけず、他の園児とのかかわりを分析することで、本児の入園後の変化が他の児と何ら変わりがないことに気づきを得られたことも、保育者として大きな財産となったのではないでしょうか。

惜しい、と感じたのは、データが１歳児の半年間でしたので、これが卒園までの記録として蓄積され分析されると、かなり内容の濃い実践研究になるのではないかと思います。この研究の継続と次回のご応募を心よりお待ちしています。

《課題研究部門》

課題研究②　遊びと学び
２歳児の遊びと学び「自然を感じる～光と影から色・形への気づき～」

三重県・認定こども園杜の街ゆたか園　**二宮　歩美・加藤　あや音・森田　愛菜**

１．はじめに

当法人は、「あそびは教育である」という基本方針のもと、子どもたち一人ひとりが愛情を感じ、心身ともに安心して過ごせ、いろいろな遊び体験を通して強い心と感性ゆたかな子どもを育てる環境づくりに努めている。その中で子どもの「やりたい！」「ためしたい！」といった知的好奇心を子どものつぶやきの中から読み取り、実現できる環境を整えたり共に考えたりしながら遊びの中で主体的に学んでいく教育・保育を行っている。

このような方針を実現するために、０歳児から子どもが自ら考え、選び、行動できるような関わりを心がけており、２歳児では、自然環境の中で十分に探索し、五感を使った気づきや学びを保育教諭と共有しながら、ゆたかな感性を育んでいくことを目指している。

２．ねらいと目的

①「あそびは教育である」と言う理念に基づき、子どもたちの自然への興味・関心や発見を共有しゆたかな感性を育む環境を通した保育をすることで、２歳児なりの学びを確認する。

②２歳児の好奇心に合わせた遊びを提案していく中で、どのように遊びが広がっていくかを実践の中で観察する。

３．研究期間

令和４年４月～10月

４．実践の経過

＜影＞

【事例①電車ごっこ】

４月、電車の好きなＨくんが、いつものように園庭の砂場で電車の玩具で遊んでいた。その日は日差しが強く、大型遊具の影がくっきりと出ていた。Ｈくんは、初めは砂場の枠を線路に見立てて電車を走らせていたが、影を見つけると、そこを線路に見立て走らせるようになった[写真１]。

写真１

それを見ていたほかの子どもも、真似をして遊ぶようになった。

【考察①】

４月初旬の進級してすぐの頃、電車ごっこをしようと園庭に線を書いたが、まだたどって歩くことは難しく、月齢の高い２・３人が少し興味を持つだけであった。

そこで、まず線を認識することを目標にし、毎日何気なく線を引いて、一緒に上を歩いて遊ぶ事を続けていると、興味を持つ子どもが増え、５月にはたくさんの子どもが線の上を走ってあそぶようになった[写真２]。

写真２

線遊びが流行ってきたところで、フープを用意すると、電車のハンドルに見立てて線をたどる電車ごっこが流行りだした。また同じころ、砂場の車や電車の玩具を使って線の上を走らせる子どもや、自分で線を書き、線路に見立てて玩具を走らせる子どもの姿が見られた[写真３]。

写真３

そのような遊びをしている中で、Ｈくんが影に沿って電車を走らせていた。Ｈくんは影と認識していなかったかもしれないが、それを見ていたほかの子どもの中には、不思議そうに上のほうを見る姿も見られた。影が出来る仕組みへの興味はないと思うが、自然現象を不思議に思い、興味を持つことは思考力への芽生えに繋がる姿だと考えられる。

４月当初の子どもの姿を見て空間認知の目標を設定し、遊びの中にさりげなく取り入れることで、遊びながら目標を達成し子どもたちが線を認識できるようになった。また、それに伴い影の存在にも気づくことが出来たことで、遊びの広がりが感じられた。

【事例②動いてる！？】

５月に園庭で遊んでいる時、Ｋちゃんがじっと地面を見ていた。自分の影に気づいたようで、何やら考えている様子。そのうちに自分の影だと気づき、手や足を動かし始めた。面白くなってきたようで、ダンスをするように体を動かしたり、いろいろなポーズを取ったりし始めた［写真４］。それを見ていたＭくんも、じっと自分の影を見て、手足を動かしていた［写真５］。

写真４

写真５

【考察②】

子どもが、影が自分と同じ動きをすることに気づいた瞬間の事例である。初めは何か分からずじっと観察していたが、髪型やスカートの形を見て、自分だと分かったようだった。

自分の動きに合わせて柔軟に反応してくれる影と遊ぶことで子どもは自分の欲求や意志が受け止められたと感じ、そのため興味を持って身体を動かし続けたのではないかと考える。また、影の存在に気づき、面白さに繋がって影と遊び続けるＫちゃんの姿を、保育者が声を掛けることなくそっと見守り続けたことで、Ｋちゃんと影との対話の時間が出来たのではないかと考える。

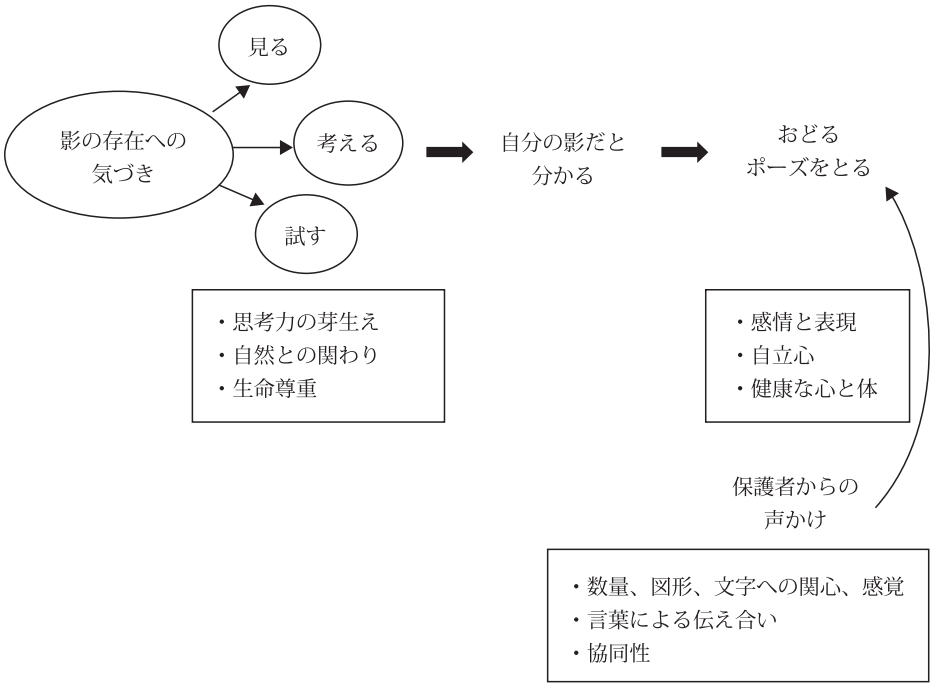
10月には、散歩の帰り道に、たまたま逆光になっていたため進行方向に自分の影が出て、「うごいた！」「くろい！」と大騒ぎしている場面があった［写真６］。

５月に影に気付いたＫちゃんは当時３歳０か月、10月に影に気づいた子どもたちは２歳８か月～10か月の子どもたちだった。そのため、影を認識して「おもしろい！」と感じるのは、３歳前後だとこの事例から分かる。

写真６

また、この事例から読み取れる幼児期の終わりまでに育って欲しい資質・能力（10の姿）が考察をすることで、２歳児の姿の中にも10の姿を読み取ることが出来た［図１］。

図１　事例②から見てとれる幼児期の終わりまでに育って欲しい資質・能力



【事例③すずしいね】

７月の暑い時、いつも水分補給している木陰が、日向より涼しいことに気がついたＹちゃん。「あたまあついからこっちにおいで！」と友だちを日陰に誘う姿が見られた。また、日向で帽子を触り「あたまあつい！」と言ったり、日陰に入って「ちょっと暗いね。」と話したりする姿があった［写真７］。

写真７

【考察③】

７月には、日差しが強くなり一層影が意識しやすくなったことから、影を踏んで遊んだり、地面の色が違うことを不思議に思ったりする子どもの姿が増えたように思う。また暑い時期なので、園庭でも水分補給が出来るように木陰に水筒と椅子を用意し、休憩を促していた。その中で「何でここでお茶飲むん？」と言う子どものつぶやきが聞こえ、「汗をかいたから、お茶を飲もうね。」「涼しいところで休憩しようね。」などと話しているうちに、日向と日陰の温度の違いを体感したようだった。違いに気づいた子どもたちは、自然に日陰を選んで遊んだり、休憩したりするようになった。この姿から、日々の遊びの中で自然環境と関わり、その感覚を繰り返し味わうことが子どもの体験をゆたかにし、自分で考え判断する力の基礎となっていることが分かる事例である［写真８、９］。

写真８

写真９

【事例④はっぱのかたち？】

８月末、日向を避けて園庭のカエデの木の下で遊んでいた子どもたちは、カエデの葉っぱの影の形に気づき、地面になぞり始めた［写真10］。

また、９月にはイチジクの葉が落ち始め、Ｋちゃんと Ｒちゃんは拾って観察を始めた。大きな葉っぱの形が手に似ていることに気づき、「どっちがおおきい？」と自分の手を合わせて大きさ比べをしていた［写真11］。

写真10

写真11

【考察④】

夏ごろから、日差しを避けて日陰で遊ぶ事が多かった子どもたちは、日陰の中にも形があることに気づいた事例である。今までは日向と日陰、明るい・暗いという大きなカテゴリーで認識していた子どもたちが、形に注目するようになったことが読み取れる。大小の対比、形の認識など２歳児で獲得したい能力の１つである力が、遊びの中で自然に学ぶ事ができたと感じられた。また、身近な自然物の色や形に気づき、「おおきいね。」「きいろいね。」などと心動かされる経験を重ねることは、幼児期のゆたかな表現に繋がるので、子どもが感じた感動を受け止め、共有することを大切にしたいと再確認した。

＜光＞

【事例⑤光ってるよ！】

ままごとコーナーにある、ジュースに見立てたペットボトルの容器に、光が当たって色が透けて見えることに気づいたＲくんが、机に一列に並べ、「きれい！」「にじみたい！」と遊んでいた［写真12］。

写真12

それを見ていたＭくんが、「いっしょ！」と言って黄色い車の玩具を持っ

てきた。するＲくんは何かを思いついたようで、車の玩具の入ったかごを全部持ってきた。何をするのかと観察していると、色々な色のペットボトルの並んでいる間に、同じ色の車を並べ始め、また、「きれい！」と話していた［写真13］。

写真13

また別の日、今度はウッドデッキにジュースを持ってきて太陽の光にあてている姿が見られた。Ｒちゃんは、光が手に映ることに気づいたようで、ジュースの角度を変えながら自分の手に映したり、光にかざして中の紙の動きを見たりして「きれい！」と話す姿が見られた［写真14、15］。

写真14

写真15

【考察⑤】

ままごとで遊ぶ中で、子どもたちがジュースの容器に光が当たると綺麗な色が出ることに気づき、そこから遊びが広がった事例である。子どもたちは、太陽の光が差し込むことで、ジュースの色が手や机に映ることを遊びの中で発見し、自分の手に映るにはどうしたらいいか考え工夫していた。ペットボトルの色と車の色を合わせて「いっしょ」だと言い、色別に並べたＲくんの姿から、秩序を好む姿が見て取れる。子どもが、身の回りの環境の中で不思議に思ったことを、納得のいくまで試すことで、自ら新しい遊びを生み出す力となり、その基礎が２歳児ではすでに育っていることが感じられた。

【事例⑥アンブレラスカイ】

９月～10月の天気のいい日に、園庭にアンブレラスカイを置いた。地面に色がついていることを喜び、影を踏んでみたり、「あか！」「あお！」と色の名前を言ったりしていた。

その中でＲちゃんが、色がついている砂を集めようとしていた。傘の下に行き色のついた砂をお皿に入れ持ってくると、普通の砂になる。「あれ？」といった様子でもう一度繰り返す。「なんでかな？」と問いかけると、不思議そうにする姿が見られた。［写真16］

写真16

別の日には、ＨくんとＡちゃんが隣で色水遊びをしていたところ、色のついた傘の影に気づき、色水を混ぜて出来た色のカップを持ってきた。自分の作った色水と、影の色を見比べて「いっしょ！」と、色水と同じ色の傘の下に並べる子どもの姿が見られた［写真17］。

また別の日には、月齢の高い子どもたちが傘の影を家に見立て、「おじゃまします！」と言い合いながら傘の影を行ったり来たりして遊ぶ姿が見られた［写真18］。

写真17

写真18

【考察⑥】

影や光に関する遊びを繰り返すうちに、色に興味を持ち始めた様子が見られたので、アンブレラスカイを置いてみた。赤・黄・青・緑・オレンジ色の傘を用意したところ、ほとんどの子どもが色を認識できることが分かり、色の名前を言いながら影から影へジャンプで移動する姿が見られた。また、傘の影を家に見立てて「おじゃまし

ます」と出たり入ったりする遊びでも、色のついたところを形として認識し、想像力を働かせてごっこ遊びに発展していく姿がとらえられたように思う。同時にこの場面では、日常生活で交わされる言葉が子どもの中に身についているということと、挨拶をすることが心地よいことだと感じていることが表れている。

5．まとめ

今回の半年にわたる事例研究を通して、子どもの興味・関心に即した環境構成が大切だと改めて感じることが出来た。２歳児は感覚の敏感期であり、明るい・暗い、暑い・涼しい、同じ（色・形）、大きい・小さいなどを感じられるように意識して環境構成をしている。

日々の保育の中で自然環境を意識して、五感を刺激するような遊びを取り入れることで、今回のような様々な事例検証ができたと思う。また、毎日同じ場所で食事をしたり、同じ場所で午睡をしたりと、秩序を好む時期であるということを念頭に、遊び面でもいつも同じ場所に玩具がある、玩具を色別に分けて入れてあるなど、秩序を意識して環境構成をすることを心がけている。事例⑤では、そのような環境の中、子どもが「いっしょ！」と感じた時にすぐに玩具を持ってきて試す姿が見られた。

人的環境としての保育者の子どもとの関わり方については、子どもが物との対話がじっくりできるように見守ることを大切にしている。子どもがじっくりと考えている時は声を掛けずに静かに見守り、返答を求められたときに肯定的・応答的に関わることで、「大好きな先生に肯定されて嬉しい！」という経験が得られ、子どもの自己肯定感や自尊心を育むと考えている。これらの経験を重ねることで、主体的に遊びに向かう力の基礎を作り、異年齢保育に繋げていくことを目標にしている。また、これらの事例を通して、法人の理念である「あそびは教育である」という考えが子どもの主体的なあそびを尊重し、非認知能力を養うことにも繋がると改めて感じることが出来た。

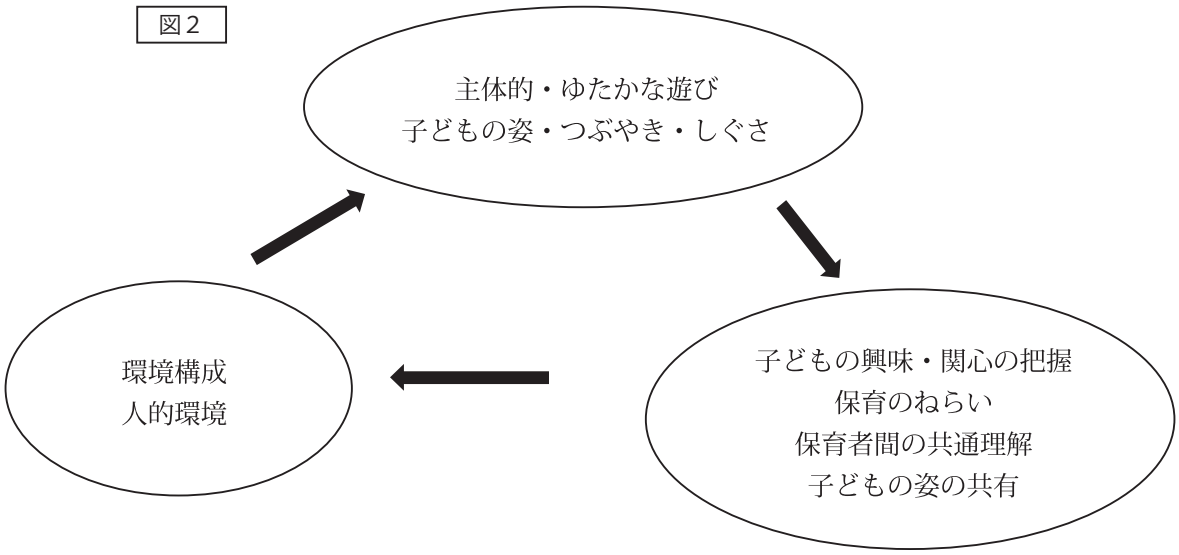
日々の保育の中で、保育者同士で子どもの姿・事例・エピソードなどを共有し、子どもの興味・関心・理解が深まるあそびを考え、話し合い、環境構成をして新たな子どもの姿を考察し、遊びを進めていくことを大切にしている［図２］。

6．今後の課題

今回いろいろな事例研究を通して考えることができ、子どもの姿やつぶやきを丁寧に拾い上げ、保育者間で共有して深め合い、環境構成や人的環境としての保育者の関わりの見直しを行っていくことで、次の子どもの姿や子どもの発達や興味関心の深まりにつながっていくということが分かった。

日頃の保育を振り返ると、保育者間での子どもの姿の共有、事例検討等が十分に出来てないという現状に気付くことが出来たので、今後、子どもの姿・つぶやき・しぐさなどを一つずつより丁寧に拾い上げて考察し、子どもと一緒に学んでいきたいと思う。

図２



講評：２歳児の遊びと学び「自然を感じる ～光と影から色・形への気づき～」

評者：小林　芳文

「遊びは教育である」との保育方針の下で、研究の着眼点にふさわしい素晴らしい研究として受け止めました。２歳児の保育にその発達的な側面と好奇心を組み合わせて、遊びの場つくりでの観察が巧みな写真を添えており、そこに実践の経過がいきいきとして記述され、評者の私自身がその場にいるように引き込まれる展開となっていました。

線遊びから始まり、そこにフープが用意されて、電車ごっこへと発展する。自分の姿の影に気づき、自己意識の発達に必要な身体意識の芽生えがつながっていることに考察したこと、そして事例③④では他者意識、そして葉っぱの形の空間意識への発達とよく研究の視点が発展して観察されています。事例⑤、事例⑥も色という知覚意識に目が向けられていることが良かったことです。この研究をさらに発展させてください。この研究につながる「ムーブメント教育」について学ばれることをお勧めします。

評者：田和　由里子

「遊びは教育である」という理念に基づき、子どもたちの自然への興味・関心や発見を共有し、豊かな感性を育む環境を通した保育をすることで、２歳児なりの遊びを認識しています。２歳児の好奇心に合わせた遊びを提案していく中で、どのように遊びが広がっていくかを実践の中で確認するなど、ねらいと目標に掲げた内容です。４月から10月の短期間でした。

〈影〉では、遊具の影を線路に見立てて電車を走らせたり、自分の影が自分と同じ動きをしたりと、子どもたち自身が発見できるよう環境構成が整えられていました。〈光〉では、ジュースに見立てたペットボトルの容器に光が当たって、色が透けて見えることや、自分の手に映したりして、新たな発見があり、遊びが広がっていった事例など、写真と共に掲載されていたので様子が伝わりやすかったです。日々の保育の中で、自然環境を意識した五感を刺激するような遊びを取り入れることや、感覚の敏感期である２歳児を取り上げる事により、様々な事例の検証ができたように思えます。

今後も職員間で情報を共有して頂き、環境構成や人的環境としての保育者の関わりなど、日々の保育に活かし、また、他の年齢での実践も行ってみていただきたいです。

評者：日吉　輝幸

杜の街ゆたか園では、「遊びは教育である」という保育方針のもと、日常の子どもの姿や、つぶやきの中から、子どもの知的好奇心を読み取り、人的・物的環境を構成して、子どもの主体的な遊びが行えるよう心掛けているとのことです。

今回の研究レポートでは、２歳児の活動について「遊び」の中から垣間見られる「教育的視点＝学び」について分かりやすく記述されていました。また、遊びの中で、子どもの偶発的な発見のみならず、様々な環境素材を準備（設定）しているところがとても秀逸だと思えました。例えば、園庭にアンブレラスカイを設置しているとの記述がありますが、新しい視点も保育環境に取り入れており、保育者の発想に好感がもてました。研究テーマのサブタイトルどおり、「光と影、色と形」を題材にした様々な場面の記述の中で、子どもの感性やつぶやきを保育者が適切に理解し、関わっている様子が伺えました。“子どもの主体性を大切にする”とは、まさにこのような関わりを言うのであろうと、筆者自身改めて学ばせていただきました。引き続き他の年齢の事例も実践研究を重ねて、公表していただきたいと願います。

〈自由研究部門〉

乳児保育園における怪我・かみつきの分析と対策について

東京都・府中めぐみ保育園　**岡安　莉沙**

1　問題と背景

当保育園は０・１・２歳の乳児保育園である。０歳児の発達の特徴としては、歩行の獲得・人見知り・言葉の獲得・離乳食から幼児食への移行などがあげられる。１歳過ぎからは自我が芽生え、言葉の発達では、1歳後半からは、２語文を話し始める等、目覚ましく成長をしていく。その過程の中で、個人の差はあるが、言葉を理解しても、言葉で表現することができず、かみつきという形で自分の気持ちを表現することがある。その際、保育者は決して怒らず、かんだ子とかまれた子の間に入り、それぞれの気持ちを受け止めていきながら、お互いの気持ちを伝えている。また、保護者には、その状況をわかりやすく伝え、けがの処置を丁寧に説明している。しかし、保護者にとっては、子どもが子どもに噛みつくことが理解できないこともあり、保育者は苦悩している。

当保育園では、かんだ子の名前は保護者には伏せているが、かみつきが続くことで、「同じ子がかんだのか」と問いただされることもしばしばある。保育者が保護者との関わりで悩むところである。しかし、子どもにとってかむということは、自己表現の一つであり、友だちへの興味が芽生えたことと捉えられる。特に乳児保育園にあっては、子どもの言葉の表現力が幼児に向けて獲得途中であるので、「かみつき」は乳児の気持ちの表現としての意味を持つ。

保育所保育指針では、

第２章「保育の内容」

２　１歳以上３歳未満児の保育に関わるねらい及び内容

イ　人との関わりに関する領域「人間関係」

（ウ）内容の取扱い

②思い通りにいかない場合等の子どもの不安定な感情の表出については、保育士等が受容的に受け止めるとともに、そうした気持ちから立ち直る経験や感情のコントロールすることへの気づき等につなげていけるように援助すること。

とある。

かみつきという行動が一つの不安定な感情の表出と考えられる。

2　目的

当保育園では怪我が発生した際に、クラスごとに怪我やヒヤリハットを所定の記録用紙に記載している。（図１記録用紙を参照）

またそれを、副主任が月ごとに集計・分析・考察を行い、改善策を出している。

本研究ではその１年間の記録データを用いて

・かみつきの実態を保育者で共有し、怪我防止策を検討、日々の保育における防止の取り組みを考察する。（保育者の危機管理能力の向上を図る。）
・かみつきからの保育内容・保育環境を振り返り、子どもが夢中になって遊べる環境を検討することを目的とする。

3　研究方法

・調査対象期間　令和３年４月１日～令和４年３月31日
・対象児童　０歳児９名　１歳児13名　２歳11名
・１年分の記録用紙（図１記録用紙を参照）を活用する。
・１年間の各クラスの怪我に対する集計・分析・考察を

No.	氏名	日時	種別	発生場所	部位	相手児童	状況	処置	記入者
		日（　） ：	□噛みつき □ひっかき □打撲 その他 （　　）	□（　）歳児室 □ギャラリー その他 （　　）		有・無 （　　）			
		今後の対策							
	保護者報告：いつ（　　）だれに（父・母・（　　））だれが（　　）報告した								

図１　記録用紙

行う。
・その中から1年分の「かみつき」のデータを抽出し、年齢ごとに分析し傾向を見極め、対策を模索する。

4　怪我に対する考察

（1）怪我の発生状況のまとめ

１年間の、全クラスの怪我の件数は、０歳児クラスが84件（内ヒヤリハット14件）・１歳児クラスが311件（内ヒヤリハット16件）・２歳児クラスが77件（内ヒヤリハット5件）であった。総件数は472件（内ヒヤリハット35件）であった。（図２令和３年度怪我集計結果参照）

件数は472件となっているが、当保育園では、様々な怪我をすべて書き出しているため、小さな怪我も多くあるが、その小さな怪我の状況・今後の対策を検討・対応していることで、市への届け出を要するような大きな怪我に繋がっていないと考える。

４月頃は戸外での怪我が多く、公園内の植え込みの後ろ側で転んで怪我をすることもあったので、担任間で公園内の遊ぶ場所を話し合い、安全に遊ぶ場所を設定していった。また、新年度ということもあり、感情が高ぶっており、転んで怪我をすることもあったので、保育者が穏やかに声掛けをし、慌ただしくならないようにしていった。

６月頃には園生活にも慣れてくる。０歳児クラスでは、４・５月産まれの児が、這い這いやつかまり立ちをして活発に動くようになったことで、転倒による打撲の怪我が増えてきた（6月／3件）。保育者は、安全に楽しく遊べるように、保育者間で一人ひとりの発達や特徴を理解していくようにした。

１歳児クラスでは、友だちへの興味も芽生えてきたことで、玩具や場所の取り合いが出てきた。場所の取り合い等が原因でトラブルになることがあった為、遊びこめる環境を整える等、保育環境の見直しを行っていった。

２歳児クラスでは、室内で走って転倒することがあったことで、室内環境を整え、各コーナーに保育者がついて一緒に遊びこめる環境を作っていった。

６月頃から０歳児クラスでもかみつきが出てくるようになる。状況としては、玩具の取り合いでかまれているため、自我が芽生えてきて、友だちの存在に興味が出てくるようになったことで、かみつきが出てきたと考える。一人ひとりへの気持ちに寄り添って安心して過ごせるようにしていった。

１歳児クラスでは、室内滑り台が設置してある為、滑り台でのトラブルが多く出てきた。低月齢児のかみつきも出てきている。

夏場では、熱中症のリスクを避けるため、戸外に出ることが難しく、室内遊びが中心となったことも影響しているのではないかと考える。

２歳児クラスでは、友だち同士でのトラブルが少なく、転んで手を擦るなどがみられるが、転んだ際に手をついており、大きな怪我にはつながっていない。

10月頃になると水遊びが終了し、戸外遊びが中心となる。１歳児クラスでは、１年の中で最もかみつき・ひっかきの怪我が多い時期ということがわかる（図２令和３年度怪我集計結果参照）。発生場所は、室内での場所の取り合いや散歩車内等、狭い空間での発生がほとんどであることがわかった。言葉も増えてきた中で、友だち同士での関わりや同じ空間での遊びも楽しくなってくる時期である。その中で保育者は、子どもの気持ちを受け止めていき、仲立ちしながらお互いの気持ちを伝えていく必要がある。年度末では各クラス、かみつきは減ってきている。

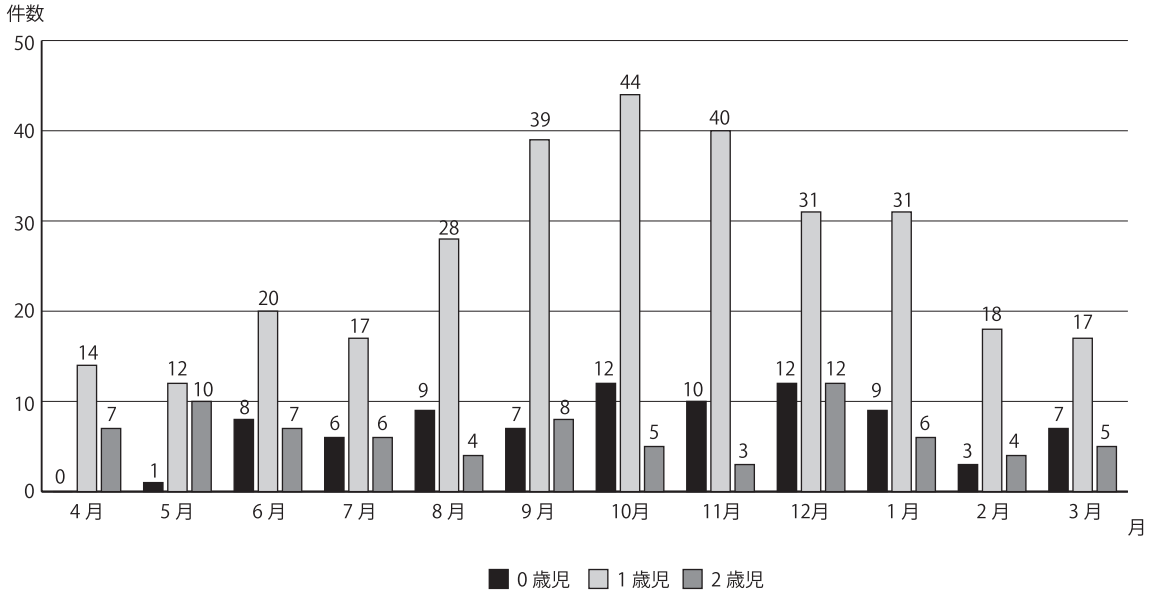


図２　令和３年度　怪我集計結果

１・２歳児クラスでは、子どもの心や言葉の成長、保育者の仲立ち・保育環境を整えていったことで、かみつきひっかきという行動が減ってきたと考える。

（２）各クラスの怪我の傾向と考察

【０歳児クラス　怪我84件（内ヒヤリハット：14件）全体の17.7%】

０歳児クラスでは、転倒での打撲の怪我が42件であった（全体の8.8%）。０歳児クラスでは、這い這いや歩行の獲得時期であり、転倒しながらも歩行や這い這いを獲得していく。

近年は、転んだ際に手が出ず、口や歯を怪我する子どもが多くなっているといわれている中で、歩行前からの体づくりや保育者の援助は重要になっていると感じる。

保育園としては、歩行前から、四つ這いを促す遊びを多く取り入れ、手足を鍛え身体づくりをしていく。保護者にも、発達過程での這い這いの重要性を丁寧に伝えていくことで、成長した際も、転倒しても手が出て自分の身を自然と守れるようになるのではないか。

４月生まれ等の、クラスの中での高月齢児は、夏ごろから自我が芽生え、友だちと関わりたい気持ちも出てきている。その中でかみつき・ひっかき等も出ている。

室内環境の見直しを含め、その他の要因では、子どもが安心して過ごせるように、子どもの表情を見て思いをうまく表現できていないときは、抱っこや、ギュッと抱きしめ、保育者とのスキンシップを多く取るなどしていくことで、心身共に安心して過ごすことができるのではないかと考える。

【１歳児クラス　怪我の件数　311件（内ヒヤリハット：16件）全体の65.8%】

１歳児クラスの年間の怪我の総件数を見ていくと、緩やかに上がってその後下がっていることがわかる（図２令和３年度怪我集計結果参照）。311件は全体の65.8%を占める。

１歳児の発達として、言葉が増え始め、友達との関わりに興味が出てくる時期に、友達とのやり取りからのトラブルや玩具・場所の取り合いがかみつきとして表れている。１歳児クラスでは、怪我に繋がりそうなヒヤリハットが16件出ていることや、後期は、子どもの言葉も成長し語彙数が増し、思いが相手に伝えられるようになったことで、少しずつ怪我の件数が減っていると考える。

【２歳児クラス　怪我の件数77件（内ヒヤリハット：5件）全体の16.3%】

友だち同士のトラブルからひっかく等も5件あったが、０・１歳児より、子ども同士の関わりが上手になり、保育者が少しアドバイスをすることで、自分たちで考え、言葉で解決することができるようになったことで、かみつきやひっかきをすることが減ったことが、件数が少なくなった要因につながると考える。

転倒から、膝や手のすりむきなどの怪我も多くあったが、自分で手をついて転ぶことが多かったことから、大きな怪我につながらなかったことが考えられる。

そのため、やはり、０歳児クラスからの体づくりは重要になることがわかる。

（３）　考察

怪我には、保育環境プラス様々な要因が関わっているのではないかと考える。

１歳児クラスから入園した子どもが多い場合は、保育園が初めての集団生活であり、保育者との関わり・信頼関係も０歳児クラスから進級した子どもとは違う。小さい怪我も考察して、今後の改善策を考え取り組むことで、保育者の危険察知の能力も上がることが考えられる。“あの時にここでこのようなことがあったから気を付けよう”と、保育者が記載することで、次回同じことがあった際に、気を付けて未然に防げる怪我もあると考える。

また、子ども自身がヒヤットした瞬間を、保育者が見抜く力・察知する力が必要になってくる。保育者自身の子どもの姿を見抜く力・保育者の観察力の向上が欠かせないと考える。

これらによって、子どもの表情を読み取る力をつけていくことで、大きな怪我をする前に、未然に止められる怪我もあるのではないかと考える。

５　１年間の「かみつき」の年齢ごとの分析と傾向

１年間の怪我の中では22.5%であった【かみつき】について分析を行っていった。

令和３年度の「かみつき」の全クラスの総件数は106件であった。怪我の中では22.4%である。

（０歳児クラス：18件・１歳児クラス：85件・２歳児クラス3件）（図３月別かみつき件数参照）

（１）かみつきの発生場所・時間

かみつきの発生場所は、室内101件、散歩車４件、戸外（公園）１件であった。室内では95.2%発生している。

当保育園は園庭が無いため、毎日の保育活動は公園での戸外遊びが中心となっている。しかし、かみつきの発生している場所からわかるように（図４かみつき発生場所参照）、かみつきは、狭い場所（散歩車内など）や保育室内を合わせると発生率は99%以上になる。

かみつきの発生時間は、7時～12時が73件、12時～15時が5件、15時～17時が18件、17時～19時が7件、不明3件であった。（図５かみつき発生時間の件数）

かみつきが多く発生しているのは、早朝の時間帯と、散歩から帰園後の、室内遊びをする午前中の時間帯で68.8%になっている。（表１かみつき時間別の件数及びパーセンテージ）

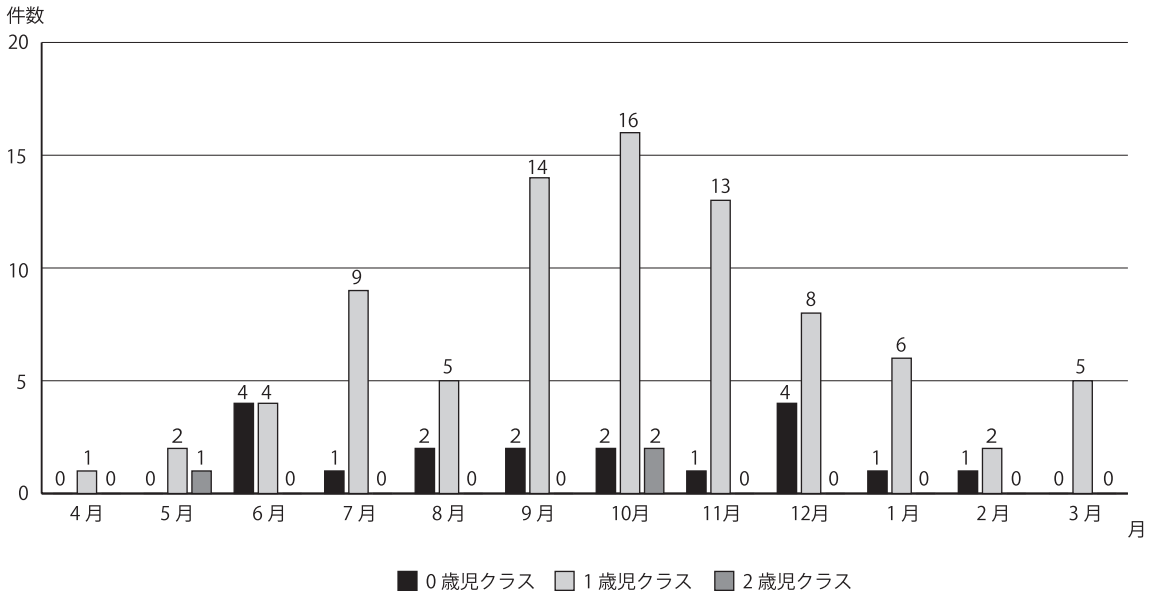


図３　月別　かみつき件数

表１　かみつき　時間別の件数及びパーセンテージ

時間		件数	%
午前	7時～12時	73件	68.8%
午後	12時～15時	5件	4.7%
午後	15時～17時	18件	16.9%
午後	17時～19時	7件	6.6%
不明		3件	2.8%
合計		106件	100%

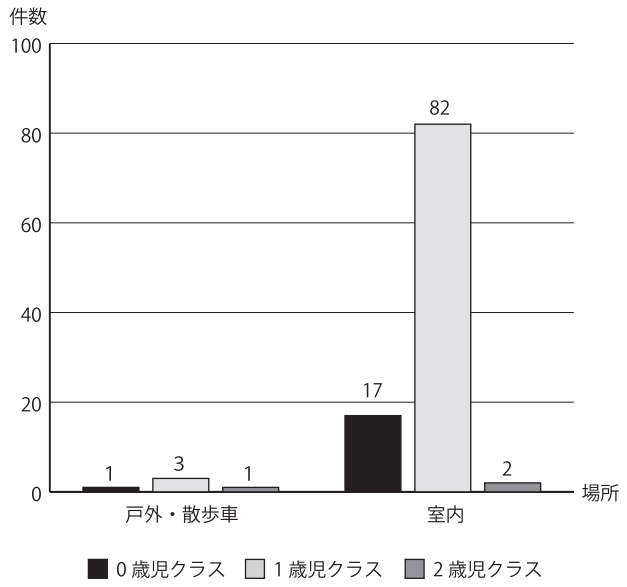


図４　かみつき　発生場所

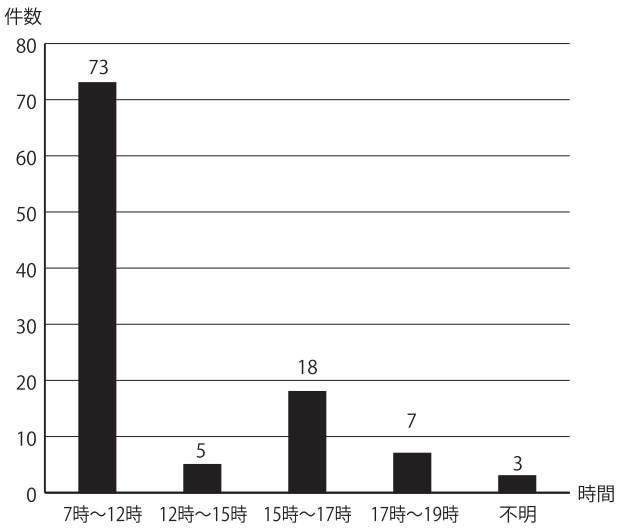


図５　かみつき　発生時間の件数

そこから考えられることは、かみつきにあっては、室内の環境構成や保育者の関わり方がより重要であることがわかる。

実際に２歳児クラスでは、言葉の発達・友だち同士での関わりが成長したこともあるが、室内で子どもが夢中で遊び込める環境づくりが功を奏したことで、友だち同士での場所の取り合いや玩具の取り合いがほとんど発生しなかった。

（２）かみつきの発生状況

０歳児クラスでは、１歳１か月ごろから場所や玩具の取り合い等でのかみつきが発生している。「友だちの顔や口が気になり手を入れてかまれる。」という状況もあるが、ほとんどが、トラブルがあり、“嫌だった”等の不快な気持ちをかみつきという行動で表出していることがわかる。

また、全クラスで件数が多かったのは、１歳児クラスであった。１歳児の発達の中で、子ども同士のやりとりや遊びが多くなっていき、その中でお互いの気持ちがぶつかり、言葉で「嫌だ」というが、その言葉に怒って噛みつく等、０歳児とは同じ取り合いの場面でもお互いの気持ちを伝えあう中で上手くいかず、かみつきという行動が表出していることが多い。

２歳児クラスでは、3件であるが、友だちにやってあげたい・手伝ってあげたい気持ちと、相手児の自分でやりたいという気持ちがぶつかって、トラブルになっていることが考えられる。

１歳は自我が芽生えるが、自分の気持ちが相手にうまく伝えられない、２歳児はコミュニケーションの中でのトラブルから、保育者は同じかみつきでも子どもの発達に合わせた関わりや遊び方・環境構成で、状況が異なるのがわかる。

（表２かみつき原因別の件数及びパーセンテージ参照）（図６かみつき原因別の件数参照）

（３）事例１　A児の追跡と保育者の関わり

令和３年度の【かみつき】を抽出した中で、令和３年10月11日（月）～15日（金）の１週間の中で、10月12日（火）・13日（水）・13日（水）・14日（木）の間にＡ児の４件のかみつきが発生している。

表２　かみつき　原因別の件数及びパーセンテージ

原因	件数	%
取り合いでかまれる。	96件	90.5%
急にかまれる。	3件	2.8%
口に手を入れかまれる。	4件	3.7%
不明	3件	2.8%
合計	106件	100%

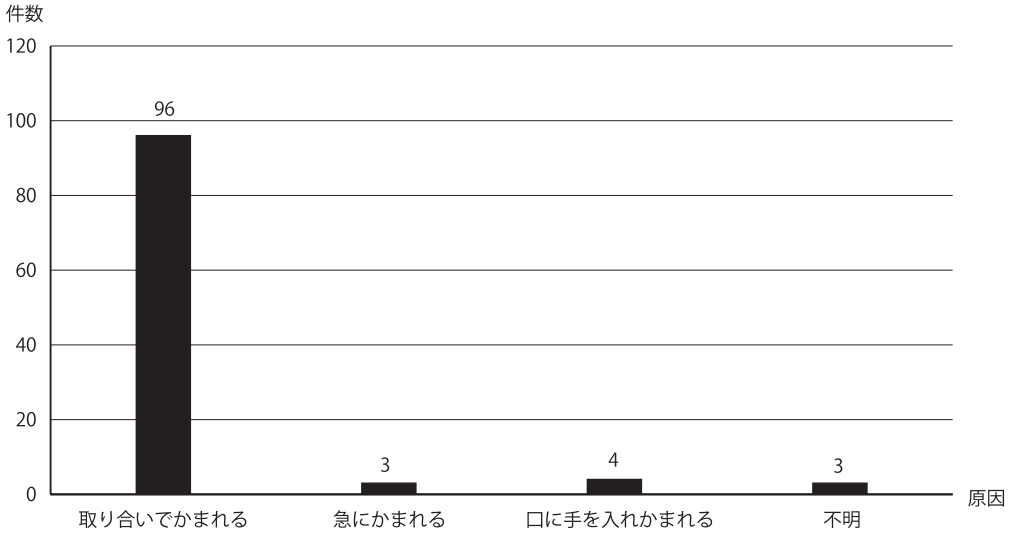


図６　かみつき　原因別の件数

その週の保育者と本児の関わりでは、10月11日（月）の保育日誌に、「心穏やかでなく手や口が出やすい」と記載がある。当日は、散歩先で十分に遊んだことが保育日誌からは読み取れることから、A児も戸外で遊びこめていたのではないかと考える。

12日（火）、13日（水）は悪天候のため、室内保育を行う。また、14日（木）は室内で行事が行われる。

この週の、A児のかみつきがすべて室内で発生していること、隣にいた児を突然かむ。泣いていた児をかむ。11日（月）にも“心が穏やかではない”と記載がある。心が穏やかではないとは具体的に何が原因であるのか。例えば、朝ご飯を食べておらずおなかがすいていた、朝の登園の際に保護者と離れる際にうまく別れられなかった、体調が悪かった等。そのようなことまで、保育者は考え、保育をしていかなければならないと考える。また、保育園生活で、A児が安心して過ごせる物的・人的環境づくりは十分であったか。遊びこめない環境であると、子どもも何をすればいいのかわからず、安心して過ごすことが難しくなる。

そのような中からも、子どもが安心でき、夢中で遊びこめる室内の環境づくりや人的な環境（大人の声の大きさ）の大切さがわかる。

（4）かみつきに対する考察

今回のかみつき発生場所は、室内での発生が95.2％である。そこから考えられる問題点は、保育室内で更に夢中で遊びこめる環境を作っていくことにあるのではないかと考える。

一つひとつのコーナーの充実や、そこでの保育者の子どもへ関わり方などが課題だと考える。各クラスで、子どもが主体的に遊べる保育室の環境構成を設定しているが、全職員で全クラスの環境構成を更に考えることも必要だと考える。

園内研修や外部研修等で、環境構成について学び、話し合いを新年度前に行うことで、子どもが夢中で遊び込める環境づくりができるのではないか。

6　職員の意識

令和４年度に、職員会議を通して、全職員に向けて副主任から月ごとの怪我の件数を報告・分析し、改善点を話し合っている中で、職員の意識の変化としては、クラス職員からは、次のような意見があった。

「いつ怪我が起きているかが一覧になって記載されている為、例えば月末だったら自分に余裕がなかったのが原因かもしれないと、自分の保育を見直すきっかけになっている。」

「担任間でどこの場面・時間を、気を付けようなど話し合うきっかけづくりになっている。」

「怪我やトラブルの中で、担任間で話し合いはしているが、だれがどの時間でトラブルが多いか、その週に続いている等詳しく分析して話し合えていないので、集計結果を見ることで可視化して理解できている。」

「クラス担任ではないため、クラスの状況は常にクラス担任に話を聞いているが、どのくらいの頻度で怪我をしているかまでは実際把握できていない現状もある。しかし、職員会議での報告や改善点を、皆で話しあうことを通して気づくことができている。」

などの意見が出ている。

今回わかったこととしては、保育者は、１件１件の怪我については理解しているが、全体的な怪我やかみつきの件数・状況については、日常の保育業務の中から見えにくい状況にある。

そのことからも、分析や改善策を話し合っていることで、職員の意識も変わり、具体的に気を付ける場所・時間・状況を可視化している。

また、全職員で話し合うことで、怪我からみえる環境構成の見直し、保育への意識・クラス担当間で話し合うきっかけづくりにもなっている。

7　今後に向けて

・集計から見えてくるものとしては、前年度は１年間の集計のみであったが、令和４年度からは毎月、月ごとに各クラスからの怪我を集計して考察とグラフ化したものを職員会議で全職員に周知していく。
・そこから読み取れるクラスの状況や今後に向けて、クラスごとに話し合いを行うと共に、他クラス・他部署からの助言を行っていく。
・現在の様子としては、前期はかみつき・ひっかきが多いが、職員会議での話し合いを行うことを継続している中で、どの時間帯が多いか、どの場所が多いかを集計することで、かみつきの発生状況が職員の目に見えるようになっている。また、他クラスからの環境構成の助言等も参考にして、実際に環境構成を変えることをすぐに実行していくことが必要と考える。

8　おわりに

本研究では、かみつきの発生場所と発生時間に傾向があることがわかったので、特に重点的に対策を考えることが可能になった。かみつきという行動について、保育者は頭を悩ませることが多いと思うが、なぜその子はかまないといけなかったのか。保育者はその場面だけではなく、様々な背景を考え日々の保育をしていく必要があると思う。その子が嫌なことがあった時は、保育者が気持ちを汲み取ってくれ、自分の気持ちを我慢せず楽しい気持ちで保育園生活を過ごせるように、日々子どもの気持ちになって考え保育をしていきたい。

参考文献
・保育所保育指針　平成30年３月厚生労働省　編

講評：乳児保育園における怪我・かみつきの分析と対策について

評者：石川　昭義

この研究では、園内での怪我やヒヤリハットの記録を統計的に分析し、それをもとに保育士の話し合いによって対策を講じた経過がまとめられています。

かみつきの発生場所や発生時間の分析において、自園の環境の要因を推察しながら考察していることが優れていました。怪我やかみつきは１歳児クラスでの発生が非常に多く、年齢が大きくなるにつれてその件数が減少する様子であり、発達過程の特徴を客観的に示す結果になっていたと思います。職員会議などでの話し合いの機会が増えた様子や、保育者が危険を察知する力も付いてくる様子もよくわかり、夢中で遊び込める環境づくりという、園の課題につなげたことは良かったと思います。報告の中には、実際に環境構成を変えたことの実例の紹介があると、さらに説得力のある考察になったと思います。今後は、年度ごとの数値を蓄積することで、環境を変更したことの効果がどのように出ているかを検証していくことが期待されます。

評者：髙木　早智子

この研究で素晴らしいと思ったことは、怪我やヒヤリハットの収集がきちんとなされていることです。そして１年分という比較的長い期間の集計分析を行い、保育に反映させていった点は、他の保育者にとっても、貴重な資料となったと思います。特に、怪我の原因を職員間で話し合い、環境構成の見直しへと進んだことは「保育の質の向上」という点でも高く評価できると思います。

私がもっとも興味をひかれたのが「噛みつきの発生場所が室内で95.2%」というデータです。研究本文では、「一つひとつのコーナーの充実や、そこでの保育者の子どもへの関わり方」を課題として挙げておられました。ふと、「過密はかみつき」という言葉が思い出されました。ぜひとも、どのような環境構成をされ、保育者の関わりを変えられたのか、そしてその結果、怪我やヒヤリハットの発生数がどう変化したのか。そのことについて、実践研究発表していただけることを楽しみにしております。

評者：田和　由里子

０・１・２歳児の乳児保育園での１年間の怪我やかみつきの調査結果を報告されたものです。

０歳児の発達の特徴として、歩行の獲得・人見知り・言葉の獲得、離乳から幼児食への移行、１歳児は自我の芽生え、１歳後半からは２語文を話し始めるなど、その中で個人差はあるものの言葉を理解しても、言葉で表現することができず「かみつき」という形で自分の気持ちを表現することがあります。今回はこの事に着目して、日頃の保育の中で起こる小さな怪我も含めた調査結果でした。正直、小規模の乳児保育園での怪我の総数に驚きました。些細な怪我でも園独自の「記録用紙」に記載し、１年分を月別、年齢別にグラフで表されており、発達段階においての怪我やかみつきの状況が伝わりました。かみつきは、保育室で午前中の活動の時間で１歳児の年齢が最も多いことがわかります。このことから、保育者は保育室の環境構成や人的環境などを見直すことで、怪我などの件数が減るよう努力していけると良いと思います。次回もこの研究で行った分析や改善点を活かして、どのように変化があったかを報告していただきたいと思います。

〈自由研究部門〉

幼児教育施設と小学校の連携を円滑に進めるために必要なことは何か

石川県・大徳学園　**浅香　聡彦**

はじめに

これまで金沢市では、幼児教育施設（以後、園）と小学校の連携モデル事業として、毎年５施設同士で相互交流を行っていた。令和２年度には、金沢市の幼児教育センターが幼児教育の方向性について表した、「かなざわ幼児教育みちしるべ」（図１、以後みちしるべ）を策定した。これを活用することで、家庭や地域で幼児教育について理解を深め、園と小学校との連携の際の共通言語になることが期待されている。

先行研究では、園と小学校の連携事業は各自治体の公立施設同士や付属の幼稚園、小学校、隣接した施設のものが多く、多数の園から進学する小学校と１つの私立民間園との研究は少ない。この研究では、金沢市における１園と１小学校間の試行的な取り組みから、両施設間の連携が円滑に進むための方策を考えてみたい。

目的と方法

みちしるべを基盤として、園と小学校の両施設間における連携のあり方を、接続期のカリキュラムと職員及び園児児童の交流活動から検討する。

実施期間と内容　2021年６月～2022年３月

両施設間の実践と意見交換・助言者の意見及び実践記録から考察する。

対象施設の特徴として、園は社会福祉法人立の幼保連携型認定こども園で１法人１施設、３、４、５歳児は異年齢クラスで５歳児は毎年30名前後である。当該小学校には例年20名前後通う。小学校は金沢市立の公立校で１学年約130名前後の児童がいる。

〈実践１〉　園と小学校の合同研修会①

2021年７月30日（金）ZOOMにて

参加者　小学校教頭・１年学年主任各１名、園長・主幹保育教諭・５歳児担任リーダー各１名、助言者　開仁志氏（小学校教員・保育者養成校教授）

みちしるべの策定にあたった金沢星稜大学開仁志氏より、みちしるべ策定の経緯と内容についての説明があった。小学校と園の多様性を尊重するため、接続期のカリキュラムは統一するものではなく、基本的な考え方・方向性を示し、共通理解を図るために使用するものである。その後園より、園の特色とアプローチカリキュラム（図２、一部抜粋　小学校教諭に分かりやすいよう、みちしるべの内容に合うよう一部文言を変更した。さらに写真をつけ、コメントや子どものつぶやきを吹き出しで入れ、

図１　かなざわ幼児教育みちしるべ

図２　2021年度の園のアプローチカリキュラム（一部抜粋）

幼児期までに育ってほしい10の姿を記載した。）の説明をし、質疑応答をした。

（小学校側から出た感想・意見）

アプローチカリキュラムを始めて見たが、子どもの主体性を大事にしていると感じた。

幼児期にできていることが小学校に入ってなぜできないのか。

小学校では縦割りで下の子に教えてきており、１年生は一番下なのでお世話してあげないとと思っていた。

いろいろ経験してきたことをどう活かしていこうか、つぶさないようにしないとと思った。

小学校では聞く力に力をいれているが、どうしたら話を聞けるようになるのか、幼児期にしていることを聞きたい。

（助言者より）

アプローチカリキュラムについて、文献では小学校に行って困らないためのカリキュラムの事例が多い。例えば45分座っていられるための適用プログラムが挙げられる。幼児期にふさわしいカリキュラムがあって小学校につながると考えている。統一カリキュラムでなく、どういう力をつけようとしているのか、やり方は違っていい。

アプローチカリキュラムは、小学校の教員にとっては、理解しづらいものなので、写真や子どものつぶやきが吹き出しにしてあることで、分かりやすいものになっていた。各園によって作り方や表現の仕方は違うので、これがすべてではないことは承知しておくとよい。また、全員が写真通りの姿になるわけではないことを、注意書きとして入れておいた方がよい。

〈考察１〉

小学校教諭は、これまでアプローチカリキュラムを見たことがなかった。そのため、園と小学校の連携接続と言われても、その目的や方法について未知なるものだっただろう。アプローチカリキュラムを実際に見て、５歳児担任から説明を聞いたことで園でしていることの理解が進み、また子どもの写真やコメントがあることで、子どもへの理解が進んだ。

小学校教諭は、子どもがあそびや話し合い等小学校より高度なことをしていることを知り、幼児期にできていることがなぜ小学校に入るとできないのか、疑問に感じていた。幼児教育の目的や方法について理解できなければ分からないであろう。ここから、これまで小学校に園児の要録を送付していたが、実際の子どもの姿を理解想像することは困難だったと思われる。

〈実践２〉　園と小学校の合同研修会②
2021年８月19日（木）ZOOMにて
参加者　小学校教頭・１年学年主任各１名、園長・教頭・主幹保育教諭・５歳児担任リーダー・５歳児担任・元５歳児担任リーダー各１名、助言者　開仁志氏
小学校より、入学準備・（４月の）１年学年だより・入学後の１週間の予定流れ・スタートカリキュラムの説明があり、質疑応答をした。

（園側から出た感想・意見）
入学後、すぐに小学校探検の中で生活のルールを確認することで、子どもたちが安心して生活勉学に集中していける実例が聞けて良かった。アプローチカリキュラムの学びがここに繋がると分かると、スタートカリキュラムが機能するのではないか。
園と大きく違うのは、子どもが自分で登下校するので、４月当初は安全を一番気にかけていることである。
小学校での楽しかったことを持ち帰れるようにし、子どもの期待を持続させようと工夫していることに感謝した。
（園側からの質疑応答）
（問）　幼児期の文字の学習についてどう考えているか。
（答）　文字学習については、小学校に入るまでにひらがなは読めた方がいいが、そのための練習はしなくていい。また、自分の名前は書けた方がいいが、文字指導は全く必要ない。それより、本を一緒に読んだり、何という字か聞かれたときに答えたりしてあげて欲しい。
（問）　入学当初に、授業のスピードについていけない子はいないか。
（答）　スタートカリキュラム通りに進むことはなく、その日できなかったことは次の日に回したりして、柔軟に対応している。
（小学校側からの質疑応答）
（問）　保護者に４月は毎日お便りを出しているが、電話の問い合わせが多い。自分の子の言っていることを信じ切っているが、園では保護者との関係をどうやって築いているか。
（答）　園では、保護者が送迎するので毎日のようにお会いしているし、懇談会もあるためコミュニケーションが取りやすい。また、ポートフォリオやドキュメンテーションで子どもの育ちを共有している。
（問）　先生が話をしている時に、（児童が）悪気なく聞いていない。聞く意識が低いためか内容が伝わっていない。自分勝手に自分でやっている。
（答）　園では、保育者が長い時間話すことはない。保育者が伝えたいと思う場合や、子ども同士の話し合いの必要性があると思った時に、集まって話をしている。

（助言者より）
両施設間では言葉の意味の違いがある。例えば、「ルール」は先生の決めたことに従って行動するのか、子ども自らが気づいて学んだり考えたりするのか、といった互いの理解が必要であろう。小学校側からは、「自分から（動く）」を大切にしているとあったが、先生の求めに気づいて動くのか、子ども自らが何をするしないを考えて行動するのか、といった整理も必要であろう。

〈考察２〉
小学校の、スタートカリキュラムの説明を聞いての、園側からの質疑応答の予定だったが、小学校での困りごとや、園での対応への質問が多かった。お互いのことをよく知らないことが明らかになったと同時に、もっと知りたくなっていた。園・小学校、幼児教育・小学校教育の文化の違いはもちろん、当該園の理念や保育の方針、小学校の理念や教育の方針といったことを知ることから、連携事業を始めればお互いに理解が進んだと気づいた。
保護者は、特に第１子であれば、小学校の状況がよくわからず、入学前は不安や悩みを抱きやすく、情報に振り回され、誤った行動をすることがある。その１つが文字の練習や計算である。園から保護者に幼児教育の特徴を伝えているが、今回のことを通して、保護者に小学校の現状を伝え、不安を少なくすることも、連携を通して園ができることであろう。

〈実践３〉　園職員と小学校職員の交流活動①
2021年11月17日（水）園内にて
参加者　小学校教頭・１年学年主任各１名、園長・教頭・主幹保育教諭・５歳児担任リーダー・元５歳児担任リーダー各１名、５歳児担任２名
園が午後の時間に５歳児の公開保育をした。園長が園の理念・保育の方針を説明し、その後アプローチカリキュラムと当日のデイリープログラムの説明をし、子どもたちのあそびの様子を見てもらった。また、園で作成しているクラスのポートフォリオ（注1）と個人ポートフォリオ（注2）や運動会のドキュメンテーション（注3）を見てもらい、まなびの成果報告会（注4）について昨年度の動画の一部を見てもらってからその説明をした。その後意見交換と質疑応答をした。

①　子どものあそびの様子について
（小学校側からの感想・意見）
保育者は子どものアイデアを取り入れていて、不要な介入をしていない。
保育者は子どもを見守って、寄り添いながら、子どもが言うまで待っている。
小学校では時間の制約があるから、教諭がこうしようと言っている。
（外遊びで保育者が子どもに一斉に話をする場面で、

子どもが砂遊びをしている様子を見て）子どもに話を聞いて欲しいとき、手遊びをしたり、ダメやぞと言ったりしてしまうが、保育者はどしんと構えていた。じっくりと、子どもの話を聞かなければと思った。

子どもが（時間が）８だよと言って、遊びを切り上げていた。日々の積み重ねだと思った。

外あそびで鬼ごっこと縄跳びをしていたが、保育者が（子どもの数を）半々にしなかった。時間を作って子どもの話を聞くようにしたい。

（小学校側からの質疑応答）

（問）　保育者が出る場合、意識して介入する場合はどんな時か。

（答）　例えば縄跳びであれば、１人でしている時にあそびを広げるために、２人でする方法もあると提示することがある。他には、ピタゴラスイッチを作っているときに、子ども間でたくさんアイデアが出るが共有が難しい。その際、設計図を描くことを提案することがある。また、子どもが言いたいことの補足や代弁をすることがある。

②ポートフォリオ・ドキュメンテーション・まなびの成果報告会について

（小学校側から出た感想・意見）

個人ポートフォリオについて、個人の記録が写真付きなので分かりやすい。

ドキュメンテーションについて、保護者とのやり取りが、ドキュメンテーションを見ることでしやすくていい。また、分かりやすい。

まなびの成果報告会について、小学校で行っている自由研究に近いと感じた。

（小学校側からの質疑応答）

（問）　運動会以外にどんなことでドキュメンテーションをしているのか。他の行事はどんなものがあるか。小学校の行事では、こちらから進めていかないと時間がなくてできない。

（答）　ドキュメンテーションは他に発表会や夏祭りの大きな行事の時に作成している。行事後に作成するのではなく、子どもの様子に合わせ、経過とともに足されていく。園でのあそびは、小学校のように授業１コマごとに進めるのではなく、大きな枠で考え日ごとに進めるため、その時間の余裕はある。

（園側からの質疑応答）

（問）　就学時の園児の要録について、幼保連携型認定こども園では、３歳児からの３年間についてＡ３用紙１枚で作成されているが、園で作成している個人ポートフォリオで代用できないか。

（答）　各園から送られてくる指導要録は一通り目を通している。現在は園ごとにエクセルで管理しており、児童で気になることがあった時は、いつでも見られるようになっている。ポートフォリオのように写真があると確かに見やすいので、要録に代わるものとしてもいいと思う。

〈考察３〉

小学校では、時間の制約があるため、授業や行事を進めていく上で、子どもを待ったり時間をかけたりすることが困難なようである。園生活とのギャップの1つは時間の流れにある。先行研究でもあるが、小学校でのコマごとの授業を、合科的に運用して、時間の枠を柔軟に変更することで、入学当初からしばらくの間大きな時間で授業を行うことが効果的だと考える。

小学校教諭は、ポートフォリオやドキュメンテーションといった記録の可視化については好意的だった。海外では、個人ポートフォリオを指導要録と同等とみなしている国もある。また、個人ポートフォリオを幼児教育施設から小中学校へそのまま持ち上がる国もあるため、利用可能性を考えたい。小学校教諭が見やすく理解しやすくするためにも、入園時からの個人ポートフォリオは有効だと考える。

〈実践４〉　園職員と小学校職員の交流活動②

2021年12月15日（水）小学校内にて

参加者　小学校教頭・１年学年主任各１名、園長・主幹保育教諭・５歳児担任リーダー各１名、５歳児担任２名

１年学年主任の３限目の授業（道徳）を見学し、その後、意見交換をした。

（園側から出た感想・意見）

①　子どもたちの様子から

発表を聞いている人が体を発表者に向けていたり、「はい」「同じです」「分かりました」と答えていたり、言葉に詰まった時に「〇〇ってこと？」と近くの人が助けたり、自信のない人にも発表しやすい雰囲気が作られていて、お互いに学び合う姿を作っていると思った。

子どもは発言するときには、正しいと思ったことを言った後に理由を必ず付け加えることをしていた。むしろどうしてそう思うかのほうが大切であることを先生は子どもたちに考えるように促していた。自分なりに自分の言葉で話す日々を過ごしているのだと感じた。

授業テーマである親切について、発言できない子もいたが４人のグループで話す時間も取ってあり、感じたことをグループ内で話すことも出来る配慮がされていた。

②　担任の様子から

先生が、終始笑顔でユーモアを交えながら、子どもたちに接していて、とても温かい雰囲気を感じた。また、いつでもポジティブな声掛けをしていた。「それいいね」「そんな風に考えるんだね」「そこに気付いたんだね」など、子どもが何を言っても認めてもらえている。個々に

もその配慮があったし、クラス全体にも、「静かにしてくれてありがとう」「今、さっと切り替えられたね。」などと、ポジティブな声を掛けている。子どもたちはどんな発言をしてもいいと安心感をもっており、参加性が高まる素敵な援助だと思った。

（園側からの質疑応答）

（問）　授業の中で、したくない子がいた場合にどうしているか。

（答）　課題について、したくない子にはなぜか聞いた上で、できそうなことを聞いてみる。また苦手なことについては、他の子に言ってその子が入れるよう配慮している。

（問）　クラスがいい雰囲気になっていると感じるが、どういうクラスづくりをしているか。

（答）「自分から（○○していく）」ということを4月からずっと言い続けている。
子どもたちとの関わりの中では、「任せる・聞く・選択肢を与える」を意識している。そのためにも、自分は具体的に指示しているし、失敗してもいいんやよと伝えている。４・５月と今の雰囲気は全く違う。当初からこんな風にはいかない。

〈考察４〉

保育者は、卒園９か月後の子どもの成長した姿を喜び、感動すらあった。それはやはり、卒園後の子どもが授業を受けている姿を見ていない・知らないことが大きいからだろう。小学校教諭への感謝と１人で30人を指導することへの尊敬の念が見て取れた。園同様、児童１人ひとりを大切に見ようとする姿があり、子どもの意見を取り入れながら授業を進める小学校教諭の手腕を感じる一方で、他の教諭についても同様なのか知りたくなっていた。園でも職員によって、子どもへの対応の仕方や言葉のかけ方に違いがあり、職員の力量が問われているからだろう。

授業内容も大事だが、教諭と子ども・子ども同士の関係性を重視していた。また、「自分から（○○していく）」という自主性を育てたいという思いが明確で、子どもにも伝わっているようだった。

〈実践５〉　園５歳児・小学校１年生児童との交流活動
2022年３月４日（金）園内にて

参加者　園長・主幹保育教諭・５歳児担任リーダー各１名、５歳児担任２名、５歳児29名

小学校１年生児童から送付された学校紹介ＤＶＤ（ビデオレター）を視聴した。また、園児の今年度のまなびの成果報告会の映像を小学校に送付した。

①　学校紹介ＤＶＤを視聴した子どもたちの感想から

学校が怖かったけど安心した。

（園の卒園児である）○○君がいた。椅子にピンと座っていた。

１年生の声が大きかった、かっこよかった。あんな風になりたい。

うたや楽器の演奏が上手だった。行事が楽しみ。

②　園職員の感想から

１年生から、楽器演奏、行事や勉強の紹介、学校クイズを通して、学校がどんな所か教えてもらえて、子ども自身見通しがもてているようだった。

１年生の態度への感想が多く、あんな風になりたいと憧れの気持ちを持っていたようだ。

５歳児は、卒園児が映っていたことで、安心し親近感を持っていたようだ。

（園側からの質疑応答）（注５）

（問）　従来行われていた「５歳児を迎える会」、今回のＤＶＤの作成の目的は何であり、内容は決まっているのか。

（答）　生活科のカリキュラムの中に入っていて、「もうすぐ２年生」の１つの授業として５歳児を招いてするものである。教育課程の中身であってやらなければいけないものであるが、どうせやるならいいものにしたかった。小１ギャップを埋めるためのものでもある。

（助言者より）（注５）

小学校との交流会も園の教育課程の中に位置づけられていて、どちらにもねらいがあるので互恵性のあるものにすればいい。小学校では、５歳児が手ごたえのあるものにするために１年生に聞いてみる、同様に５歳児から１年生にビデオレター等でこんなことあると嬉しいとリクエストするのもいいのではないか。

〈考察５〉

従来、５歳児は「５歳児を迎える会」に呼ばれて小学校に行き１年生と交流をしていた。今回はＤＶＤ視聴となったが、５歳児は、学校に対する不安感が解消でき、１年生への憧れや期待感をもつことができた。内容も、ＤＶＤでは一緒に制作する活動がないだけで、内容そのものを楽しんでおり、オンラインや対面でなくても、行う意義はあると考える。

園側はこれまで小学校に招かれていく立場であり、目的や実施方法について聞くことはなかったが、今回意見交換をすることができ、共通理解が進んだ。

〈実践６〉　小学校教諭による園児への公開授業
2022年３月７日（月）ZOOMにて

参加者　小学校教頭・１年学年主任各１名、園長・主幹保育教諭・５歳児担任リーダー・元５歳児担任リーダー各１名、５歳児担任２名・、助言者　開仁志氏

１年学年主任の先生より、スライドを使いながら小学校はどんな所・どんなことをしているかのお話があり、一緒にうたを歌った後、園児と相互に質疑応答を行った。

① 子どもたちの感想から

○○先生、優しくて面白くて大好き。

（まなびの成果報告会を見てくれていて）研究のことを褒めてくれたのがうれしかった。

一緒に歌えて楽しかった。学校の授業が楽しみ。

まだドキドキするけど、頑張ってみようと思った。

ちょっと心配だったけど、大丈夫かなと思った。

行きと帰りが心配だったけど、先生の話を聞いて安心した。

② 園職員の感想から（注5）

園児は公開授業の日を楽しみにしており、緊張している子もいたが終始楽しそうだった。

小学校教諭がまなびの成果報告会の動画を見て、その評価をしてくれたことは、今の子どもたちを理解し認めてくれたことであり、うれしく思った。

１年生の先生に、実際に園児に向けて話をしてもらうことで、学校生活への期待感が高まり、不安の解消にもなった。また、先生への印象が強く残っていたのは驚きだった。

③ 小学校教諭の感想から（注5）

子ども全員の顔やうなずきや反応がみられたほうがいいのでいつか対面でやりたい。

こどもの怖い・心配・不安といった気持ちが楽しみや頑張ってみようという気持ちに変わったのが、やってみてよかったと思った。

１年生から５歳児にビデオレターを送るだけでなく、１年の担任が（公開授業を）やる方法があり、それが幼保小の連携になることを学んだ。いい経験をさせてもらった。

１年生に、５歳児からの感想を伝えたら、（１年生が感想の内容を）教えてくれてうれしいと言っていた。先生が（園児からの感想で）優しい、ということに「えー？」という反応で、１年生とも繋がれたし５歳児とも繋がれたことがいい経験になった。

〈考察６〉

公開授業前、子どもによっては、小学校への漠然とした不安感があったり、保護者から学校ではちゃんとしないと、とプレッシャーをかけられていたりした。しかし、直接１年生の先生と授業としてやりとりすることで、小学校でもやっていけると自信になったようだった。

また、１年生になった時に自分がすることのイメージができ、期待感が膨らんでいた。

子どもの先生個人への感想が多く、学校生活同様どんな先生がいるのかに興味が集まっていた。公開授業をする先生個人の特徴が大きな影響を及ぼすようで、人選が重要であろう。園児と小学校教諭双方によい効果をもたらしたため、継続できることを期待したい。

〈実践７〉 連携事業全体の振り返りと今後の課題についての意見交換

2022年３月14日（月）ZOOMにて

参加者 小学校教頭・１年学年主任各１名、園長・主幹保育教諭・５歳児担任リーダー、５歳児担任各１名、助言者 開仁志氏

① みちしるべを通しての連携事業のつながりについて

（助言者より）今回の事業を通し、双方の育てたい子どもの姿は同じであることが分かった。やり方が各々違うことを理解し、乳幼児期の土台があるから学童期に活きるという共通理解があれば、接続連携はうまくいくのではないか。みちしるべを拠り所に、互いに見て、していることの意味を解説する。見ながら聞きながら一緒に話し合っていくといい。

② ５歳児と５年生の交流について

（園側より）１年生になった時に現在の５年生が６年生としていろいろとお世話をしてくれるので、入学後お互いにスムーズにいくためにも提案したい。

（小学校側より）６年生になる自覚を持つことにもなるのでいい機会と捉えているし、下の子の世話を通して自分を見つめ直す機会になるので大切なことである。５年生は、11月から忙しいので、時間やカリキュラムに余裕があればと思う。メッセージを送る等工夫できないことはないので、早めに打合せをして進めていけばいいのではないか。

（助言者より）１年生が行う交流会が生活科の中にはいっているように、５年生のカリキュラムのどこかに位置づけられれば、授業としてできるのでやりやすくなる。

③ 小学校教諭が行う公開授業について

（園側より）園児職員にとってとてもよかったので、他園にも広げることができないか。対面が理想だが、難しければZOOMを使って複数園同時にすることもよいのではないか。

（小学校側より）オンラインで複数園同時に行うことは可能である。複数園だと場所が違い、反応も違ってくるが、やろうと思えばいくらでもできる。対面でも、回数が少なければできないことはない。（公開授業をやってみて）よかったので、言われたらやると言う。

（助言者より）複数園で行う場合、園児への呼びかけややり取りをする授業を考えているのか、園児への授業やメッセ―ジを一方向で発するものを考えているのか。小学校に複数クラスあれば、クラス毎に別々の園に発したり、交代して交流したりするのもいい。

（小学校側より）今年度は入学者が多い５園にビデオレターを送った。複数園同時に、一方通行で話を進めるのは子どもたちが飽きるので、反応したり体をうごかしたりして５園または２・３園に分けてZOOMで、あるいは全員と体育館で行うのはどうかと思った。

④ カリキュラムの接続

（園側より）この事業を通して、相互のカリキュラム

はつながったと言えるのか。

（助言者より）これをしたからすぐ小学校の活動に繋がるカリキュラムを作ってしまうと、５歳児は１年生で行うプレをすることになる。双方のつながっていることに目を向けるとよい。（みちしるべの中にある）健康な心と体を土台とし、伸びゆく力が備わって、（小学校入学後）学習指導要領を基に知識を得たり、色々なことができるようにとつながっていけば、そう言えるのではないか。互いに見合うことで共通理解するが、それは互いの違いを認め合うことであり、どこがどうつながっているか互いに見えているということである。こういう事業の機会が毎年あることが、先生たちの接続カリキュラムになるかもしれない。

〈考察７〉

今回はみちしるべを共通言語として活用を試みたが、昨年できたばかりで、小学校はもちろん、園にも浸透しておらず、その活用方法は他園の実践を含めて検討が必要であろう。

最後の会であったが、これまでの事業を通して場の雰囲気が良くなり、率直に意見が言える関係性ができたため、交換会の中で新たな取り組みへの可能性が広がった。また、助言者がいて、当事者へ気づきを与え、提言してくれたおかげで議論が深まった。

総合考察

園と小学校の両施設間で連携をする上で、双方のカリキュラムの検討は必須である。しかしその前に、基盤となる互いの理念や大切にしていることを知ることは重要であろう。

今回、互いのカリキュラムについて一定の理解は得られたが、検討するための話し合いの時間は足りず、更なる合同研修とその継続の必要性が明らかとなった。

また、両施設間の職員交流においては相互理解が進み、新たな交流の提案やその実行可能性を探ることができた。しかし園児児童の交流については、そのよりよい内容や対面・ZOOMによるオンラインといった方法等のあり方を探る余地が残った。

おわりに

これまで、園と小学校は近くて遠い存在であった。それは、お互いのことをよく知らなかったからであり、この事業を通して、心理的な距離は近くなった。

何か新しいことをする時は、時間や労力の負担感を考え、躊躇することが多いが、計画を立ててできそうなことを行ってみると、その効果の大きさに当事者が驚いていた。事業を終え、参加者全員の満足感は高く、継続への意欲もあった。連携事業が当たり前に行われ、継続するには、双方の利点を強調し、負担を軽減することが大切である。そのためには、小学校のカリキュラムに位置づけ、授業の一環として行うことや、５歳児への公開授業を行える教諭を育成することも必要であろう。互いに見合い、話し合いという輪を広げ、特定の教諭や園だからできる、というようにならないよう、すべての子どもと関係者にとって、よりよい連携事業が続くことを期待したい。近い将来、双方の目的や実践方法を通じた互いの専門性を理解することで（互いにほとんど理解していないだろう）、カリキュラムを含めた授業や保育への理解が進み、時間や行動の制約を考慮した上で、互いを尊重することにより、さらに連携は深まるだろう。

最後に、この研究では、保護者や地域に対し、幼児教育や園と小学校の連携についての理解が進むことまでは踏み込んでいないため、情報発信のあり方を含め今後の課題としたい。

（注1）ポートフォリオとは、Ａ４用紙１枚に写真付きで毎日の保育の様子を示すことをいう。週案に対応して記録することが多いが、子どものつぶやきや思いがけない子どもの行動やあそびについてのものもあり、制約はない。

（注２）個人ポートフォリオとは、Ａ４用紙１枚に写真付きで個別の成長記録を示すことをいう。保育者と保護者とのコミュニケーションツールの１つである。相互理解が進み、保護者からコメントをもらうことで、振り返りと計画案に反映させている。

（注３）ドキュメンテーションとは、運動会や発表会といった行事や大きなテーマのあるあそびについて、時系列で子ども達の学びの様子を写真付きで紹介したり、保護者懇談会でパワーポイントや動画を使って説明したりして保育を可視化をしたものをいう。

（注４）まなびの成果報告会とは、５歳児が日々疑問に思ったり不思議に思ったことを調べたり実験したりして、気づいたことや分かったことをまとめて、担当保育者以外に発信することをいう。

（注５）実践６・７の質疑応答と意見交換は、時間の関係上実践８の意見交換と同日同参加者で行った。

謝辞

本研究にご協力をいただいた小学校教諭の先生方、ご助言をいただきました金沢星稜大学人間科学部こども学科開仁志教授に深く感謝申し上げます。

付記

本論文は、その一部を金沢市幼児教育センターに報告書として提出している。また、金沢市幼児教育センターの一部助成を受けて実施した研究の一部である。

〈編集係注〉

応募にあたり、金沢市幼児教育センターから了承を受けております。

講評：幼児教育施設と小学校の連携を円滑に進めるために必要なことは何か

評者：天野　珠路

市が策定した「幼児教育の道しるべ」を活用しながら、園と小学校との連携に取り組む経過が報告されています。保育者と小学校教員との話し合いや、園児と小学生の交流を重ね、時にはZoomやビデオレターを使って行うことで、互いに理解が深められたことはよかったと思います。また、双方のカリキュラムを検討し、接続期のカリキュラムの重要性に言及しているところも重要です。保育士養成校の教員＝助言者の役割は大きいことでしょう。

「一定の理解は得られたが、検討するための話し合いの時間は足りず」とあるように、人と時間をどう捻出するか、保幼小の合同研修や研究会をどう実施していくか。課題は多くありますが、今後も引き続き連携を図り、その中で、カリキュラムの連続性と子どもの育ちの連続性、保育内容と教科目のつながりを明らかにしていただければと思います。そのためにも行事だけでなく、日常の保育実践をドキュメンテーションとして作成することが大切ではないでしょうか。

評者：馬場　耕一郎

小学校との連携は、大変重要なテーマです。接続期の内容に関する研究に取り組まれたことは、多くの保育現場が必要としていると思います。連携の在り方を、接続期の内容と、職員や子どもの交流活動から検証したことは、大変有効的だと感じました。

今回、アプローチカリキュラムでの学びがスタートカリキュラムに繋がることが理解されたことは、大変有益であったと思います。また、保護者の就学に関する不安や悩みを園が理解する事により、情報に振り回されず、不安を少なくすることに繋がることが示唆されたことは、重要な事だと感じました。今後も連携を通して、切れ目無くこども達の成長を支える体制が整うことを楽しみにしています。

評者：田和　由里子

小学校との接続の試行的な取り組みとして、接続期のカリキュラムと職員及び園児・児童の交流活動を行った報告です。最初に、お互いのアプローチカリキュラム、スタートカリキュラムを見ての意見交換からのスタートでした。実際のやりとりで、小学校に入るまでに自分の名前が書けた方が良いか？ 45分座る事ができるようになっておいた方がよいか？小学校側からも５歳児の発達課程がわからなかったりしましたが、連携をすることにより、お互いに理解が進んでいきました。園の方でも公開保育により、保育内容を伝える事ができました。また、小学校１年生の授業も参観し、その後、意見交換をして理解を深めていました。

幼児教育施設と小学校との連携をこれからも続け、保護者や子どもたちが不安にならないように、良好な関係を作ることが大切であると感じました。また、一部の職員だけでなく、全職員で関わるように、この報告の為だけでなく継続していって欲しいと思います。文章だけの報告だったので、交流などの写真があるとわかりやすかったと思います。

〈自由研究部門〉

遊戯室の利用実態Ⅱ
～遊戯室の遊びの計画は必要か～

石川県・大徳学園　**藤井　しのぶ・安田　未有・浅香　聡彦**

1　はじめに

令和２年度に行った、「遊戯室利用実態１―保育者の気づきに着目して―」の研究から、幣園では遊戯室が多目的であり多機能に利用していることが明らかとなった。

保育者は、子どもへの思いや願いを持って、遊戯室の設定をし環境づくりをしているが、その環境は１年を通して変化に乏しく、環境のマンネリ化＝遊びのマンネリ化につながっていた。

2　目的と方法

令和２年度４期分の設定の写真から、体験が少なかった、「押す」「引く」「くぐる」の動きや遊びに着目し、子どもの年齢や発達に合った遊戯室における遊びの計画を立てることとした。この３つの動きや遊びが強化されると同時に、遊戯室の遊びがより充実し、バリエーションが増えていくのではないかと考えたからである。保育者の実践と子どもの姿から考察し、遊戯室の遊びの計画の必要性を明らかにしたい。

期間と対象　令和３年３月～令和４年３月
　　０～５歳児168名、正規職員21名

3　実践の経過

実践１

令和２年度同様、子どもの担当年齢グループで、月１回の職員ミーティングで研究を進める。令和２年度３月にどのように研究を進めるかを保育者間で話し合い決める。

【グループ構成】

グループ	メンバー	人数
1	０歳児担任	正規職員７名
	１歳児担任	
	２歳児担任	
2	０歳児担任	正規職員６名
	１歳児担任	
	２歳児担任	
3	３、４、５歳児担任	正規職員３名
		正規フリー職員１名
4	３、４、５歳児担任	正規職員３名
		正規フリー職員１名

（Ⅰ）「押す」「引く」「くぐる」「その他の動き」の運動要素を探る

・遊戯室の遊びがより充実し、バリエーションが増えるには、まずは保育者自身が動きや遊びの種類がどれだけあるか知り、情報を集める必要がある。そのため、幼児期各々の年齢での一般的な運動発達の特性と、その時期に経験しておきたい遊び（動き）の例が紹介されている「幼児期運動指針」（文部科学省2012）を参考にしながら、「押す」「引く」「くぐる」の３つの動きを具体的にどのような遊びとして取り入れ、実践するかを考える。遊びのバリエーションを増やすために、その他の遊びや動きも計画として取り入れる。

＜方法＞

（１）自分の担当年齢に関わらず、遊戯室で経験してほしい動きと遊びを、１枚の付せんに一つずつ個人で書きだしていく。動きの種類によって付せんは色別にし（押す：水色、引く：ピンク、くぐる：緑、その他：黄色）、分かりやすくする。

（２）個人で記載した付せんは専用の用紙にグループ毎に貼り出していく。

（３）貼り出したものを見て、どのような種類の遊びが出たかをグループ内で確認し合う。

（４）他のグループの意見を見て回り、どのような案が出たのかを知る。

（５）０～２歳児と３～５歳児の各２グループの意見を、研究担当の保育者１名と教頭で話し合い、分類やまとめを行う。（例として幼児の分類とまとめを以下に示す。）（以降、０～２歳児担任グループを「乳児」、３～５歳児担任グループを「幼児」と記す。）

（Ⅱ）結果と考察

乳児が遊戯室に一番取り入れたい動きは１、「くぐる」２、「押す」に対し、幼児が一番取り入れたい動きが１、「引く」２、「くぐる」であった。乳児が挙げた「引く」の動きは総数「22」に対し、幼児からは約２倍の「40」挙げられている。「くぐる」は、乳児が「41」に対し幼児が「36」という結果が出ており、乳児・幼児に関わらず、弊園では「くぐる」の運動要素が足りないことが分かる。

その他、幼児から出た意見にはなかった乳児が取り入れたい動きとして「踊る」と「滑る」と「揺れる＋回る」と「跳ぶ」があった。それに対し、幼児から出た動きとして「当てる」「転がす」「片足跳び」があった。比較し

遊戯室で経験してほしい動きと遊び（幼児）

動き	カテゴリー（項目数）	具体例	具体例の総数	動きの総数
押す	物を使って（6）	タイヤ押し（2）	7	23
		積み木を押す（1）		
		丸太押し（1）		
		はねちゃんの絵本のような大きなものを押す（1）		
		遊具を押す（1）		
		大玉転がし（1）		
	物を使い、人と共に（1）	雑巾がけ競争（1）	1	
	人と共に（4）	相撲（7）	15	
		手押し相撲（5）		
		おしくらまんじゅう（2）		
		けんけん相撲（体での押し合い）（1）		
引く	物を使って（5）	タイヤ引き（3）	7	40
		荷車（1）		
		フープを引っ張る（1）		
		ごむを壁に付けて引っ張る（1）		
		タイヤ引き競争（1）		
	物を使い、人と共に（6）	綱引き（8）	17	
		小綱奪い（4）		
		しっぽとり（2）		
		ひきひきずもう（1）		
		棒引き相撲（1）		
		長い紐を引っぱって、先に全部引っぱったほうの勝ち（1）		
	人と共に（7）	はないちもんめ（7）	16	
		相撲（4）		
		かいせんどん（1）		
		たけのこ一本おくれ（1）		
		野菜の根っこひき（1）		
		シーソー（ふれあいあそび）（1）		
		場所を決めて２人で引っ張りっこ（1）		
くぐる	物を使って（12）	トンネル（7）	29	36
		フープくぐり（5）		
		縄跳び（5）		
		リンボーのような棒くぐり（2）		
		積み木でとんねるを作ってくぐる（2）		
		あみをくぐる（2）		
		タイヤくぐり（1）		
		高さの違う場所をくぐる（1）		
		大凧あそび（布の中をくぐる）（1）		
		太鼓橋をくぐる（1）		
		コアーラをくぐる（1）		
		サーキット・平均台の下をくぐる（1）		
	物を使い、人と共に（1）	大縄（八の字）（1）	1	
	人と共に（2）	またくぐり（3）	6	
		ロンドン橋落ちた（3）		
ジャンプする	物を使って（2）	ジャンプする（1）	2	2
		高い所から跳ぶ（1）		
ぶら下がる	物を使って（1）	ぶら下がる（1）	1	1
片足で跳ぶ	人と共に（1）	けんけん（1）	1	1
這う	物を使って（1）	積み木などで低いトンネルを作って通る（1）	1	1
投げる	物を使って（1）	ボール投げ（1）	1	1
投げて捕る	物を使い、人と共に（1）	キャッチボール（1）	1	1
あてる	物を使って（1）	まとあて（2）	1	1
転がしてあげる	物を使い、人と共に（1）	転がしドッヂ（1）	1	1
投げてあげる	物を使い、人と共に（1）	シャワーボール（3）	1	1
倒す	人と共に（1）	相撲（1）	1	1

てみると、幼児の子どもの動きの方が複雑であり、発達に応じた動きであると言える。

カテゴリーとして挙げられている「物（道具）を使って」「人と共に」「物を使い人と共に」は、話し合う中で自然と１グループから出てきたもので、このカテゴリーを適用し、分類していった。

よく出てくる物（道具）としては、幼児からは「タイヤ」が挙げられ、乳児からは大型ソフト積み木が挙げられた。これらの道具は、実際に遊戯室にあるものであるにも関わらず、あまり上手く利用されていないとして挙がったのではないだろうか。「タイヤ」は遊具庫に入れられたままで、令和２年度は一度も使用しなかった。

「大型積木」は、積んで何かを作ることはあるが、「またがる」「押す」といった遊びはあまり行われていないため、身近にある道具を使用してできる遊びとして挙げられたと考える。

遊びを通しての「人との関わり」について比較した結果、幼児は「39」の要素があるのに対し、乳児は「22」という結果が出た。

人と関わることを楽しみながら遊びを進めていく発達段階にある３・４・５歳児に比べ、まだまだ乳児期は大人との１対１の遊びや、１人遊びが多い発達段階の為出た結果だと考える。具合的に挙げると、乳児の「引く」ではお舟はぎっちらこなどのわらべ歌あそびが挙げられ、保育者対子どもで互いに手を引き合う遊びであるのに対し、幼児の「引く」では「しっぽとり」があり、鬼役の子どもがしっぽを引き抜くという遊びになる。

物（道具）を使う運動遊びを比較した結果、幼児は「48」あったのに対し、乳児は「98」と約２倍の結果が出て、物を使用する頻度が高いと分かる。これも同様、人との

関わりよりも発達上、まずは一人ひとりのチャレンジ、遊びが多いからだと考えられる。まずは、実践１を通して、様々な動きがあることを知り、どの発達段階にこれらの遊びを用意したら良いかを考えることができた。また、「押す」「引く」「くぐる」の３つの動きを強化しながらどのように遊びを展開していくかを、子どもの姿を予想しながら、考えることができた。

実践２

（Ⅰ） 遊戯室の遊びの計画を立てる。

＜方法＞

（１）毎月の職員ミーティング内で、「押す」「引く」「くぐる」の遊びを、令和３年度遊戯室運動あそびの計画として４期で振り分ける。

（２）12月以降も３月まで同じように振り返り、見直しをする。

（３）計画を立てたり振り返ったり、見直す中で必要があればこの時間内に必要な道具・遊具を作成する。

①【計画をたてる時期や時間】

月	期	行うこと	時間
４月	１期	４、５、６月の計画を立てる	１時間
５月	１期	４月・５月中旬までの振り返りと６月の計画を見直す	30分
６月	１期	５月下旬から６月中旬の振り返り	１時間
	２期	７、８、９月の計画を立てる	
７月	１期	６月下旬から７月中旬の振り返り	30分
	２期	８月の計画の見直し	
８月	１期・２期	７月下旬から２期８月中旬の振り返り	30分
９月	２期	８月下旬から９月中旬の振り返り	１時間
	３期	10、11、12月の計画を立てる	
10月	２期・３期	９月下旬から３期10月中旬の振り返り	30分
	３期	11月の計画の見直し	
11月	３期	10月下旬から11月中旬の振り返り	30分
	３期	12月の計画の見直し	
12月	３期	11月下旬から12月中旬の振り返り	１時間
	４期	１、２、３月の計画を立てる	

②【グループ構成】

グループ	メンバー	人数
１	０歳児担任	正規職員３名
	１歳児担任	正規職員６名
２	２歳児担任	正規職員６名
３	３、４、５歳児担任	正規職員６名

令和３年度の遊戯室の使用割は、晴天時は基本的に午前中遊戯室を使用しておらず、０歳児はベランダや戸外で、１歳児～５歳児も園庭や戸外で過ごしている。

晴れた日は、戸外に出て身体を動かして遊ぶといった、弊園の日課に基づいている。使用割の年齢別の３グループで計画を立てる。また、各グループの中で、時間の効率化を図るため、さらにＡ・Ｂ・Ｃのグループに分かれて進めていく。Ａ⇒押す　Ｂ⇒引く　Ｃ⇒くぐる　の計画を考える。

③【計画の立て方】

（１）「必要な道具・遊具」を書きだす。

（２）「必要な保育者の具体的な関りと援助」を書きだす。

（３）各グループ内で、Ａ「押す」、Ｂ「引く」、Ｃ「くぐる」について「なぜこのように振り分けたかの理由」を説明しながら、どのような計画になったか伝えあう。

（４）各グループで計画を一つにする。

④【計画を立てての振り返り】

計画を立てることで、「押す」「引く」「くぐる」の動きが強化されると同時に、遊戯室の遊びがより充実するかを客観的に見つめ、検討するために他のグループの計画も見て回る。その際に、「１期の計画を立ててみての気づき」、「遊戯室の遊びの変化」、「他のグループの計画を見ての気づき」、「０～５歳児への（発達段階に沿った）あそびの接続はうまくいきそうか」に着目して見る。そして、これらの気づきを各自、記録に残し、グループ内で意見交換を行う。

（Ⅱ）結果と考察

１期（４月～６月）の「押す」「引く」「くぐる」の計画をまとめた。（０・１歳児の４月の「押す」を例として提示する。）「○」がついている２年度に経験のあるものも、より遊びが活性化されるように、新しい展開が見られるように進めていくこととなった。

１期					
０、１歳児			４月		
		令和２年度経験したことがある	具体的な運動遊びの内容	必要な道具・遊具	保育者の具体的な関わりと援助
押す	物を使って	○	手押し車で押す	手押し車	・モデリングして見せる・上手、上手、上手と励ましたり離れたところから声をかける
			段ボールを押す	段ボール	一緒に押して楽しむ
		○	ワゴン車を押す	ワゴン車	広い場所を確認する
		○	大型積木を押す	大型積木	・モデルを見せる ・一緒に押して楽しむ
	人と共に	○	お舟はぎっちらこ（ふれあい）		押すときに力加減しながら子どもの力に合わせる
	物を使い人と共に				

次に、研究担当の保育者１名と教頭が、個人が記録した用紙から０・１歳、２歳、３～５歳児グループの気づきを考察してみた。まず０・１、２歳で「１期の計画を立ててみての気づき」として、「遊びの内容や道具が明確になった」、「１期・２期へとの繋がりが明確になった」、「子どもの成長発達に応じた時期に適した遊びを用意し、今後その遊びがどのように変化し、発展していくか見通しを持てる計画になった」が、プラスの気づきとして挙げられた。逆に、３～５歳児グループからはプラスの気づきが１つもなく、「１期でたくさんのアイディアが出たので、２期～４期の計画が立てられるか不安になった」と課題とする気づきが挙げられた。他には「遊具の面白さを活かしきれていないのではないか」、「同じ遊びを継続して行う場合にも、過程が大切であり、保育者の援助の工夫が必要だと感じた」が挙げられ、計画を立てることで、保育者の子どもへの関わりの大切さに気付いた意見である。

次に、「遊戯室の遊びの変化」に対して、どの年齢のグループにも共通で挙げられたプラスの気づきは、「押す・引く・くぐるの動きの遊びが増えると思う」、「子どもの遊びの幅が広がり、昨年とは違う遊びが増えるのではないか」である。その他、「大人の動きが変わる」、「意識して子どもの遊びを援助し、援助が明確にできるようになる」、「子どもの動きを具体的にとらえて援助していく保育に変わると思う」といった保育者の関わりの変化についての意見が出た。同時に課題として、大人の関わり方の重要性について記載されており、「保育者の子どもへの関わり方や、声のかけ方によって楽しめるかどうかが決まると思う」といった意見が出た。

「他のグループの計画を見ての気づき」については、「使うものは同じでも使い方や遊び方が年齢によって変わっていくのだと気付いた」、「他の年齢の子どもたちが、何をして遊んでいるのか、どんな経験を大切にしたいと考えているのか見えて分かりやすい」、「０～５歳児まで似た要素の遊びがたくさん出ているが、大人の援助次第で遊び方楽しみ方が変わるので、環境設定はあまり大幅に変えなくてもいいのではないか」という意見が出た。他のグループの意見を見て回ることで、０～５歳児への遊びの変化や繋がりがどのグループにも見えてきている様子が伺える意見であった。反対に、「自分が担当する年齢だけではなく、他の年齢の遊びについて、もっと知る必要があると感じた」、「全年齢を通して何をしているのか互いに知っておくことも大切だと思う」といった意見が挙げられ、自分の担当する年齢以外の遊びについていかに無知であったかを反省として振り返る姿が見られた。

最後に、「０～５歳児への（発達段階に沿った）あそびの接続はうまくいきそうか」に対しては、「同じ遊びや道具が挙げられていても、年齢が高くなるにつれて子どもたち同士で遊びを広げ、展開していけるような遊びの計画になっているので接続はうまくいくと思う」、「２歳児でルールを段々と理解できるようになり、３～５歳児でルールのある遊びに広がり、繋がっていると思った」、「選んでいる素材や道具はほぼ共通しているので、遊び方もうまく接続していくと思った」といった意見が出た。どの年齢のグループも接続が上手くいくと思ったのは、全年齢のグループの気づきを見て回ったことで繋がりが視覚化され、客観的に見ることができた為、気づけたのであろう。接続においての課題としては、「自分の担当年齢だけではなく、他の年齢の遊びについて、もっと知る必要があると感じた」、「全ての年齢の計画を並べてみて、時期などを見直し、１本に繋がるような計画にすることが必要」、「年齢によってのばらつきや、似ているところのすり合わせや、話し合いを通して子どもの成長発達のレベルに合わせていくことが必要」という意見が出ており、一度計画を立てて終わりではなく、その後の見直しや話し合い、軌道修正の必要について述べられている。計画を立て、自分の気づきから他者の気づきを知ることで、客観的に考え、新たな気づきと課題を持つことができたと考える。

実践３

（Ⅰ）実践２で作成した遊戯室の計画を基に実践をする。計画の見直しや軌道修正の必要があるという意見が出たため、次の方法で実践を行っていく。

＜方法＞

（１）引き続き先月の遊びを続けたり、発展させたりする場合や補足・訂正などがある場合には、赤ペンで計画書に追記をする。

（２）遊戯室設定写真を撮り、令和２年度との比較をする。

（３）子どもの遊びの様子を写真に撮り、令和２年度との比較をする。

（Ⅱ）結果と考察

研究担当の保育者１名と教頭が、年齢毎に気づきをまとめ考察した。

（１）１歳児の令和２年度と令和３年度の遊戯室設定写真を比較しての気づき（１期）

園にある遊具はほとんど増えておらず、同じ遊具でありながら、子どもの動きや遊びの総数は令和２年度に比べて令和３年度が「36」から「55」と「19」増えている。動きや遊びの総数で一番多い結果が出た遊具は、令和２年度は、「フープ」「滑り台」「ボール」「大型マット」で総数は同数の「４」である。令和３年度、動きや遊びの総数で一番多い結果が出た遊具は、「大型積木」「丸いボード」で総数は同数の「６」である。また、令和３年度には新たな遊具「タイヤ（ひも付き）」と「丸いボード」が加わり、その遊具での遊びには、「引く」「押す」の動きが見られる。令和２年度に少ないとされていた「押す」「引く」「くぐる」の動きは、「押す」が「０」に対し、令和３年度が「６」、「引く」が「０」に対し、令和３年

表１　１歳児　雨の日の午前の比較

日にち（曜日）	令和２年　６月12日（金）9:00～9:30									令和３年　６月14日（月）9:00～9:40								
子どもの情報	クラス	あやめ組	在籍	14　名	利用人数	7　名		動きや遊びの数		クラス	あやめ組	在籍	15　名	利用人数	7　名		動きや遊びの数	
		すみれ組		14　名		13　名					すみれ組		14　名		13　名			
		組		名		名					組		名		名			
保育者の人数	クラス	あやめ組	在籍	3　名	利用人数	3　名				クラス	あやめ組	在籍	4　名	利用人数	3　名			
		すみれ組		3　名		3　名					すみれ組		3　名		3　名			
		補助者		名		名					補助者		1　名		名			
大型積木	・見立て遊び・乗り物づくり							2		・乗り物に見立てて座る・車を作る・積み上げる・トンネルにしてくぐる・並べて道を作る・太鼓橋の下まで持って行き台にする							6	
フープ	・見立て遊び・輪の中にジャンプ・並べる・持ち歩く							4		・電車ごっこのようにして歩き回る・中に入る・転がす							3	
トランポリンマット	・ジャンプ・座る							2		・ジャンプ・座る・転がってごろごろする・歩く							4	
太鼓橋	・上り下りする・下から覗く							2		・上る・下でぶら下がる・ごろごろする「いもむしごろごろ」							3	
トップ	・中に入って揺れる・上る							2		・中にはいって揺れる・転がす							2	
コアーラ	・中をくぐる・上に登る・中に入って揺れる							3		・中をくぐる・上に登って万歳をする・くるくる回る・逆さにして座る							4	
コアラの滑り台	・上る・滑る・中に入って揺れる・トンネル							4		・階段の上り下り・滑る							2	
ボール	・転がす・蹴る・投げる・受け取る							4		・転がす・投げる・ゴールに向かって投げる・受け取る							4	
タイヤ（ひも付き）	なし							0		・引っ張る・友達が中に入って引っ張る・押す・中に入る・タイヤの周りの凹凸を触る							5	
リバーストーン	・持って歩く・並べてある上を歩く							2		・上に乗る・転がす・裏返す							3	
星マット	・跳ぶ・上を歩いて渡る							2		・ジャンプする・座る・押す							3	
ジャンプ台（巧技台）	・一段ずつ登って跳ぶ・上り下り							2		・ジャンプする・巧技台の上に立つ・追いかけっこのゴール							3	
大型マット	・跳ぶ・寝転がる・座る・壁につかまり、後ろに倒れる							4		・ジャンプする・ごろごろと転がる							2	
マット	・でんぐり返し							1		・寝転ぶ							1	
丸いボード	なし							0		・上に乗る・押して歩く・転がす・持って歩く・上を渡る・大人が転がしたものをキャッチする							6	
フリースペース	・走る・なりきり遊び（動物・乗り物）							2		・走り回る・歌に合わせて体を動かす・追いかけっこ・かくれんぼ							4	
動きや遊びの総数								36		動きや遊びの総数							55	

度が「３」、くぐるが「１」に対し、令和３年度が「４」という結果が出た。動きの種類が増えたこと、遊具をアレンジしていることから、運動あそびの幅が広がっていることがわかる。新しい遊具といっても、倉庫にありながら活用されていなかったタイヤにロープを結び付ける等、保育者が計画を立てる中で、少し工夫し、改良して設置したものである。ここでは１期のみ表を提示しているが、４期に向けて遊びが連続して展開されていくように、キャンディークッションにロープを結び付けたもの等も準備されていた。

なお、０歳児はこの時期に２階に上がれないため、遊戯室を使用しておらず、例年１階の保育室（ふれあいルーム）を使用している。

（２）０、１歳児の子どもが実際に遊ぶ写真を見ての気づき（１期）

新しい道具・遊びを、子どもはすぐに視覚でとらえ、興味関心を持つ姿が多く見られた。保育者は必要があれば、子どもに関わり援助を行うが、子どもの自主性を尊重し、子ども自身がどのように遊びだすかを見守ることを大事にしている。子ども自身が自分で遊び方を考え、やってみようとしたり遊んだりする姿が見られた。また保育者の意識も高まり、保育者の子どもへの運動遊びの関わりも増えていた。

（３）２歳児の令和２年度と令和３年度の遊戯室設定写真を比較しての気づき（１期）

０・１歳児と同じく、同じ遊具でありながらも令和２年度に比べて、令和３年度は子どもの動きや遊びの総数が「33」から「54」と「21」増えている。一番多く動きや遊びが見られた遊具は、令和２年度は「ジャンプ台（巧技台）」「マット」で同数の「４」である。それに対し、令和３年度、一番多く見られた遊具は「サーキット」で総数は「６」である。令和３年度の「サーキット」では「ジャンプする」「くぐる」「座って滑る」「バランスをとる」「歩く」「四つん這いで渡る」と多種多様な動きが見られ、その中に「くぐる」の動きが見られた。跳び箱は、令和２年度は設定されていないが、令和３年度は設定されている。これは、子どもの運動能力として跳び箱が出来る成長発達段階であると保育者が判断したためである。そのため、マットだけでは前転するや転がるだけの動きであったが、令和３年度、跳び箱とマットを一緒に設定することによって、「登る」「跳び箱からジャンプして着地する」「前転する」「寝転がる」等の動きが増えており、子どもの動きの幅が広がっているのが分かる。

「押す」「引く」「くぐる」に関しては、「押す」が「１」に対し３年度が「７」、「引く」が「０」に対し３年度が「３」、「くぐる」が「０」に対し３年度が「６」という結果になり、どの動きも増えている。３つの動きを計画的に取り入れ、ねらいを持って遊戯室の遊びを準備することで運動の幅が広がり、遊戯室の遊びに対する保育者の意識や視点、興味関心も変化してきていると考える。

表２　２歳児　雨の日の午前の比較

日にち（曜日）	令和２年　６月12日（金）10:15～11:30								令和３年　６月14日（月）10:40～11:20							
子どもの情報	クラス	ひまわり組	在籍	16　名	利用人数	15　名		動きや遊びの数	クラス	ひまわり組	在籍	14　名	利用人数	8　名		動きや遊びの数
		たんぽぽ組		18　名		16　名				たんぽぽ組		16　名		15　名		
		組		名		名				組		名		名		
保育者の人数	クラス	ひまわり組	在籍	３　名	利用人数	３　名			クラス	ひまわり組	在籍	３　名	利用人数	３　名		
		たんぽぽ組		３　名		３　名				たんぽぽ組		３　名		３　名		
		組		名		名				組		名		名		
大型積木	・家やお家を作って遊ぶ							1	・車をつくり、運転席に座ってドライブごっこ・上に積む・凹凸の道を作ってあるく							3
フープ	・立てて転がす・ハンドルに見立ててあそぶ							2	・転がす・両足ジャンプ・片足ジャンプ・ジャンプしながら進む・回る							5
トランポリンマット	・ジャンプする							1	・一人でジャンプする・友だちと手を繋ぎ、一緒にジャンプする							2
太鼓橋	・ぶら下がる							1	・ぶら下がる・上に登る・ぶら下がって足をあげる・マットの上を転がる・四つん這いでくぐる							5
トップ	・中に入る・中に物を入れて押し歩く							2	・中に入って揺れる・友だちを揺らす							2
コアーラ	・上に立つ・中に入って回しあう							2	・上を歩く・下へくぐる・コアーラからステージへジャンプする							3
コアラの滑り台	・滑る・横から登る・中に隠れる							3	・滑る・横から登る・中でお家ごっこ							3
ボール	・投げる（バスケットボール）・サーキットで転がす・サッカーで蹴る							3	・上に投げる・転がす・ボールのお店屋さんごっこ・バウンドさせる							4
タイヤ（ひも付き）	設定していない							0	・タイヤを引っ張る・友だちを乗せて引っ張る・友だちを乗せてタイヤを押す							3
リバーストーン	・上に乗って歩く・裏返して回す							2	・上を跳んで歩く・裏返して回す							2
星マット	・ジャンプする・枕にする							2	・両足ジャンプで進む・サーキットからの道の繋がりで歩く							2
ジャンプ台（巧技台）	・ジャンプして、前転する・寝転がる・登る							4	・ジャンプをして、前転する・友だちとせーのでジャンプする							3
大型マット	・ジャンプする・海に見立てて泳ぐ							2	・マットの上でジャンプする・走ってダイブする・転がる							3
バランスボード	設定していない							0	・一人でバランスをとる・保育者と手を繋ぎながらバランスをとる・反対にして上に乗る							3
サーキット	・上り下り・透明の板の上に入る							2	・ジャンプする・くぐる・座って滑る・バランスをとる・四つん這いで渡る							6
跳び箱	設定していない							0	・ジャンプして、前転する・友だちとせーのでジャンプする							3
フリースペース	・追いかけっこ・鬼遊び							2	・追いかけっこえ・よーいどん							2
マット	・転がる・寝転がる・ジャンプして進む・前転する							4	設定していない							0
							動きや遊びの総数	33							動きや遊びの総数	54

（４）２歳児の子どもが実際に遊ぶ写真を見ての気づき（１期）

保育者がねらいを持って計画を立て、遊びがより充実したものになることを願った関わりは、子どもの興味・関心にもすぐに影響を及ぼした。その中で、新しく用意したロープつきのタイヤは子どもにとって視覚的にも魅力的であった。特に小集団で簡単なルールの基で遊びを共有することが楽しい発達段階にあるため、「友達を乗せてタイヤを引っ張る・押す」という姿が見られ、友達と共に遊び方を考え、協力して遊ぶ姿があった。これらの姿から、遊びの幅や繋がり、広がりができ、遊びの充実が見られる。

（５）３～５歳児の令和２年度と令和３年度の遊戯室設定写真を比較しての気づき（１期）

動きや遊びの総数が「42」に対し、３年度は「37」で、「５」減っている。また遊具の種類は「14」に対し、３年度は「18」という結果が出て「４」増えている。次に「押す」「引く」「くぐる」の動きを比較してみると、「押す」が「０」に対し、３年度は「０」、「引く」が「０」に対し３年度は「１」、「くぐる」が「０」に対し３年度は「３」という結果で、「引く」が「＋１」、「くぐる」が「＋３」となっている。「引く」の動きは令和３年度新しく設定した「タイヤ（ひも付き）」から出た動きであること、「くぐる」は、令和２年度と令和３年度ともに出ている遊具である。これは保育者がねらいをもって計画し準備したこと、多様な動きを楽しんでほしいという願いを持って子どもに関わったからだと考える。動きや遊びの総数が減っている原因の一つとして、令和２年度は使用クラスが３クラスで89名、３年度は使用クラスが１クラスで32名と人数の違いも関係していると考える。しかし、使用人数が89名から32名との違いがありながら、動きや遊びの総数が「－５」しか変化が見られない。ここから、使用する子どもの人数よりも、保育者の子どもへの働きかけの意識の違いが動きや遊びの総数に関係しているのではないかと考える。

（６）３～５歳児の子どもが実際に遊ぶ写真を見ての気づき（１期）

新しい遊具として準備したロープ付きのタイヤが視覚的にすぐに子どもの興味・関心を引きつけ、遊び方を考えながら生き生きと遊ぶ姿が見られた。少し環境を変えることで、期待が高まり「どんなふうに遊ぼうか？」「こんな風にして遊んだら楽しいかもしれない！」と想像したり、遊びを作り出したり工夫したり、意欲的にチャレンジする姿が見られた。ロープ付きタイヤは、穴の中に何人迄入って引っ張ることができるか、ロープは何本つないだら力が強くなるか、どちらの方向に引っ張るとよりスムーズに動くか、何人で引っ張ると動くかなど友達といろいろ確かめながら遊ぶ姿があった。友達と一緒に息を合わせ体全体でリズムをとったり、全身のバランスをとったりして、身近にある用具を使って操作する動きが見られた。「くぐる」の遊びにおいても、どの高さならくぐれるか、ネットはどうやってくぐろうかなど繰り返し友達とチャレンジしながら飽きずに遊ぶ姿が見られた。

（考察）

どの年齢も「押す」「引く」「くぐる」の動きが増えて

表３　３～５歳児　雨の日の午前の比較

日にち（曜日）	令和２年　６月12日（金）9:00～10:00								令和３年　６月14日（月）9:50～10:25							
子どもの情報	クラス	ふじ組	在籍	31　名	利用人数	31　名		動きや遊びの数	クラス	ふじ組	在籍	33　名	利用人数	32　名		動きや遊びの数
		さくら組		31　名		29　名				さくら組		32　名		0　名		
		ぱら組		31　名		29　名				ぱら組		32　名		0　名		
保育者の人数	クラス	ふじ組	在籍	3　名	利用人数	3　名			クラス	ふじ組	在籍		利用人数			
		さくら組		3　名		3　名				さくら組						
		ぱら組		名		名				ぱら組						
大型積木	・お家ごっこ・乗り物づくり・迷路づくり							3	・積む							1
トランポリンマット	・両足ジャンプ・片足ジャンプ							2	・跳ぶ							1
太鼓橋	・上り下り・両手でぶら下がる・手足を使ってぶら下がる・ぶら下がり勝負をする							4	・渡る・くぐる・捕まる・バランスをとる							4
トップ	・上に立つ・中に入る・揺れる（揺らしてもらう）							3	・乗る・揺れる・回る							3
コアーラ	・中に入って揺れる・上に立つ・家に見立てる・友達同士で揺らす							4	・くぐる・乗って上を歩く							2
コアラの滑り台	・滑る・横から上る・中に入ってごっこ遊び・トンネル							4	・滑る・登る							2
ボール	・バスケットゴールに入れようとする・蹴る・キャッチッボール・転がす							4	・投げる・キャッチボール・蹴る							3
平均台	・渡る・両側から渡り、じゃんけんをする・座りながら前に進む							3	・渡る							1
タイヤ（ひも付き）								0	・引く・乗る							2
リバーストーン	・滑らないように上を歩く							1	・渡る							1
星マット								0	・跳ぶ・渡る							2
大型マット	・ジャンプする・飛び込む・寝転がる							3	・跳ぶ・ジャンプする							2
バランスボード								0	・乗る・バランスをとる・運ぶ							3
サーキット	・上り下り・落ちないように渡る							2	・渡る・くぐる・のぼる							3
縄跳び	・前跳び・二人跳び・電車・へび							4	・跳ぶ							2
跳び箱	・５段を跳ぶ・上に登ってジャンプする・跳んだ後に前転する							3	・跳ぶ・上る・ジャンプする							3
フリースペース	・かけっこ・鬼遊び							2	・鬼あそび							1
マット								0	・跳ぶ・ジャンプする							1
動きや遊びの総数								42	動きや遊びの総数							37

いることが分かった。計画を立てて保育者が意図して準備した遊びもあるが、子どもたちが自ら考えて生み出した遊びもあった。子どもの思考力は柔軟で、大人が考える以上に予想外の遊び方に発展する場合もある。

１歳児の例で言うと、令和３年度初めて用意されたタイヤでは、子どもがタイヤの凹凸を指や手のひらで確かめたり、感触を楽しんだりして、その後どのように遊ぼうか考えてから自分の発想を活かして遊び始める姿があった。令和２年度用意されていなかった丸いボードは、令和３年度には遊び方を保育者が知らせなくても上に乗る、押して歩く、転がす、大人が転がしたものをキャッチする等、その他に６通りもの遊びを生み出していた。

最後に、４期に渡って本当に遊戯室の遊びがより充実化され、バリエーションが増えていったか確かめるために、動きや遊びの総数を比較した。

（７）令和２年度と令和３年度の遊戯室設定写真の１期～４期を比較した結果と考察

①押す・引く・くぐるの動きを比較して

これは雨の日の午前の「押す」「引く」「くぐる」の動きや遊びの総数の比較である。令和２年度と比較すると、「押す」「引く」「くぐる」全ての動きや遊びが令和３年度に増加していることが分かる。３つの動きの総数を比較すると、令和３年度の方が「＋90」も動きや遊びが増えている。これはやはり、保育者が計画を立て、子どもたちが動きや遊びをたくさん経験できるように実践してきたからであると考える。

雨の日の午前の動きや遊びの総数（令和２年）

年齢	１期			２期			３期			４期			総数
動き	押す	引く	くぐる	押す	引く	くぐる	押す	引く	くぐる	押す	引く	くぐる	
0･1歳児	0	0	1	2	0	2	0	2	2	1	0	2	12
2歳児	1	0	0	0	0	3	0	0	3	1	0	0	8
3･4･5歳児	0	0	0	1	1	1	0	0	0	0	0	3	6
総数	1	0	1	3	1	6	0	2	5	2	0	5	26

雨の日の午前の動きや遊びの総数（令和３年）

年齢	１期			２期			３期			４期			総数
動き	押す	引く	くぐる	押す	引く	くぐる	押す	引く	くぐる	押す	引く	くぐる	
0･1歳児	6	3	4	3	2	5	3	1	6	2	1	4	40
2歳児	7	3	6	1	0	6	2	1	6	2	1	4	39
3･4･5歳児	2	2	7	2	1	5	7	3	1	2	1	4	37
総数	15	8	17	6	3	16	12	5	13	6	3	12	116

その他晴れの日の午後、雨の日の午後の「押す」「引く」「くぐる」の動きや遊びの総数の比較の結果は以下の通りである。天気や時間に関係なく増えているのが分かる。

晴れの日の午後の動きや遊びの総数（令和２年）

年齢	１期			２期			３期			４期			総数
動き	押す	引く	くぐる	押す	引く	くぐる	押す	引く	くぐる	押す	引く	くぐる	
0･1歳児				2	0	6	3	0	4	0	1	1	17
2歳児	0	0	0										0
3･4･5歳児													
総数	0	0	0	2	0	6	3	0	4	0	1	1	17

晴れの日の午後の動きや遊びの総数（令和３年）

年齢	１期			２期			３期			４期			総数
動き	押す	引く	くぐる	押す	引く	くぐる	押す	引く	くぐる	押す	引く	くぐる	
0･1歳児	4	2	2	3	2	6	3	4	3	4	0	5	38
2歳児													
3･4･5歳児													
総数	4	2	2	3	2	6	3	4	3	4	0	5	38

雨の日の午後の動きや遊びの総数（令和２年）

年齢	１期			２期			３期			４期			総数
動き	押す	引く	くぐる	押す	引く	くぐる	押す	引く	くぐる	押す	引く	くぐる	
0･1歳児				0	0	2	0	0	1	0	1	2	6
2歳児	0	0	2				1	0	5	0	1	4	13
3･4･5歳児													
総数	0	0	2	0	0	2	1	0	6	0	2	6	19

雨の日の午後の動きや遊びの総数（令和３年）

年齢	１期			２期			３期			４期			総数
動き	押す	引く	くぐる	押す	引く	くぐる	押す	引く	くぐる	押す	引く	くぐる	
0･1歳児	1	2	2	2	3	3	2	0	4	4	3	2	28
2歳児							1	0	5	0	1	4	11
3･4･5歳児							7	3	1				11
総数	1	2	2	2	3	3	10	3	10	4	4	6	50

天気や時間帯に関係なく、令和２年度と３年度で「押す」「引く」「くぐる」の動きや遊びの総数を比較するとこのような結果になった。令和２年度に比べ、令和３年度、「押す」が「＋54」、「引く」が「＋29」、「くぐる」が「＋51」と、３つの動きや遊びが大きく増えており、３つの動きが強化されたことが分かった。

令和２年度

押す	引く	くぐる
17	6	37
54		

令和３年度

押す	引く	くぐる
65	35	88
188		

②動きや遊びの総数を比較して

雨の日の午前の動きや遊びの総数（令和２年）

年齢	１期	２期	３期	４期	総数
0･1歳児	36	64	55	58	213
2歳児	33	42	54	51	180
3･4･5歳児	42	61	52	62	217
総数	111	167	161	171	610

雨の日の午前の動きや遊びの総数（令和３年）

年齢	１期	２期	３期	４期	総数
0･1歳児	55	56	75	68	254
2歳児	54	58	51	59	222
3･4･5歳児	37	63	58	77	235
総数	146	177	184	204	711

上の表は雨の日の午前の動きや遊びの総数の比較であるが、令和２年より３年の方が「101」も動きや遊びが増えている。２年の方が、動きや遊びの総数が多い年齢や時期もあるが、令和３年度の方が４期の動きや遊びの総数はどの年齢も増加している。雨の日の午後も同様、令和３年度の方が「81」も動きや遊びが増えている。

次に令和２年度と３年度の晴れの日の午後を比較してみると、動きや遊びの総数は３年度の方が「10」減っている。特に３期、２年度の動きや遊びの総数は「101」に対し、３年度は「59」で３年度の方が「42」減っている。これは、２年度に設定している遊具が「16」に対し、３年度は「11」で、３年度の方が「５」少ない。電車ごっこ、投げる、回す、跳んで中に入る等の動きや遊びが見られた「フープ」、バランスをとって立つ、乗る、揺れる、運ぶ等の動きや遊びが見られた「バランスボード」「ビリボ」の遊具が３年度に設定されていないことが結果に表れた。「押す」「引く」「くぐる」の３つの動きや遊びに力を入れていた為、他の動きや遊びが体験できる遊具が減ってしまうという結果に結びついたと考える。これによって、保育者からも遊戯室の遊具が「押す」「引く」

「くぐる」の３つの動きを体験できるものばかりになり、その他の動きや遊びの体験がしにくくなったため、その他の動きや遊びとバランスの取れた計画にする必要があった。

雨の日の午後の動きや遊びの総数（令和２年）

年齢	１期	２期	３期	４期	総数
0･1歳児		37	51	53	141
2歳児	53		47	43	143
3･4･5歳児					0
総数	53	0	47	43	284

雨の日の午後の動きや遊びの総数（令和３年）

年齢	１期	２期	３期	４期	総数
0･1歳児	49	64	66	72	251
2歳児			55	59	224
3･4･5歳児					0
総数	49	64	121	131	365

晴れの日の午後の動きや遊びの総数（令和２年）

年齢	１期	２期	３期	４期	総数
0･1歳児		70	101	70	241
2歳児	45				45
3･4･5歳児					0
総数	45	70	101	70	286

晴れの日の午後の動きや遊びの総数（令和３年）

年齢	１期	２期	３期	４期	総数
0･1歳児	75	62	59	80	276
2歳児					0
3･4･5歳児					0
総数	75	62	59	80	276

４　総合考察

令和３年度は４期に渡り、遊戯室の計画を立てることで「押す」「引く」「くぐる」の動きが強化されると同時に、遊戯室の遊びがより充実し、バリエーションが増えたと言える。新しく遊具を買い替えることはなく、令和２年度と同じ遊具を使用していても、多種多様な動きが見られるようになり、遊びの幅が大きく広がった。これは、遊戯室の遊びに何が不足しているのかを明確にし、保育者間で話し合って計画を立て、遊びが連続して展開していくように子どもたちに関わってきたからである。保育者が明確なねらいや願いを持って準備することで、必然的に保育者はその遊びが展開されるように子どもに関わり、子ども自身が意欲的に遊ぶことができるように導いていった。園の遊具を保育者自身のアイディアで改良したり作成したりし、どうしたらもっと遊戯室で快適に過ごし、遊びを楽しめるかと常に試行錯誤し実践している保育者の姿があった。計画を立てることで「大人の動きが変わる。」、「意識して子どもの遊びを援助し、援助が明確にできるようになる。」、「子どもの動きを具体的にとらえて援助していく保育に変わる。」と保育者自身が予想していた通りの結果になった。子ども自身が遊戯室でどのように過ごし遊ぶかを選択し、快適に過ごすためには、遊びの計画が必要なのではないかと考える。

また、令和２年度、３年度の晴れの日の午後（３期）のように、動きや遊びの計画に偏りがあると、子どもが実際に体験できる動きや遊びは減り、バランスよく楽しむことができなくなる。そのため、大人がねらいを持って用意した特定の動きや遊びのみならず、その他の動きや遊びも子どもが選択して楽しめるような計画を立てる必要があることにも気づかされた。

本研究は、石川県金沢市という、雨が多く冬場も雪や雨のため、戸外遊びが制限される地域性や建物の構造、園の保育の考え方や、遊戯室を日常的に使うという条件から導き出されている。この研究の限界性として、保育室や園庭、近隣との関連性については検討していないことを申し伝える。

５　おわりに

弊園では、遊戯室は多目的で多機能に使われているが、保育者の関心は運動遊びの充実を図ることであったため、今回の研究へ焦点化することとなった。これまでも、保育の質の向上、遊びの充実のために園で取り組みをしてきたが、保育者の多忙化を考慮すると、遊戯室への言及や計画の作成は困難かに思われた。しかし、研修時間が確保され、子どもの遊びの変化に保育者の心が突き動かされたからこそ、最後までやり遂げることができたのではないだろうか。

本研究が遊戯室への興味をもつきっかけやよりよく利用するための一助となれば幸いである。

講評：遊戯室の利用実態Ⅱ ―遊戯室の遊びの計画は必要か―

評者：小林　芳文

昨年度の研究を発展させて、今年度の研究に取り組まれたこと企画審査委員としてうれしく思います。遊戯室での運動遊びの計画性や子どもの保育について、チームで話し合い、そこに課題を見出したこと、運動発達の支援に「幼児期運動指針」を参考にして、研究の手がかりとしたことがまず良かった点です。動きたくなる環境をどう設定するか、子どもの発達や興味関心を勘案してどのように保育するか支援するか、その取り組みの姿が良く読み取れました。伝統的にみられる跳び箱だけでの遊びでなく、そこにマットを組み合わせることで色々な遊びが生まれること、そこに保育者が気付いたことで活動の広がりがふえること、この試みを色々な遊具環境で展開してください。

３～５歳児の遊びも写真で見るように、視覚的にひきつける環境の大切さにも触れられていること、このことは今後の遊び環境つくりに役立つことでしょう。

研究タイトルが漠然としていることにより、研究の深みがかけてしまったこと、また、図表の文字が読みづらく、大きさや取り上げる枚数などの工夫をしていただけたら更に良くなっていたと思います。

評者：石川　昭義

この研究は、令和２年度の実践研究の継承となっています。遊戯室での遊びをテーマに、遊びの計画性や遊びの援助について保育者の話し合いを重ね、そこでの気づきや課題が率直に打ち出されています。研究方法では、遊びの数をカウントする比較のやり方には疑問が残るところもありましたが、考察のやり方は丁寧でした。特に、「保育者の子どもへの働きかけの意識の違いが動きや遊びの総数に関係しているのではないかと考える」、「保育者が意図して準備した遊びもあるが、子どもたちが自ら考えて生み出した遊びもあった」の記述は、率直な考察であり、むしろ、いい問題提起をしていると思います。新しい遊具が増えたことで、子どもの興味が高まる様子はうかがえましたが、「子ども自身が自分で遊び方を考え、やってみようとしたり遊んだりする姿が見られた」の具体的な記述があるとよかったと思います。先述のように、保育者の意図性・計画性と子どもの主体性との関係について、一層の考察が進むことが期待されます。

評者：髙木　早智子

昨年度の「Ⅰ」に引き続き、ご応募ありがとうございます。個人的にとても楽しみにしておりました。「Ⅰ」で今後の課題として提示されたものを継承し、研究として続けられた点は称賛に値します。また、あそびの計画を立てる際に、職員の意見を付箋に書き出し、全員に見える様にしたことで、園内の話し合いが促進されたことも評価できます。私としては、表中にあった遊具「コアーラ」がどんな物なのかとても気になりました（他の園や審査委員の方々にお尋ねしたのですが、どなたもご存じなかったので）。前回も申し上げましたが、特定の遊具と子どもたちの写真だけではなく、遊戯室全体の配置や環境構成図、全ての遊具そのものの写真等を添付されることで、この研究結果への読み手の理解が更に深まるのではないでしょうか。また、同様の環境や遊具を持っている他の園の参考にもなると思います。引き続き、保育実践研究への取り組みと報告をご期待申し上げます。

（2）研究奨励賞

〈課題研究部門〉

・課題研究部門①人との関わり

友達と思いを伝え合う大切さを教えてくれたさくらちゃんの存在 ～リレーの取り組みから～

網　沙耶香(富山県・射水おおぞら保育園)

・課題研究部門②遊びと学び

日常の連続性を大切にした保育活動 ―行事の改革を通じて―

中野　真綾（千葉県・布佐宝保育園）

〈自由研究部門〉

新砂運動遊び改革プラン ～運動遊びの標準化を目指して～

白須　咲良（東京都・新砂保育園）

保育テーマ設定による保育内容充実及び保護者への保育内容説明の効果

岩本　恵子（東京都・花房山目黒駅前保育園333）

運動あそびおよび戸外あそびから育つこと ～コロナ禍を過ごした子どもたち～

堀　友貴奈、岡本　幸子（京都府・幼保連携型認定こども園愛光こども園）

「生きる力」を育む保育を目指して ～園庭環境を見直す取り組み～

横井　香澄、森　悠希（鹿児島県・幼保連携型認定こども園建昌こぎく保育園）

《課題研究部門》

課題研究①　人との関わり
友達と思いを伝え合う大切さを教えてくれたさくらちゃんの存在
～リレーの取り組みから～

富山県・射水おおぞら保育園　**網　沙耶香**

１．はじめに

本研究は、子ども達が運動会という園行事への取り組みを通して、それぞれの違いを理解し、違いを超えてつながり方を見つけていく姿について、担任として振り返ることから、伝え合うことの難しさと意味を考えたものである。

本園の保育目標は「すこやかな子・のびやかな子・やさしい子」であり、全体的な計画において、心身すこやかに思いを発現すること、試行錯誤を重ねながら様々なことに挑戦していくのびやかな様、友達と共に考えて生活をつくり出すことができるやさしい心を育むことは、園の全ての教職員が共有している思いである。

一つひとつの行事のあり方についても、上記のような保育目標をもとに、その時々の状況に合わせながら考え取り組んできたが、近年ではコロナ禍になってさらに柔軟に、子ども達と共にみんなでその在り方やそこで大切にしたいことについて考え、保育を行ってきた。そうして続けてきたコロナ禍での行事も、今年で２回目となり、新たな方法での園生活や園行事にも慣れ、子ども達も昨年度の子どもたちの姿を受け継ぎながら取り組むようになり、新たな文化として根付きつつある。その中でも年長児には、卒園した子ども達が創り上げてくれたものを今の子ども達の姿に合わせながら、今年ならではの活動となるよう取り組んでいる。

コロナ禍での活動において、何といっても大きな課題は「集まること」である。例えば行事などは、コロナ禍以前は全年齢が集って行うことが多かったが、コロナ禍となってからは、コロナ感染症予防の観点から、１つの行事の中で年齢ごとに時間を分けたり、日を分けたりと、人数に制約を設ける工夫をせざるを得なくなった。しかし今年の運動会の活動では、子どもたちから昨年度の年長児への憧れの思いや、心に残る存在の大きさがある様子が伺えたり、また子どもたちから「保育園には、にじさん（０、１歳児）、ほしさん（２歳児）、しろさん（３歳児）、あおさん（４歳児）、あかさん（５歳児）、みんながいる」といったことや、「みんなのうんどうかいやもん」といった発言があったりしたこともあり、人数の制約は変更できないものの、このような状況だからこそ改めて、卒園児、保育園内、保護者とのつながりを大切にし、それを意識した内容にしていきたいと考えた。

以下は、そのような考えの中で取り組んだ、５歳児の運動会に向けた「リレー」での取り組みの事例である。私が担任として、つながりを大切にした取り組みにしたいと考えつつ、子どもたちの“心をひとつに”にしていく様を、自分の思いを伝え、友達と思いを伝え合う大切さのきっかけを作ってくれた一人の子どもの姿をもとに考察をしてみたい。

２．昨年とつながる

本園では、運動会まで約１か月前の８月下旬より、園全体が少しずつ運動会に向かった活動が生成されていくようにしている。運動会は、日々の園生活の中で、少しずつ気持ちが高まる中で迎えたい。よって今年度も８月下旬には、保育者も運動会に向かう生活を意識した環境の設定を行っていた。また子ども達も、年度初めの新しい学年にも慣れて、そして暑い夏が過ぎたこの季節は、戸外での活動が楽しくなる季節でもあり、昨年度までの経験ともつながって、自然と運動会で行う種目を意識した遊びがいたるところで展開されていく姿が見られるような時期でもある。以下はそんな時期に起こった事例である。

事例１「前のあかぐみさんみたいに！」　８月29日

子ども達は園庭に出ると、一本の白いラインが引いてあることに気づく。子ども達は「あーリレーのやつや！」と言っては、自然とその線に沿って走り出す。友達や保育者と一緒に走ることを何度も楽しんでいる。

しゅん：「早くリレーしたいな！前のあかさん（５歳児クラス)かっこよかったよね！じゅんくん（昨年の５歳児）めっちゃ足速かった！」
たくや：「(腕を振る真似をして）こうやって走ってた！」
ともえ：「雑巾がけしたら足速くなるって前のあかさん言ってたよ！」
保育者：「リレーってどんなことするの？」
しゅん：「バトン持って走るんぜ！」
いおり：「バトンでこうやってカン（タッチ）ってするん！カンってされたら次の人が走るん！」
保育者：「リレーって一人でよーいどん！ってかけ

っこするんじゃないんや！バトンでカンってしてもらったら走るんだ！」
子ども達：「うんうん」と頷く。
えりな：「あかさん、自分のバトンつくっとったよね！」
ともえ：「そうそう！牛乳パックとかで」
たくや：「おれ、前のあかさんみたいに速く走りたいん！めっちゃかっこよかったもん。だから走る練習してくる！」
そんなやり取りが交わされた。そしてその日の給食後には、
たくや：「先生！バトンつくりたい！」
保育者：「いいね！先生も一緒に作ろうかな！何で作る？」
たくや：「牛乳パックを、丸めて…棒にするん！」
ともえ：「何しとるん？（バトンを作っている姿をみて）私も作りたい！」
いおり：「私もする！」
とバトン作りが始まったのだった。

前述したように、運動会のために練習の時間を取るというよりも、保育者は運動会のリレーの活動のきっかけになってほしいと思い、園庭に白いラインを引いておいている。きっかけになることを想定しつつも、同じ環境でも１本の線があるだけで自然とかけっこが始まり、そしてリレーが始まると、子ども達の姿がこんなにも変わるのだなと改めて驚いた。一人ひとり全力で走ることを楽しんでいる様子だった。保育者も子ども達と一緒に走ることを思い切り楽しんだ。

子ども達は頻繁に、「前のあかさんみたいに」と、昨年度の5歳児を話題にしている。子ども達の中には昨年度の５歳児の姿をとても覚えている子が多く、またあこがれの心を抱いていることがわかった。この時の様子は印象的で、私の中で、これまでの年長児たちが創り上げていたことが今の年長児に引き継がれていくのを確かに感じた瞬間だった。そしてその心が子ども達の“やってみよう“とする意欲に繋がっているようにも感じられた出来事であった。

そして、コロナ感染症対策として一人１つのバトンを持って、次の人にタッチしたら走るという新しいルールのリレーを２年前の卒園児が考え、それが子どもたちの中に確かに引き継がれていることもわかった。

３．走るって楽しいから、もっと速くなりたい

最初は走ることを楽しんでいた子ども達だったが、リレーを楽しむ中で“もっと速くなりたい”“どうやったら１位になれるか”という気持ちが日に日に強くなり、数日前から部屋の友達と相談し、作戦（走り方やラインの近くを走るなど）を考える姿が見られるようになってきた。その中で生まれた新しい作戦があった。

事例２「どうやったらもっと速く走れるかな」
９月12日

この日も子どもたちは園庭に出てリレーを楽しんでいた。
たくや：「走る順番いつも同じやからかえたら、もっと早くなるかもしれん！」
保育者：「どういう風にかえるの？」
たくや：「速い人から走るん！」
えりな：「じゃあ、たくやくんから走って…え？でも誰が速いとかわからん！」
保育者：「そうだね。みんな速いもんね。どうやったら速いとかわかるん？」
みんなは考え込んでしまう。
ともえ：「みんなで、かぜ組さん（私のクラス）だけで走ってみたら、どう？」
みんな：「それいいね！みんなで走ってみよう！」
さっそくかぜ組のみんなで走ってみた。
ゴールした順にリレーの順番が決まった。そんな中さくらの表情が怒っているように見えた。
保育者：「さくらちゃん、どうした？」
さくら：「・・・・・・・（下を向いたまま）」
保育者：「この順番が嫌だったん？」
さくら：「・・・・・（私の目を見る）」
私は、さくらの姿や表情からこの順番に納得していないのだろうと思い、他の子ども達に伝えた。
保育者：「さくらちゃんもしかしたらこの順番嫌なんかもしれん」
いおり：「さくらちゃん、嫌なん？」
みんなが声をかけても怒った表情でそっぽを向くだけだった。
たくや：「でもみんなで決めたし……」
さくら：「・・・・・・（うつむき、黙ったまま）」
保育者：「黙ってても気持ち伝わらないよ？言いたいことあるんだったら口で伝えないと、みんなもさくらちゃんの気持ち分からないな」
それでもさくらは黙ったままだった。
そうしているうちにリレーが始まる時間となってしまう。
ともえ：「リレー始まる！！！この順番でしよう！」
と作戦の順番でリレーすることになった。

新たな作戦に対して黙り込んださくら（５歳児）は、３歳児より本園に入園したが、病気療養のために４歳児後半～５歳児前半にかけて、月に２～５日間のみ登園するといったことなどもあり、登園時には母と離れがたい姿があったり、本児のその日のコンディションや体力などの体調面を考え、保育園で過ごす時間も短かったりし

ていた。今年の７月頃からは治療も落ち着き、毎日保育園に登園できるようになり、「○○ちゃんいるかな」「今日は○○して遊びたい」など、同じクラスで気の合う友達もでき、自分の意思も強くなってきたように思う。その中で自分の思いを通したいという気持ちが強くなってきており、思いが通らない時には怒ったり、無言になって活動に入れなかったりすることが多く見られるようになってきた。私自身、本児の日々の成長を喜びながらも、時には自分の思い通りに行かないこともあること、自分の思いを言葉で伝える大切さ、気持ちの切り替えなどを課題として援助を行ってきた。

さくらには病気による体の発達差（足の長さに差があり調節用の靴着用､両耳高音難聴により補聴器装着など）はあるものの、いろいろなことにチャレンジしてみようという気持ちは人一倍ある。クラスの友達には、本児の特性を理解し､本児が困っている時には「どうしたの？」と声をかけ助けてくれたり、本児の思いを代弁して保育者に伝えに来てくれたりする姿がある。

数日前から走り方やラインの近くを走るなどという速く走るための作戦は聞かれていた。そんな中、「走る順番を変えてみる」という作戦がこの日初めて出てきた。私は、子ども達の考えを大切にしたいと思った。さくらの体の発達からクラスのみんなで走った時にハンディが大きいように感じ、走るスピードの差がはっきり分かってしまうのではないかと私は複雑な心境ではあったが、子ども達の考えた作戦だったことを尊重し、見守ることにした。速くゴールができた順に走る順番が決まったことに対し、さくらは納得していない表情であったが、それは悔しさからくるものなのではないかと思った。しかし、リレーの始まる時間が迫ってきていたので、その気持ちを受け止めてあげられなかった点は、私自身の反省点でもある。

そして、さくらの納得をしていない表情を気にしつつ、新しい作戦でのリレーが始まった。

事例３「初めての大きな壁、６位」　　９月12日

さくらが怒った表情のままリレーが始まる。普段さくらが怒ると活動をしない、納得するまで黙ったままということが多く見られたので、このような心情でさくらは走るだろうかと思いながらも見守った。さくらの順番がきた。

さくらは怒りながらもコースに出てきた。私はまずそれはさくらが気持ちを調整させてみんなと共に活動を行おうとする育ちの大きな一歩だと感じ、さくらのことを信じて声をかけず、その姿を見守ろうと思った。順位２番でさくらにバトンがつながった。しかしさくらは一瞬は走ったが、すぐに立ち止まり、歩き始めたのであった。

ともえ：「先生！！さくらちゃん歩いとる！！」

いおり：「さくらちゃん！！！走って！！負けるーー！！」

たくや：「さくらちゃん！走って！！」

子どもたちは、さくらの歩く姿を見て、大きな声で叫び、そして負けてしまうと泣きだす子もいた。私はさくらが怒りながらも前に進もうとする姿を目で追いながらも、泣き崩れる子ども達の声も聞き、どう子ども達に声かけしようかと頭の中で考えて迷っていた。さくらは歩きながらだが、次の人にバトンをつなげ、バトンは最後の人までつながった。しかし子どもたちは、結果発表の前から大きな声で泣いていた。

保育者（私）：「まだ何位か決まったわけじゃないよ。途中から泣くんじゃなくて最後まで友達のことを信じてあげようよ」ととっさに言った。

順位を発表した。

保育者（私）：「６位かぜぐみ（私のクラス）」

かぜぐみの子ども達にとって初めての６位だった。泣いている子ども達。

保育者（私）：「６位悔しいね。一生懸命走ったもんね」

他のクラスの子ども達：「もう一回したい！」

保育者（私）：「じゃあもう一回しよう！その前に一回お茶飲んでこよう」

その間にかぜ組の子ども達を集めてみんなで話をすることになった。

私自身は、さくらが怒りながらも歩き、前に進む姿に、成長を感じていた。それはきっとリレーだったから途中で投げ出さず、次の人にバトンをつなげるという目的があり、前に進めたのだと思われる。以前、子ども達とリレーのルールを考えた際、バトンを最後の人までつなげるということを決めていたので、それをさくらもわかっていて、自分がやめてしまったらバトンがつながらないということは分かっていたのではないかと考えた。私自身さくらの気持ちもわかる、しかし他の子ども達の悔しい気持ちもわかり、どういう風に話しをしようかと悩んだ。この時は答えが出なかったが、このままでは子ども達の意欲が下がったままになると思い、子ども達を集めて話しをすることにした。

４．思いを伝え合う

子どもたちの本当の思いは何か、走らなかったさくらを責めたり、速い人だけが選ばれるようなことはないか、速く走れる子が意欲を無くしたりはしないだろうかと不安を抱えつつ、話し合いを始めてみた。

事例４「走ってほしかった・・・」　　９月12日

保育者：「６位悔しかったね。先生も悔しかった。一生懸命走ったのに」
みんな：「・・・・・・（数人泣いている）」
黙ったままだったがみんなの目はさくらに向いていた。
保育者：「みんなはなんで泣いてるの？」
みんな：「・・・・・・（黙ったまま）」
保育者：「みんな泣いててもわからないよ。みんなに気持ちを伝えるって大事なこと。いおりちゃんはなんで泣いてるの？ともえちゃんも」
いおり：「さくらちゃんに走ってほしかった…」
ともえ：「さくらちゃん歩くんじゃなくて、走ってほしかった…」
保育者：「他のみんなは？」
子ども達：「うんうん」と頷く。
さくらは少し驚きながらみんなの顔を見ていた。
保育者：「さくらちゃん、みんな走ってほしかったんだって。だから泣いてるんだって。さくらちゃんどうして歩いてたの？なんか調子悪かった？」
さくら：「・・・・・・・・・つかれたから！！！」
保育者：「みんな速く走りたい！１位になりたい！って思って作戦も考えて一生懸命走ってたのに、さくらちゃん疲れたから歩くの？」
さくら：「つかれたから！！！」怒ったように言う。
保育者：「わかった。みんなもう一回リレーするけど疲れたみたいだし、お休みする？」
さくら：「お茶のんだから、走れる」
保育者：「みんなどう？次はさくらちゃん走る！って言ってる」
たくや：「いいよ。もう一回がんばろう！」
保育者：「よーし！次こそ頑張るぞ！！なんかみんなが自分の思いを言ってくれたからこれで心が１つになったみたい！さあ、みんな手出して（円陣をくんで）、心をひとつにがんばるぞ！」
みんな：「えいえいおー！」
子どもたちは走って園庭に出て行った。

先述したように、私自身もどの立ち位置で話を進めていけばいいのか分からなかったが、まず自分の思いを素直に友達に伝える、伝え合うことが大切なのではないかと思い、子ども達を集め、振り返りの中でさくらが歩いたことに触れて話した。結果、さくらが走らないのを見て、そして最下位がわかりあれほど泣いていた子どもたちであったが、さくらの行動を誰も責めようとはしなかった。さくらの「つかれたから」も本当の理由ではないかもしれないと思っている。さくらは、友達が泣いている姿、思いを素直に伝えてきたことに驚いている様子がみられた。さくらの「つかれた」という言葉はその驚きや戸惑いの結果として出てきた言葉なのではないかと推察する。初めての６位となり悔しい経験をしたからこそ、クラスの友達ともう一度頑張ろう！次は１位になるぞ！という気持ちが強くなり、みんなの“心がひとつに”なったように感じた場面であった。

５．まとめ

今回のリレーでの取り組みを通して、友達に思いを伝える大切さ、クラスのみんなで相談し、考えることのきっかけを作ってくれたさくらの存在は、私にとっても、クラスの子ども達にとっても大きい。行事を子ども達とつくり上げていく中で、保育者がどのような思いで子ども達と向き合っていこうか考えていくことも大切だが、その分、私の関わりや声掛けはこれでよかったのだろうか、と悩むことも多くある。そんな時、もう一度子どもたちの声を聞き、子ども達に助けてもらい、支えてもらう部分がたくさんあることを改めて実感した。

また、子ども一人ひとりの成長や課題は、毎日登園し、一緒に過ごしているからこそ保育者には見えてくる部分があり、子ども達も園生活の中で、友達からたくさんの刺激を受け育っていく部分もある。その中で、さくらのように、毎日の登園や集団の中での経験が異なる子どももいる。しかしさくらは、この事例の後も、リレーの中でまだまだ自分の思いを通そうと怒っていることはあったが、「順番変わってあげるよ」とさくらの気持ちを受け入れてくれる友達がいたり、さくらがリレーで走り切った後「がんばったね」と頑張りを認めてくれる友達がいたりと、周りの友達に支えられたことで、怒っても歩くという姿は見られなくなった。同じクラスの中で、同じように経験を重ねていく中での成長もあるが、意図せずその経験にずれが生じたとしても、さくらのようにその時々に経験を積み重ねていくこともまた、心の成長に繋がっていくのではないかと思われた。さらに、同じクラスの子ども達だけではなく、他のクラスの子ども達がいたからこそ、クラスの結束が強まり、向上心やクラスの“心ひとつに”に繋がったのではないかと考える。

ただ、日々の生活の中で、同じ経験を重ねていく中で、一つになったことと、皆が同じであることを混同しがちであることを反省したい。一つになることはみんなが同じになることではなかった。皆は異なっているから一つになっていく。そのことをさくらは教えてくれたように思った。このことを教えてくれたさくらの存在に感謝しながら、今後も一人ひとりの個性を大切に、子どもたちと向き合っていきたいと思う。

講評：友達と思いを伝え合う大切さを教えてくれたさくらちゃんの存在
～リレーの取り組みから～

評者：小林　芳文

研究テーマのように、友達とのやり取りで思いを伝え合う、年長児ならではの微妙な心理発達の姿、そのやり取りのコミュニケーションの展開を通して、心温まる素晴らしい研究として拝見しました。研究のきっかけが事例１にあるように、園庭に白いラインを引いておき、そこから運動会のリレー活動にまで発展させていく流れを作った保育のアイデアは、子ども自身に問題解決を促す、大切にしたい「学びや遊びのスタイル」として良かったと思います。対象となった子どもの、他の子どもとのリレーでの取り組みで、事例の記述も上手にまとめられており、そのやりとりから心の成長の様子が伝わってきました。保育現場ならではの実践研究でしたが、研究テーマにもう少し工夫があれば良かったですね。大切ないくつかのキーワードをあげてみて、それを並べ替えてみたりすることなども参考になると思います。

評者：馬場　耕一郎

運動会という園行事への取り組みを通して、子どもたちが違いを超えて繋がり方を見つけていく姿に着目した研究です。行事のあり方について、柔軟に子どもたちと共にみんなでその在り方や大切にしたいことを考え、取り組んだことは、大変素晴らしいと思います。

リレーの場面を通し、友だちに思いを伝える大切さや、みんなで相談し考えることのきっかけになったことは、子どもたちの成長に良い刺激を与えたと思います。

今回の研究を通して、一つになることは、みんなが同じになることではなかったことに気づき、みんなが異なっているから一つになっていくことを学んだことは、大変重要であると感じました。

評者：田和　由里子

コロナ禍における行事の見直しを子どもたちと共に行って来て、今年度は、昨年度の行事の方法を参考に運動会を開催された報告でした。５歳児の運動会に向けた「リレー」での取り組みの事例も詳しく書かれていました。走る順番も子どもの意見を取り入れ、本児の気持ちが保育者と関わるなか、１日で変化することができたのは、日頃からのコミュニケーションが取れているのだろうという事が伝わってきました。また、感染症対策として、個人持ちのバトンの製作は良いアイデアだったと思います。今後、自園の参考にしたいです。写真が掲載されていると状況が伝わりやすかったと思います。

《課題研究部門》

課題研究②　遊びと学び
日常の連続性を大切にした活動
―行事の改革を通じて―

千葉県・布佐宝保育園　**中野　真綾**

Ⅰ　はじめに

当園では保育方針に「遊び中心の保育」を掲げ、子どもが主体的に遊びを深め、遊びを通して学んでいく環境を作る保育を行っている。しかし、かつては一斉活動の時間が大半を占め、大人主体の保育になってしまうことが多かった。2011年頃より保育方針の原点に立ち返り、子どもにとって本当の学びになる「子ども主体」の保育を目指し、保育実践や行事等の様々な見直しを継続的に行っている。

見直しを行う過程で、様々な課題が浮かび上がってきた。そのうちの１つとして、行事前には練習に追われることで、最も重要な「遊びの時間」が削られてしまっているという問題があった。そこで2019年度には、行事の中でも特に重要と位置づけていた「発表会」の内容の見直しを行った。(注１) その実践では、日常保育と行事に連続性を持つことの大切さについて再確認し、「行事本来の目的」を根本から見直す機会となった。

しかし、そもそも当園で重要な行事として位置づけられてきた発表会、運動会、夏祭りの３つの行事は、大人が決めたことを練習して、一日で披露や競技をし、その後の継続性があまりないものであった。新しい「教育・保育要領」(注２) の趣旨に沿った保育実践を行うには、さらなる改革が必要であろうという声が園内で多く上がった。

そこで、2020年度には「子どもの主体性」と「日常保育から切り離さないこと」を念頭において上記３つの行事は廃止し、運動会は親子レクや運動遊びへ、発表会は展覧会を複数回開催するなど、要素を分散する形へ変更した。

上記の３つの「行事」が無くなるということは、保護者にとって参観の機会が減ることとなるため、不安や不満の声も多く聞かれた。保育教諭にとっても、今まで当たり前のように行っていた行事を無くしてしまい、本当に質の高い保育を提供できるのかという不安と格闘しながらの実践となった。

そこで本稿では、筆者が「日常保育との連続性を大切にした行事」を念頭に置き行った保育実践の記録をもとに、「10の姿」(注２) と関連付けて考察を行い、改善点や課題について論ずる。考察を行う対象は、筆者が令和３年度に担任した５歳児クラスである。５歳児クラスは21名の在籍で、他保育教諭との２人の担任であった。様々な保育実践の中でも、特に「日常保育と行事の連続性」を感じることができた「おまつりごっこ」と「鳥の博物館での園外保育」について取り上げる。また、保護者への情報発信の１つの方法として開催した「土曜日展覧会」についても述べ、考察を行う。

Ⅱ　保育実践と考察

１　おまつりごっこ

１－１　保育実践

ア　従来のおまつりごっこ

当園はこれまで、「おまつりごっこ」や「買い物ごっこ」の内容を保育教諭主体で決定し、制作や準備を行ってきた。また、おまつりごっこを行う日を一日に設定し、翌日以降は他の遊びへと移っていたことで、日常保育との連続性がなく、おまつりごっこが深い学びにはつながっていなかった。

イ　屋台

保育教諭が用意した割り箸を見て、男児数名が割り箸鉄砲で遊び始めた。次第に子ども同士で店員と客の役割を決め、屋台風にして遊ぶ姿が見られるようになってきた。そこで、クラス全体でおまつりごっこが盛り上がるような手立てを考えていった。

まずは、子ども達がおまつりごっこに興味が持てるよう、保育教諭が店員役になり、射的屋とくじ引き屋を開いた。すると「ぼくも店員になりたい。」と意欲的に参加する姿や、「いらっしゃいませ！」「こっちはくじ引きができますよ！」等、店員になりきって遊ぶ姿が見られ始めた。更に、「りんご飴屋もあるよね。」「かき氷屋もあるといいよ。」等、夏祭りについて会話をする声が聞かれた。そこで、保育教諭から子ども達へ、クラス全体でおまつりごっこを開催することを提案した。すると子ども達からは賛成の声が多く聞かれた。

次に５つのグループに別れ、グループ毎に開きたい屋台について話し合った。話し合いをした結果、屋台は焼きそば屋・綿あめ屋・かき氷屋・射的屋・金魚すくい屋の５種類に決定した。

続いて、グループ毎に時間を設けて小道具作りを行った。普段の遊びでも、引き続き屋台で使用する物を制作したり、自分が制作した物を「これも使って良い？」とおまつりごっこで使用する姿も見られた。

他クラスの保育教諭の「売り買いのやりとりに加え、売り物を作る工程もできるようにすると遊びがより盛り

上がる。」というアドバイスを活かし、焼きそば屋は鉄板やヘラを作り、焼きそばを鉄板で炒められるようにした。更に、子ども達の意見を引き出しながら小道具作りを行っていった。すると、ソースをかけたり野菜をその場で混ぜられるようにしたり、ソースは袋の物と容器の物があることや、紅生姜や青のりがかかっていることなど、子ども達から様々な意見が出た。

焼きそば屋は日常生活での体験を忠実に再現しており、特に盛り上がっていた（写真１）。反対に、かき氷屋は作る工程がなく、店員役が飽きていた。そこで、シロップをかけられるようにしたり、廃材をかき氷機に見立て、作る動作も加えると、店員役も楽しんで遊ぶ様子が見られた。

他クラスを招待してお祭りごっこをすると、異年齢交流の機会となった。年下の子どもに店員役を譲ってあげたり、小道具を貸してあげたりと、思いやりのある行動が見られるようになった。

写真１　鉄板で焼きそばを焼く様子

ウ　保護者との連携

「浴衣を着て遊びたい。」と子ども達から声が上がっていた。そこで、浴衣がある家庭には持参をお願いし、１ヶ月程度園で預かるようにした。

浴衣がない子も着られるように、以前発表会の衣装として使用されていた浴衣や甚平を用意した。浴衣を着て遊ぶことで、より祭りの雰囲気を味わいながら楽しむことができた。始めは保育教諭が着付けを行っていたが、繰り返し遊ぶ中で次第に「自分で着られるようになりたい。」という想いが芽生え、浴衣の着付けができるようになる子どももいた。

１ヶ月経った頃、美容師免許を持つ保護者から「子ども達のヘアアレンジをさせてほしい。」と提案があった。そこで、保育室に美容室コーナーを作り、仕事の休みに合わせて来てもらった。髪を結ってもらい、浴衣を着ると、「可愛くしてもらって嬉しいね。」「本当にお祭りみたい。」等の声が聞かれ、普段のおまつりごっこよりもより非日常感を楽しんでいる様子が見られた（写真２）。

遊んでいる姿の写真を配信すると、保護者からは「ヘアアレンジをしてもらったことを楽しそうに家庭でも話をしていた。」「自分では複雑な髪型にしてあげられないので、良い経験になった。」等の声が聞かれ、子ども達が楽しんでいる様子が伝わっていることが分かった。

写真２　ヘアアレンジの様子

エ　盆踊り

子ども達から「盆踊りを踊りたい。」という声も上がっていた。保育教諭が盆踊りの曲を数曲提案し、子ども達と話し合った結果、「ドラえもん音頭」が選ばれた。振りは大人が一方的に教えるのではなく、動画を参考にして子ども達と一緒に覚え、普段の遊びでも繰り返し楽しんだ。

動画は家庭でも見られるため、親子で盆踊りを楽しむ様子がみられたり、担任と保護者で盆踊りについての会話ができた。

オ　給食室との連携

栄養士と相談し、遊びの様子に合わせて献立に屋台風のものを複数取り入れた。そこで、屋台の雰囲気がより楽しめるよう、唐揚げが提供される日には紙コップに入れてもらったり、焼きそばが出る日には透明パックの用意をお願いした。更に、ホットプレートから目の前で透明パックに焼きそばを盛ることで、屋台で食べものを買うことを再現し、楽しめるように工夫をした（写真３）。すると、普段はあまり食事に興味がないT男が、おかわりをする姿が見られた。

更に栄養士からの提案でバナナをチョコバナナ風にしたり、おやつの菓子を袋詰めして、輪投げの景品のようにした。

写真３　焼きそばを配る様子

１－２　考察

繰り返し遊ぶ中で、子ども達は店員の動きの効率化を図ったり、自分の最適な役割を考える姿が見られるようになった。このような姿から「思考力の芽生え」が高まっていったと考える。

更に、自分のグループ以外の店員も経験することで、アイデアの交換をする姿も見られた。その中で、「焼きそばをテイクアウトするなら、袋の（追加の）ソースにしたら持って帰りやすいよ。」「かき氷に果物も乗せたら美味しそう。」等の声が聞かれ、更に遊びを深めることができた。これにより「豊かな感性と表現」を高められたと考える。

これまでの盆踊りは、保育教諭が一方的に振りを教え「夏祭り当日までに覚えられるように」していた。しかし、保育教諭と子どもが教え合うことで、子どもに踊り方を聞くと、「ここは、こうするんだよ。」と生き生きと教えてくれたり、覚える過程を一緒に楽しむことができた。「覚えさせられる」盆踊りよりも、子ども達は主体的に盆踊りを楽しむことで、自然と盆踊りが馴染み深い物になったと考える。

家庭と連携し、日常的に浴衣を着られる環境づくりをしたことで、自分で浴衣を着られるようになり、「自立心」を高められたと考える。

おまつりごっこを繰り返し楽しめるように環境設定をしたことで、子どもと保育教諭がどちらも反省を次に活かすことができた。工夫や対話を重ねながら遊ぶことで、おまつりごっこに持続性が生まれ、より深い学びへと繋がったと考える。保育を行う際には、１つのことに対して納得がいくまでとことん引きずる粘り強さを大切にしていきたい。(注３)

２　鳥の博物館での園外保育

２－１　保育実践

ア　従来の園外保育

当園ではこれまで、年度始めに園外保育の場所や日程を決定していた。子ども達の興味や関心は考慮されていなかったため、当日に盛り上がりは見られても、翌日以降の遊びにはつながらず、また「日常保育」に戻っていた。

イ　園外保育当日とそれまでの様子

Ａ子が家族と「我孫子市鳥の博物館（以下：鳥の博物館）」に行ったお土産を見せてくれたのをきっかけに、子ども達の中で鳥に興味を持つ姿が見られた。

そこで、図鑑を用意したり鳥に関するクイズを出すことで、子ども達が鳥により興味関心を持てるよう手立てを行った。すると、園庭や散歩先にいる鳥にも興味を持つ様子が見られたり、気になった鳥を図鑑で調べたりと、鳥について興味・関心を深めていく様子が見られた。

園長から鳥の博物館の見学を提案されたので、子ども達に見学に行ってみたいか聞いてみると、「たくさん鳥が見られるの？行きたい！」「お母さんに行きたいって言っていた所だ！」等、賛成の声が多く聞かれ、園外保育を行うことが決定した。

当日は、少人数のグループに１人ずつ保育教諭がついて見学を行った。事前に知識を深めていたことで、展示物を見ると「図鑑で見るよりかっこいい！こんなに大きかったんだ！」「あ、僕の好きなイヌワシ見つけられた！」「ハチドリって本当に小さい！」等の声が聞かれた。

園外保育が終わった後も子ども同士でクイズを出し合う姿が見られたり、鳥が子ども達の中でより親しみのある生き物へと変化していく様子が伺えた。

ウ　保護者との連携

園外保育後、Ｙ子の保護者から「ダチョウの卵を寄贈したい。」と提案があった。Ｙ子が家庭で「鳥の博物館で大きな卵を見るのが楽しかった。」と保護者に話したことがきっかけだった。Ｙ子の保護者が、ダチョウの養鶏の経営者である知人から、卵を取り寄せてくれた。

まずは、ダチョウの卵に触れて感触や重さを体感した。子ども達からは「割れちゃいそう。」「思っていたよりもずっと重いね。」「ツルツルして濡れているみたいだ。」等の声が上がった。

エ　重さ比べと手作り天秤

ダチョウの卵を鶏卵やうずらの卵と重さ比べをした（写真４）。その結果、鶏卵の約24個分がダチョウの卵１個分の重さに等しいことがわかった。

写真４　重さ比べの様子

使用した秤を置いておくと、保育室にある物を秤にかけて、重さ比べをする姿が見られた。そこで、重さ比べを視覚的に楽しめるよう、ハンガーと廃材のティッシュ箱を使用して手作りの天秤を用意した（写真５）。

筆者としては、手作り天秤を使用して、保育室にあるままごとや積み木等の重さ比べを楽しむ姿を予想していた。しかし、実際に保育室に置いてみると、子ども３人が集まり１人は審判、他２人は選手役になり「ようい、どん！」の合図で選手役が天秤の皿に玩具を入れ、どちらがより天秤の中に重量を多く入れられるかを競い始めた。

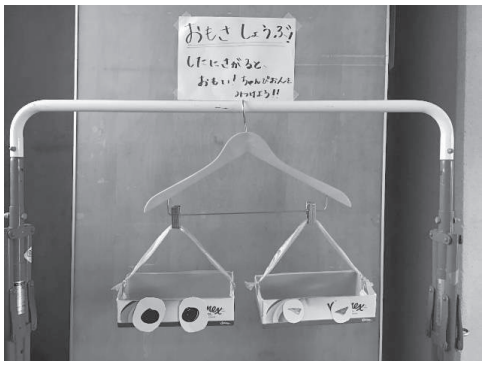


写真５　手作り天秤

オ　ダチョウの卵の目玉焼き

数日後、ダチョウの卵を目玉焼きにして食べた。アイスピックを使用して卵の殻を割り、大きな黄身が出てくると、子ども達は驚いた様子であった（写真６）。その一方で、ホットプレートに乗った卵を見て、「育てなくていいの？」「赤ちゃんになるはずだったのに、食べてもいいのかな。」と、ダチョウの命について考える姿が見られた。

写真６　ダチョウの卵の目玉焼き

２－２　考察

年度始めは、行事予定に園外保育の計画は立てられていなかった。しかし、令和３年度は計４回（うち１回は新型コロナウイルスのため学級閉鎖となり中止となった。）園外保育を行うこととなった。

園外保育に日常保育との連続性を持つことで、園外保育に行く前から子ども達は主体的に知識を深めていた。よって、園外保育当日も学びを深めようとする姿が見られたのだと考える。

ダチョウの卵の目玉焼きを見て、ダチョウの命について考える発言が聞かれたのは、鳥の博物館の見学を通し、卵と命が関連付けられていた証拠である。この姿から、園外保育を通して食物連鎖を学んだり、自然との関わり・生命尊重が高められたのではないかと考える。

測りで重さを測って遊ぶことを通して、「大きさが小さい方が重いこともあるんだね。」「同じ大きさの物でも重さが違うんだね。」などと気が付く様子が見られた。これにより、数量・図形・文字等への関心が高められたと考える。

手作り天秤を使って遊ぶ姿を見て、子ども達は日々遊びを楽しむなかで、思考力の芽生えが高まっているのだと感じた。保育教諭の予想を超える遊びをする姿を見て、保育者が子どもの発想力を大切にし、制限をしすぎないことが重要であると気が付いた。また、常に「驚きの目」で子どもを見て、「今日は子どもに何回驚いたかな。」と、子ども達の予想外の遊び方や使い方をする柔軟性や発想力の素晴らしさを振り返られるようにしたいと考える。(注４)

３　土曜日展覧会

３－１　保育実践

ア　開催の目的と内容

子ども達が普段の遊びから学んでいる内容と、その時に興味を抱いている内容を保護者に発信し、保護者から園の活動に理解や納得を得ることを目的としている。

５歳児クラスの親子を対象に、自由参加とした。保育室に子ども達が遊びの中で制作した作品や、担任が模造紙に遊びや生活の様子について書いたものを掲示したり、遊びで使用している道具や材料を用意し、体験できるようにした。これは、土曜日展覧会を通して普段の遊びや生活の一部に保護者も「参加」できる機会を設けることをねらいとした（写真７、８）。

写真７　おまつりごっこを体験する様子

写真８　制作物を披露する様子

また、土曜日展覧会は、令和３年度より毎月最終土曜日に開催した。尚、新型コロナ蔓延防止期間中は中止となった。

イ　開催の様子

クラスだよりでは伝え切れていなかった子ども達の様子や、遊びに対する細かな工夫などを保護者へ伝えることができた。例えば、写真や動画で伝えてきたおまつりごっこの様子も、実際に一緒に遊んでもらうことで、焼きそばのソースが何種類もあることや、やりとりをする際の生き生きとした表情を実際に見てもらうことができた。また、展覧会に来た子ども達から盆踊りのリクエストがあり、友達や家族と盆踊りを一緒に楽しむことができた。

ウ　保護者との連携

展覧会に来た保護者から「作品にもっと説明がほしい。」という意見が寄せられた。そこで、作品の簡単な紹介が書けるカードを作成した。作品のアピールポイントを子どもから聞き、保育教諭や本人が記入して作品に添えた。

展覧会に来た保護者には、アンケートの記入に協力してもらった。その一部を抜粋して紹介する（表１）。

表１：参加した保護者からの感想

①	普段どのような遊びをしているのか本人から話は聞いていたが、実際に目で見て、作品や写真など、日常が見えるようであった。とても嬉しそうに一つひとつ説明をしてくれ、親も嬉しくなった。是非、また行きたい。
②	普段保育園に来られない分、一つひとつの作品から、本当に毎日楽しんでいることが伺えて、とても楽しかった。息子も作品を一生懸命説明してくれたり、友達とプラネタリウムを見せてくれたり、友だちとの関わりも楽しそうで安心した。友達が自分の作品だけでなく、友達の作品も紹介してくれ、「自分を見て」から「僕たちの作品を見て」になってきているのだなと、心の成長を感じた。
③	土曜日保育に来ていた友達が、丁寧に色々な作品を紹介してくれた。様々な国旗も上手に描けていた。こんなに楽しく世界のことを学習できるなんて、先生方は本当にすごい。子ども達も色々な事に興味を持ち、その興味を自然と学び、夢中になる。家では中々ここまでしてあげられないのでとてもありがたい。次回もとても楽しみに思う。

３－２　考察

土曜日展覧会を行うことで、従来の「発表会」だけでは伝えきれなかった子どもの成長や、日常保育での「学び」を子ども達全員が「主役」になって保護者へ伝えることができた。

行事がなくなることで、保護者は参観の機会や子どもの様子を知る機会が減ってしまった。しかし、土曜日展覧会を利用して、普段の遊びの様子を保護者に「見える化」することができた。保護者の不安の軽減や、園の活動の理解を得ることで「ヘアアレンジ」や「ダチョウの卵」など保護者からの協力も得られた。園と保護者が連携して子ども達の学びの機会を作ることができたと考える。

また、保護者の声がきっかけでできた「作品カード」を書くことにより、見ただけでは知ることができなかった作品へのこだわりや工夫を、子どもから聞くことができた。このように、保護者からの声を拾い、丁寧に保育に取り入れることは、子どもの深い学びに繋がるのだと気が付いた。

Ⅲ　まとめ

重要と位置づけていた３つの行事（運動会、発表会、夏祭り）がなくなり、練習や競技に時間を取られなくなったことで、日常の連続性を大切にした活動を行えるようになった。よって、子ども達は興味を持った遊びを途切れることなく深められ、「主体的・対話的で深い学び」に一歩近づけたのではないかと考える。令和３年度の保育実践について、一部を表にまとめた（表２）。

しかし、決められた活動が無いと、意思表示や主張が弱い子の興味や関心は見落としてしまいやすく、経験や学びの機会を保証できなくなってしまうこともあるのではないだろうかと感じた。なぜなら、保育活動は、短い時間に多くの活動を詰め込むのではなく、どの子にも等しく同じ活動や時間を与えるのでもなく、その子が主観的に生きられる時間を保証することが大切だと考えるからである。(注５)

また、行事の改革に対して、年度始めには保護者から「年間行事の予定表に１つも園外保育の予定が無いのが残念だ。」「発表会や運動会で子どもを見られなくなって寂しい。」など、不満の声も寄せられた。しかし、クラスだよりや毎月の写真の配信を通して子どもの様子を伝えたり、親子レクや土曜日展覧会などを通して、情報発信を行っていく中で、始めは改革に反対していた保護者も表１のアンケートにもあるように、次第に園の方針に理解してくれる様子が見られた。

今回の保育実践には、筆者の経験年数が３年目であり、初めて５歳児の担任となったという背景があった。園の行事への改革に対して年度始めには、「経験の浅い自分が、過去に前例のない保育実践を行って改革を進めることができるのだろうか」「子どもの興味や関心を見落とさないだろうか」などと不安を感じていた。しかし、園の職員や保護者、給食室等との連携を通して、保育とは「一人で営むもの」ではないことに気がついた。園全体の職員や保護者、地域等と連携し、さまざまな環境が関わり合いながら、「一緒に作り上げていく」ことが重要であると考えた。

また、当園で行事の改革が行われているように、時代が変化し続けていくように保育も変化し続ける必要があるのではないだろうかと考える。以前の当園の保育が「大人が主体的」であったことを否定的に考え、現状に満足

して終わるのではなく、子ども達の最善の利益を考慮しながら、保育の中にある願いが私達の恣意的な物になってしまわないように常に議論し合っていくことが重要であると考える。(注6)

今後も更に保育実践の向上を目指し、「遊び中心」の保育方針をより意識した保育を行っていきたい。

表２：令和３年度の活動の一部

時期	内容	詳細
５月頃	ダンス発表会	ダンスが好きな子ども達と一緒に発表会を計画して、衣装作りを行い、他クラスや職員を招待した。
７月頃	プラネタリウム	七夕をきっかけに天体に興味を持った。手作りプラネタリウムを作って遊ぶことが盛り上がり、プラネタリウムの見学に行った。
７月	あやとり発表会	ダンス発表会に影響を受け、あやとりが流行していた男児達から発表会を開きたいと声が上がった。他クラスを招待して得意な技を披露した。
９月頃	おばけやしきごっこ	子ども同士で遊ぶ姿が見られたので、部屋全体を使っておばけやしきごっこをして遊んだ。グループ毎に小物の制作や準備を行い他クラスを招待して繰り返し楽しんだ。
８月頃	オリンピック	東京オリンピック開催に伴い、「テレビで観戦がしたい。」と声が上がり、保育室にあるテレビで観戦をした。世界各国の出場選手を見て、人種や食べ物、文化の違いに興味を持った。様々な国旗や競技があることを知り、万国旗やメダルを作ったり、競技の再現をして遊んだ。
９月頃	パラリンピック	出場選手を見て障害について関心を持った。絵本「どんなかんじかなあ」(注7)を読むと、更にユニバーサルデザインにも関心が広がった。本物の白杖を使う体験や点字ブロックを見に行ったり、自分達で点字ブロックを作る遊びへと発展した。
12月	アイスクリーム作り	理事長が作った「怪盗Ｘ」の素話が子ども達に大人気であった。怪盗Ｘから「アイスクリーム工場が壊れてしまったので、アイス作りをしてほしい。」とお願いがあり、図書館にレシピを探しに行った。材料が入った缶と塩、氷をミルク缶に入れて転がして凍らせ、完成したものを子ども達と食べた。
２月	跳び箱縄跳び発表会	あやとり発表会と同様である。

参考文献

注１：荒井裕子「日常保育を大切にした行事の実践―発表会の改革を通じて―」第15回保育実践研究，『保育界』2021年

注２：『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』内閣府，平成29年告示

注３：佐伯胖・大豆生田啓友・渡辺英則・三谷大紀・髙嶋景子・汐見稔幸『子どもを「人間としてみる」ということ』ミネルヴァ書房，2013年，72頁

注４：前掲書，75頁

注５：前掲書，138頁

注６：汐見稔幸『さぁ、子どもたちの「未来」を話しませんか』小学館，2017年，142頁

注７：中山千夏・和田誠『どんなかんじかなあ』自由国民社，2005年

講評：日常の連続性を大切にした保育活動 ―行事の改革を通じて―

評者：石川　昭義

この研究は、2020（令２）年の実践研究の続報といえます。発表会、運動会、夏祭りの３つの行事を廃止し、日常保育と行事の連続性を追求した実践の記録です。

文章の展開としては、テーマとしていた「日常保育の連続性」という視点の一貫性について少し疑問が残るところがありましたが、子どもの声を拾い上げたり、子ども同士が教え合ったりする場面が描かれていて、保育の変容ぶりを保育者自身が実感している様子が伝わってきました。文章の中に、「子ども達の予想外の遊び方や使い方をする柔軟性や、発想力の素晴らしさを振り返られるようにしたい」とあるように、以前の、保育者が主導していた行事の中では見られなかった子ども同士の特徴的な様子、とりわけ、子どもが主体となって展開する場面をさらに記述できるといいと思います。土曜日展覧会の実施は、行事をなくしたことの補填的な意味合いがあると思われます。子どもの普段の遊びの様子を保護者に伝えるやり方として、ユニークで有効な実践であると思います。

評者：天野　珠路

「子ども主体の保育」を目指し、大人主導の行事などの見直しを継続的に行ってきた園の実践記録であり、その試行錯誤が伝わります。日常性と連続性をキーワードに取り組んでいく中で、保育者と栄養士との連携が図られ、保護者の協力が得られたこと、また、地域の博物館に出向いたことからの展開や、ごっこ遊びの充実に繋がったことはよかったと思います。これからも無理のない範囲で保護者が活躍する場面を設けたらよいのではないでしょうか。子どもたちに多様な大人の姿を見せたり、様々な職業を伝えることは、子どもが育つうえで大切だと思います。

「子ども主体」は当たり前であるとともに、保育者の恣意的な願いや意図的な活動の提起が、子どもに与える影響は大きいことでしょう。常に、子ども一人ひとりの心持ちや自発的な言動を見つめ、ささいな一言を聞き洩らさず、「あそび中心」の保育を進めていただきたいと願っています。

評者：日吉　輝幸

“子どもの主体性”という言葉は、近年保幼小を問わず重要視されている言葉であり、それを具現化した保育実践が求められています。また、保育者主導の行事等を見直し、子どもが主体的に関われるようにしているという話もよく聞かれるようになってきました。

布佐宝保育園では、「子どもの主体性」と「日常との連続性」を念頭に置き、2020年度からは主要行事を廃止して、その要素を日常保育に分散して行う形に変更しました。

本研究レポートで気になった点が幾つかあります。まず、従来の「発表会」だけで伝えられきれなかった“子どもの成長”とは何なのか。また、それが発表会を廃止して行った「土曜日展覧会」では、成長の様子を十分に伝えられたという記述が明確ではなかったため、問題解決に至ったのかどうかが不明でした。次に「運動会」や「夏まつり」の代わりとしての、「親子レクや運動遊び」「新おまつりごっこ」では、日常の連続性と子どもの主体性が尊重できないという、問題点が解決できたのかどうかが不明瞭でした。更にポイントを絞って考察やまとめができれば良いと思います。今後の継続研究を期待しています。

〈自由研究部門〉

新砂運動遊び改革プラン
～運動遊びの標準化を目指して～

東京都・新砂保育園　**白須　咲良**

はじめに

新型コロナウイルス感染症に翻弄される昨今、この2年半は保育園に於いても様々な活動が制限され、本園も臨時休園、登園自粛や家庭保育の協力依頼等をせざるを得なかった。また、パンデミックは、遊んだり運動をしたり友だちと関わったりする、子どもたちにとって欠くことのできない活動の制限をもたらし、本来子どもたちが保育園で経験するべき活動の範囲や身に付けたい力を培っていく保育の内容に、今までにない配慮が必要になった。

法人理念　私たちは　地域に開かれた　地域に愛される　地域に信頼される　こうほうえんを　目指します

保育理念　一人ひとりの発達と個性を大切にし　生きる根っこを育みます

保育方針　子どもの視点に立った保育を推進し、いつでも安心して利用できる園づくりに努めます

保育目標
1．心身ともに健康でよく遊ぶ子ども
2．自分も友だちも大切にできる子ども
3．自分で考え意欲的に行動できる子ども

本園では、法人理念・保育理念・保育方針・保育目標から、保育所保育指針と法人の『こうほうえん保育・教育ベーシックガイド』（年齢別保育目標や大切にしている保育・教育活動などが記されたもの）を基に「全体的な計画⇒年間カリキュラム⇒月案⇒週日案の順に保育計画を立案し、計画に基づいて保育を実践して振り返る」を繰り返して行い、連続した切れ目のない保育を目指している。

保育所保育指針の身体的発達に関する視点「健やかに伸び伸びと育つ」のねらい②「伸び伸びと体を動かし、はう、立つ、歩くなどの運動をしようとする」にもあるように、本園も日々積極的に身体を動かして遊ぶことを意識して活動している。

４、５歳児クラスの子どもたちは週に１度、30分間ずつ体操教室の時間があり「ルールの中で運動を楽しむ／難しいことも積極的にチャレンジし、習得を目指す」ことを目標として、マット運動・鉄棒・巧技台あそび・ボール遊び・ルールのある遊びなどを専門の講師から学んでいる。しかし、それ以外の運動遊びでは、クラス担任がそれぞれの知識や手だてで子どもたちを導いていることが分かり、「運動遊びの基礎となるものを標準化してみてはどうか？」という意見が上がった。

目的

保育士の共通認識で一貫性を持って運動遊びを援助することにより、より適切な運動遊びを実践していく。子どもたちの発達段階を踏まえ一人ひとりに合わせた手だてで導くことで、体を動かして遊ぶことへの意欲や運動能力が向上し、今以上に運動遊びが好きな子どもに育てる。などを目的として、誰が行っても同じように運動遊びを援助できるように『運動遊びの標準化』を目指すことにした。

取り組み①

運動遊びの援助や手だてについて、保育士それぞれの認識の違いを幼児会議で討議した。

例…「毎年５歳児が参加している地域対抗ドッジボール大会への取り組みについて。まずはどのように、子どもたちにドッジボールの援助をしたか？」
Ａ保育士「ドッジボールのルール説明から行った」
Ｂ保育士「転がしドッジボールから行った」
Ｃ保育士「ボールに慣れるようパスをするところから行った」

取り組み①　幼児会議の様子

経過…ドッジボールの活動ひとつをとってみても、それ

ぞれに異なった援助や手だてが挙がったことで、運動遊びに対する職員の認識の違いが明らかになった。

取り組み②

取り組み①の経過から、ミズノ：スポーツサービス『幼少期に身に付けたい36の基本動作』を参考に、子どもたちに経験させたい運動遊びの基本動作を“しんすなほいくえん　うごきをはぐくむ30のどうさ”として職員の写真付きで表にまとめて可視化した。

“しんすなほいくえん　うごきをはぐくむ30のどうさ”は、子どもが発達の過程で獲得可能な動きに含まれる、「体のバランスをとる動き」「体を移動する動き」「用具を操作する動き」を細分化した複数の動きを表にまとめたものとなっている。そして、保育者だけでなく保護者や園児の目に留まりやすい園内の廊下に掲示し、保護者も巻き込んで運動遊びに興味をもってもらえるようにした。

例：【歩く】歩く・踏む・止まる

【積む】積む・積み上げる・崩す

取り組み②うごきをはぐくむ30のどうさの表

取り組み③

次に、運動遊びの手だてについて【とびばこ】【なわとび】【ドッジボール】の３項目に絞り、３歳児を安全に尚且つ丁寧に援助するには、何から取り掛かれば良いか討議した。ここでは意見が出しやすいように、経験年数の近い保育士同士のグループで話し合うことにした。若手職員は養成校で学んだことを思い出し、中には学校で使っていたという体育の参考書を持ってきたりして、熱心に討議していた。ベテランの職員は、これまでの経験値を活かしながら失敗談も含めて話が進むと、「果たしてこれが正しいのか？」という意見も出たりした。

経過…経験年数の近い職員とグループ討議を行うことで活発に意見が飛び交った。どのグループも取り掛かかりの手だてにさほどの違いはなかったが、「段階を踏んだ明確な手だてがあると良いのでは？」という意見が多数挙がったことから、３・４・５歳児に向けた項目ごとの確認票のようなものを作成することにした。

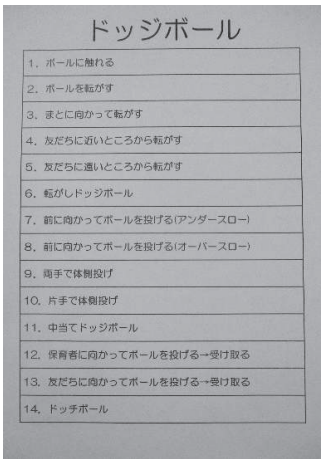
○リーダー保育士４名　●４～８年目保育士６名　◎１～３年目保育士６名

【とびばこ】
○カエル跳びをする　●とびばこによじ登る　◎とびばこに手をつく

【なわとび】
○置いてある縄を跳ぶ　●長縄をまたぐ・縄に慣れる　◎置いてある縄を両足で跳ぶ

【ドッジボール】
○ボールに触れる　●ボールに触れ、慣れる　◎的にボールを転がす

取り組み③　とびばこ・なわとび・ドッジボールについての討議の様子



ドッジボール

1．ボールに触れる
2．ボールを転がす
3．まとに向かって転がす
4．友だちに近いところから転がす
5．友だちに遠いところから転がす
6．転がしドッジボール
7．前に向かってボールを投げる(アンダースロー)
8．前に向かってボールを投げる(オーバースロー)
9．両手で体側投げ
10．片手で体側投げ
11．中当てドッジボール
12．保育者に向かってボールを投げる→受け取る
13．友だちに向かってボールを投げる→受け取る
14．ドッチボール

取り組み④　チャレンジカード

取り組み④　“チャレンジカード”の作成

取り組み③から話し合いを重ね、３、４、５歳児の発達に沿い【とびばこ】【なわとび】【ドッジボール】の３項目について、目標を達成させるための細かい手だてを“チャレンジカード”として作成した。

例えば、【ドッジボール】に取り組む際には、１.「ボールに触れる」から始め、２.「ボールを転がす」、次に、３.「まとに向かって転がす」というように、手だてを14段階に分けて援助できるようにした。

経過…“チャレンジカード”からは「援助に一貫性が持てるようになった」「一人ひとりの援助に合わせ易い」などの意見が挙がった。“チャレンジカード”はあくまでも保育士が参考にする運動遊びの指標であったが、年長児については、「自分はどこまでできているのか」「どこでつまづいているのか」などが分かり、子ども自身が目標をもって運動遊びに挑戦している様子も伺えた。

取り組み⑤

以上の①～④の取り組みを経て保育士から挙がった意見をまとめ、効果を確認した。

“しんすなほいくえん　うごきをはぐくむ30のどうさ”について

・子どもの現在の発達段階や経験させたい動作が確認できた。
・可視化することで普段は思い浮かばないような細かい動作に気づくことができた。
・保護者に運動遊びについて知ってもらうことができ、話題にすることでコミュニケーションの一環となった。
・園全体で行っている取り組みを園児や保護者に周知できた。
・写真が掲載されていることで伝わりやすかった。
・無意識に保育の中で行っていた活動も基本動作に繋がっていたと気づけた。
・これからの活動に取り入れやすい。
・職員ではなく、子どもの写真にした方がより興味を引いて良かったのではないか。
・静止画なので動きを伝えることが難しかった。

チャレンジカードの作成について

・運動遊びの手だてにも様々な取り組み方があると知ることができた。
・子どもの現在の発達段階や援助のポイントが確認できた。
・定期的な評価・反省・改善等が必要だと感じる。
・子どもたちにわかりやすく、端的にまとめることが意外と難しいと思った。
・経験年数の近い職員とグループ討議を行ったことで話しやすく意見が言いやすかった。
・チャレンジカードがあることで担任が変わっても継続性が保てる。
・次年度に向けて、活動の内容を意識できる。
・子どもに目標を持たせていることにより、子どもたちも積極的に参加するようになった。

まとめ

職員会議やグループ討議を経て、保育者が個々の解釈で運動遊びの援助をしていることが分かり、改めて本園の運動遊びの援助について見直すことができた。幼児の運動遊びの援助については、年齢や発達に応じて適切に行うことが重要である。また、子ども一人ひとりの発達を十分理解した上で共通認識を持ち、安全に実施していくことだと思う。今回『幼少期に身につけたい36の基本動作』を参考に、“しんすなほいくえん　うごきをはぐくむ30のどうさ”として表にまとめて掲示したり、発達段階を踏まえ、細かな手だてで目標達成を目指した“チャレンジカード”を作成したことは、保育士から挙がった意見からみても、園全体で同じ認識で運動遊びの援助

をしていくことができると分かった。

現代の幼児期における子どもたちの身体活動・運動については「活発にからだを動かす遊びが減っている」「からだの操作が未熟な幼児が増えている」「自発的な運動の機会が減っている」「体を動かす機会が少なくなっている」等の４つの問題点が挙げられている。

その上、コロナウイルス感染症の影響により活動が制限される状況が続き、基礎体力のさらなる低下が懸念されている。だからこそ作成した“チャレンジカード”を基に、保育活動の中に位置付け、積極的な運動能力の向上のために活用したい。

今後は体操講師とも連携し、より専門的なアドバイスを受けながら活動すれば、更に子どもたちのできることが増えて、益々運動遊びの意欲が高まるのではないかと思う。また、０、１、２歳児クラスに於いては、幼児クラスへの進級を視野に入れながら、日々の保育の中で体幹を育むような遊びを提供し、“しんすなほいくえんうごきをはぐくむ30のどうさ”を獲得できるように準備したい。それらは事故や怪我を回避することへの効果にも繋がるだろう。未来を担う子どもたちのために、そしてそれを援助する私たちの保育の質の向上のために、これからも「新砂運動遊び改革プラン」を進化させながら、連続した切れ目のない保育を実践していこうと思う。

（参考文献）

1　ミズノ：スポーツサービス　幼少期に身につけたい36の基本動作

2　文部科学省：「幼児期運動指針策定委員会」（2012）幼児期運動指針ガイドブック

3　保育所保育指針

講評：新砂運動遊び改革プラン ～運動遊びの標準化を目指して～

評者：石川　昭義

この研究は、運動遊びの指導上の標準化（＝誰が行っても同じように運動遊びを援助できる）に向けた試みをまとめたものです。保育士で話し合いを重ね、運動遊びに対する認識の違いを明らかにしつつ、取り組んだ様子がうまく描かれています。特に、若手やベテランなど、経験年数の近い保育士同士のグループを作り、意見を出しやすい雰囲気で討議は行われました。それらは、写真付きの基本動作のマニュアル、とびばこ・なわとび・ドッジボールの「確認票」、チャレンジカードの作成につながりました。その過程で、保護者の理解をえられるように取り組んだことも良かったと思います。チャレンジカードについては、子どもが楽しんでやっているかどうかの確認、子どもによってカードの進み方に大きな差が出てしまった場合（特になかなか進まない子ども）の対応など、具体的な指導上の留意点が記載されているとよりわかりやすくなったと思います。今後は、チャレンジカードが子どもの主体性を伸ばすように生かされるような実践を期待したいと思います。

評者：馬場　耕一郎

運動遊びに着目し、園の環境に合わせ「しんすなほいくえんうごきをはぐくむ30のどうさ」を作り上げた研究です。

色々な指標がある中で、自園の環境や子どもたちの姿に考慮して策定されたことは、大変素晴らしい取り組みであると思います。また、動作を可視化することにより、共通理解が深まり、よりねらいに即した動作が展開できると感じました。そして、保護者にも動作を理解してもらうことにより、家庭との連携が深まり、日々の生活の中に展開されることに繋がったのではないでしょうか。コロナ禍の影響もあり、活発に身体を動かす機会が減少し、自発的な運動の機会が失われた状況において、とても大切な取り組みであると思いました。今後の研究の継続に期待します。

評者：日吉　輝幸

文部科学省が、現代の子どもの運動量の低下が心身の成長・発達について様々な問題要因になっているとして、平成24年に「幼児期運動指針」を出してから既に10年が経過しました。

新砂保育園の研究レポートには、令和２年からのコロナ禍において、子どもの活動量や内容が狭められたり、制限されたりしてきたことを憂い、改めて“運動遊び”について見直したことが記述されています。新砂保育園では、予てから保育所保育指針に基づいて、「日々積極的に身体を動かして遊ぶこと」を意識して活動してきましたが、誰が行っても同じように援助できるように『運動遊びの標準化』に向けて、園全体で取り組んできたことがレポートから読み取れます。これまで繰り返し行ってきたであろう、既成の基本動作を基にした園独自のプログラムを、職員間で共通認識をしながらまとめ、更には“可視化”しているところが保育者のみならず、子どもや保護者にとっても分かりやすくて良いと思います。なお、発達の連続性を考えた時には、３歳未満児も対象とした、よりベーシックなプランがあると更に良いと思いました。今後の取り組みと実践研究の続報を期待します。

〈自由研究部門〉

保育テーマ設定による保育内容充実及び保護者への保育内容説明の効果

東京都・花房山目黒駅前保育園３３３　**岩本　恵子**

Ⅰ　はじめに

保育所における責務として、

・各保育所の実情に応じて創意工夫を図り、保育の質の向上に努めること
・保護者や地域社会に保育の内容を適切に説明するように努めなければならないこと
・幼児教育を行う施設として、「知識及び技能の基礎」「思考力判断力、表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」の資質・能力を一体的に育むよう努めるものとすること

などが求められている。（保育所保育指針2017）

当園では、年度ごとに保育のテーマを設定し、協同性、道徳性・規範意識の芽生え、社会生活との関わり、思考力の芽生え、自然との関わり、言葉による伝え合い、豊かな感性を表現など、子どもたちが幼児期の終わりに育ってほしい10の姿を育む活動として計画、活動している。

５年目を迎えた今回、この保育テーマを設定することで、保育が充実し、質の向上に繋がっているのではないだろうか、また、保護者に保育内容を周知する上で理解を深める取り組みになっているのではないだろうかに着目したい。

＊保育園の概要
設立　2018年４月１日（社会福祉法人東京児童協会）
定員　120名（０歳12名　１歳18名　２歳18名　３歳24名　４歳24名　５歳24名）
住所　東京都品川区上大崎３丁目
（JR・地下鉄目黒駅より徒歩１分）

＊開設以来設定した保育テーマ
⑴2018年度「太陽」
⑵2019年度「世界」
⑶2020年度「わ」
⑷2021年度「カラー」
⑸2022年度「LOVE＆PEACE」

Ⅱ　目的

年度ごとの保育のテーマ設定によって、

・「保育の充実とともに、子どもたちの資質・能力を一体的に育む機会になっているのではないか？」
・「保護者に保育内容の適切な説明、理解を得る取り組みになっているのではないか？」

を検証する。

Ⅲ　方法

１　「園児情報システムKINDYクラス投稿（職員記載）」、「えんだより（園長記載）」の保護者への発信情報、「法人内保育実践発表（職員記載）」などの記録の読み取り
２　保護者アンケート（2022年７月実施　回答　85家庭中30件）
３　職員アンケート（2022年７～９月実施　回答　26人中20～22件）

上記１の記録、２、３のアンケート結果の分析、考察を行う。

Ⅳ　結果

１　「園児情報システムKINDYクラス投稿」、「えんだより」の保護者への発信情報、「法人内保育実践発表（職員記載）」などの記録の読み取り

⑴ 1年目（2018年度）テーマ「太陽」

設定理由：初年度、園のコンセプト「太陽がさんさんと輝く園」から取り入れた
ね ら い：個から集団としての協同の芽生え、豊かな感性を培う

① 「園児情報システムKINDYクラス投稿（職員作成）」より抜粋

・2018年５月９日（月）４、５歳児

「おひさまとかくれんぼ」の絵本を通したアート活動を楽しんでいる。…（略）「雨の日でも園内でおひさまを感じられるように」と思いを込めて共同制作としておひさま作りを行っています。（略）フィンガーペイントでは、自分たちで考えながら絵の具やスタンプ台の感触を楽しみながらダイナミックに表現し、アート活動を楽しんでいました。今後もテーマである「太陽」を用いて、絵本を通して感じた世界観を制作や遊び、クッキングなどにつなげて子どもたちの想像力・創造力を

育んでいきたいと思います。」

・2019年２月15日（金）４、５歳児

「…(略)劇が終わると保育者に「今日は、何点だった？」と聞き、自分たちのできに自信を持った表情を見せ、「200点だった」と話すと「明日は500点にしよう」「どきどきするかも」「どきどきしないでがんばろうよ」と友だち同士で会話していました。テーマ「太陽」のようにさんさんと輝き、豊かな感性が育まれ、みんなの会話や表情から明日の期待や楽しみが満ち溢れてくる一日になりました。」

② えんだよりより抜粋

・2019年２月号

「…（略）今年初めての満月、スーパームーンについて子どもたちに聞くと「30倍大きかった」「白かった」など感想を聞くことができました。月と金星が近づいてきれいに見える日もあるため、キラキラ光る夜空を見てさらに楽しめることを伝えています。今年度のテーマ「太陽」、自ら自然事象にも、図鑑を用いたり、実際に見たりと興味関心を持って楽める保育をしたいと思います。」

(2) ２年目（2019年度）テーマ「世界」

設定理由：国際性あふれる地域であり、園児も英語好きであることから取り入れた

ね ら い：世界について興味や関心を深める、誰にでも優しく思いやりを持ち、寄り添う気持ちを大切にする人間力を育てる

① 職員の法人内保育実践発表記録～テーマ「世界」に向けて～より

ア 環境設定

保育室の室内に世界のコーナーを作り、絵本（世界で読まれている絵本の日本語版・英語の絵本）・パズル・地球儀・国旗かるた・ぬりえの設置、他国籍園児へ日本の昔話や歴史を伝える。

イ 実践

ⅰ きらきら星からの子どもたちの展開

きらきら星の伝統遊戯(法人で受け継がれている遊戯)を楽しんでいた際、４歳女児が、英語で聞き覚えがあることに気づき、皆で英語で歌うことにチャレンジ。 中国籍の園児が在籍していることから中国語のきらきら星も歌う。歌は言葉は違えど同じ思い（意味）であること、同じ踊りを楽しむことができることを知る。

ⅱ フレンチシェフとの触れ合いクッキング

フランス料理シェフ（保護者）とクッキー作りを行ったことで、フランスへの興味が強くなり、フランス語のきらきら星も歌おうとする。国旗、食べ物など興味関心が深まった。

ⅲ 異文化交流の先生との関わり

法人プロジェクト異文化交流は、諸国出身の講師から英語や国の文化を知る機会であり、マレーシアの講師には母国の祭りや伝統料理、他の講師からは各国のじゃんけんや歌やゲームの指導を受け楽しんでいる。

ⅳ 夏まつりの留学生と繋がったきらきら星の関わり

留学生を招待し、英語と中国語のきらきら星を披露、お礼にインドネシア学生は民族衣装を身に付け母国の歌、コスタリカの学生はスペイン語できらきら星を歌ってくれた。子ども達は、普段かかわることのない国々の学生の民族衣装にも興味を示し、楽しく触れ合いスペイン語きらきら星にチャレンジした。

ⅴ 大きくなった会に向けて

何を発表したいか尋ねると、自らピアニカを持ってきて友だちと一緒に楽器を使い、スペイン語で楽しむ姿が見られた。５歳児が弾くきらきら星に合わせて4歳児は、「どどそそららそ」と階名で、３歳児は声を出し歌ったりと、異年齢間の繋がりが展開された。子どもたち自身が一つひとつに自信を持ち、認められたい欲求も生じ、更なる探究心へと繋がり、子どもたちが主体となり作り上げていく兆しが見られた。

(3) ３年目（2020年度）テーマ「わ」

設定理由：コロナ禍、日本を知ることも大事、協同の「輪」もさらに深めたい

ね ら い：改めて「和」に親しむ、「思いやり」の心を知り、協同の輪も体験、皆で取り組むことの大切さを知る

① 職員の法人内保育実践発表より 保育テーマ「わ」から～家庭と園 思いを一つに～

ア 新しい生活様式での課題

新型コロナウイルス感染症対策としてエントランスにて登降園対応となり、保育者とのコミュニケーションの時間の減少で、保護者の不安、求めることをアンケート実施、保育内容、様子、育ちの“見える化”に対する要望が多数上がった。

イ　エントランスでの工夫

ⅰ　エントランスにモニターを設置、写真や動画放映。１週間の子どもたちの様子、季節の制作のポートフォリオを掲示

ⅱ　オンライン親子交流会にて日常や運動週間（運動会ごっこ）の様子を動画で視聴

ⅲ　個人面談随時実施の周知

ウ　見える化から安心感へ

12月に改めてアンケートを実施し、活動内容の理解、子どもの表情からの育ち、動画での友だちとの関わり、表現などの理解度が高まり、安心や感謝の声が聞こえた。保育テーマ「わ」の保護者との輪も深まる結果となった。

②　えんだよりより抜粋

・2103月号～オンライン懇談会・大きくなった会用ダンス・劇あそび～

「…（略）子どもたちと保護者の皆様と一つの「輪」になり、笑顔でつながった時間となりましたね。今年度の保育のテーマ「わ」。年間を通して「和」、「輪」、「羽」などたくさんの「わ」にチャレンジしました。…（略）

4歳児クラスは、日本昔話「和」の題材「ももたろう」。踊りを自分たちで考えて、皆で一緒に劇遊びをすすめることができました。息がそろわない日もあり、どうしたらよいかを自分なりに考えるきっかけにもなりましたが、一人ひとりが役に取り組む姿勢が見られました。5歳児クラスは、三浦太郎さんの絵本から、つき組オリジナルの「おうさまとこどもたち」。王様でなく、自分たちがやりたいことに取り組み、それぞれが社会を形成させ生きていこうとする「輪」づくりとなりました。背景のお城も子どたちが製作しました。特に幼児の子どもたちは自発的に考え、振りやセリフづくりに取り組む活動からのスタートで、手作り感あふれる表現あそびとなりました。…（略）」

(4)　４年目（2021年度）テーマ「カラー」

設定理由：色を楽しむ経験を重ねたい

ね ら い：様々な色を楽しむ、人も色と同じ、それぞれ違ってよい､その色を大切にしよう､その人・思い、個性を尊重しようと認識する

①「園児情報システムKINDYクラス投稿」より抜粋

・2021年８月４日（水）５歳児

「今日は幼児室にスクリーンを出し、（略）また、映画館ごっこの前には一人ひとりのカラー（個性）について話をし、カラーシートを作りました。同じ人間、同じつき組であるけど、皆一人ひとり違うということを認識できるように、また、その違いを互いに認め合えるようにという願いを込めて作成したため、今後皆の前で発表する機会やエントランスに掲示するなどしていきたいと思います。」

・2021年８月６日（金）５歳児

「今日は色水遊びをしました。今日のミッションは、２人組になって綺麗な色を完成させること。ペアの友だちと「一緒にエメラルドグリーンを作って綺麗な色を作ろう！」と話し合いをして作るグループ、それぞれ好きな色を混ぜ合わせ、２人の色が混ざったらどんな色になるか実験をするグループなど、それぞれ思い思いに色を混ぜ合わせていました。「抹茶色作りたいな」「ココアみたいになったよ！」と色を重ねるたびに変化して行く様子を不思議そうに見つめていました。（略）…」

②　えんだよりより抜粋

・2104号　今年の保育のテーマ：『カラー』～いろとりどりを楽しもう～

「・一人ひとりの様々な豊かな個性を大事にする（人種、地域などへの差別なく、これからの未来を生きていくためそれぞれの違いを認め、一人ひとり違ってよいこと→自分を大切に、家族・友だちを大切に、自分を愛し他者をも愛していく）

・「いろいろ」なあそびを楽しむ

・真っ白から始まる四季を通しての色の移り変わりを実体験。色の展開を楽しみながら、自己肯定感、豊かな感性、創造性・表現力を育んでいきます。」

・2203号　～今年のテーマ　「カラー」から…～

「大きくなった会ではカラーをテーマに発表しました。この経験により、一人一人の個性を尊重し、違いがあってよいこと、認め合うこと、いろいろなカラーを整理すること、混ざりあって新たなカラーを楽しむことを学びました。題材をご紹介いたします。（略）

＊『カラーモンスター　きもちはなにいろ？』

作：アナ・レナス　永岡書店

うれしい気持ち、怒りの気持ち…いろいろな気持ちをカラーで示し、感情を把握、気持ちの整理や表現する絵本です

＊『まざっちゃおう！』

作：アリー・チャン　フレーベル館
いろたちがおしえてくれる新しい色の世界、いろとりどりはさいこう！
と、色がたくさんあると楽しいという絵本です。」

(5) ５年目（2022年度）テーマ「LOVE＆PEACE」

設定理由：ウクライナなどでの戦争から、思いやり、平和とは何だろうと考えたい

ね ら い：温かい言葉、冷たい言葉、思いやり、優しさを考える。戦争と平和について思いやり、平和への感謝、未来へ向けて取り組むことを知る

① 「園児情報システムKINDYクラス投稿」より抜粋

・2022年８月９日（火）５歳児

「…（略）空襲の際の日本を映したアニメでは真剣な表情でじっと映像を見つめ「なんだか悲しくなってきた」と口にする子もいました。またウクライナから国外避難してい る家族の映像では「お父さんと離れ離れなんて可哀想」「早くロシアと仲直りできればいいのにね」「優しい気持ちを持たないといけないよね」など、それぞれ感じた気持ちを話していました。子どもたちにみんなが思う平和って何だと思う？と聞くと「優しくすること」「好きなものを食べられること」「遊べること」など意見がたくさん出ました。身近に感じられる“平和”として、喧嘩をしても暴力を使わず言葉で解決することを伝えています。子どもたちの中でも感じた気持ちが沢山あったようなので、ご家庭でも聞いてみてください。」

・同日４歳児

「(略) 真剣な表情で「家族が離れちゃうの？」「悲しい」等と様々なことを感じていました。(略) 今戦争している国もあり、私たちは平和に過ごせている事から「平和ってどんなことだろう？」と考え「みんなと一緒に遊べている事も幸せ」「家族が一緒にいること」等と幸せな気持ちで溢れました。友だちと喧嘩ばかりではなく、ポカポカ言葉を使うと、自分も相手も平和に幸せに過ごせるよねと、いうことも話すと、自由遊びの時間に "みんなが幸せになりますように" と文字を書いて願っている子も見受けられました。今日の内容を踏まえ、様々なことが考えられる子どもたちになって欲しいと願っています。(略)」

② えんだよりより抜粋

・2208号　～テーマ 「LOVE＆PEACE」より～

「沖縄の言葉 「ちむぐりさ」 をご存じでしょうか？「あなたが悲しいと私も悲しい」というニュアンスの言葉だそうです。相手のことも考える、ともに思うこと、大切ですね。優しい心、思いやる心、そして世界の皆が楽しく幸せに過ごせるようにという願いが「LOVE＆PEACE」に込められています。そのためにどうしたらよいか、どうすべきかを考え行動できる人になってほしいと、伝えています。(略)」

・2209号

「８月は今年のテーマ「LOVE＆PEACE」にかかわる月となりました。

原爆の日、終戦の日、それぞれの日に、どういう日であるかを伝え、黙とうをしました。

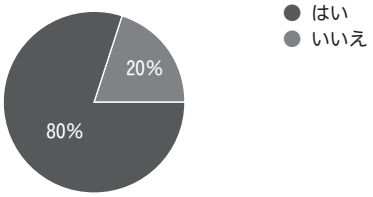
４、５歳児には、どう感じたか、聞いています。「たくさんの人が死んで悲しかった」「怖かった」「悲しい人もいた」「火の中に巻き込まれて、みんなが生きられない」「お父さんが戦争に行って家族がいっしょにいられない」などの感想でした。みんなにとっての平和とは？と聞くと、「一緒に家族で過ごせること」「お友達と遊べること」「幸せにくらすこと」「おうちがあること」など声が上がりました。どうしたら平和なんだろう？と の質問には、「戦争をやめる」「あやまる」「仲直りしてともだちになること」…

子どもたちにとっての戦争、平和、思いやりの思いを聞くことができました。世界の人々が平和に暮らせるよう、みんなで考えていくことを継続していきたいと思います。」

2　保護者アンケート（GOOGLE FORMにて「保育テーマについて」）（2022年7月実施　回答85家庭中30件）

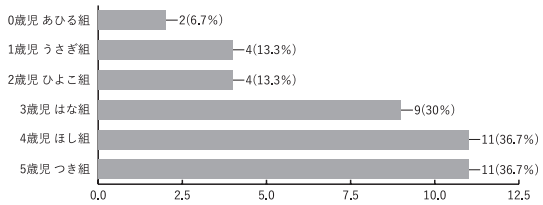
（1）保育テーマを設定していることはご存じですか？

30件の回答



お子さまのクラス

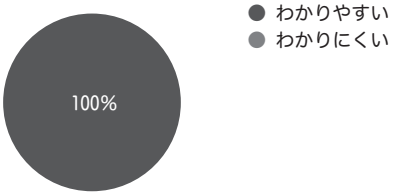
30件の回答



（2）（1）で“はい”と答えた方へお願いします

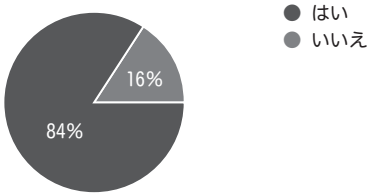
①テーマ設定はわかりやすいですか？

24件の回答



②テーマ設定が子どもたちの育ちに活かせていると感じますか？

25件の回答



（3）（2）の②について、どのようなときに思いましたか？（抜粋）

・昨年は大きくなった会の劇のテーマになっていたり、今年はウクライナの戦争のお話をしていただいたと思います。
・こういったアンケートを通し保護者に園のテーマを伝えようと努力頂いているとき。
・ちくちく言葉、ふわふわやぽかぽか言葉について学んだとき。
・保育園で覚えてきたことを話してくれた時や実践しているのを見たとき。
・世界がテーマの時はいろいろな国旗を覚え、後のオリンピック観戦においても興味が継続しており、学びの効果を実感しました。カラーの時は虹について知ろうとしたり、大きくなった会を通じて、自分の好きなもの（動物、色など）を自分が決めたということを話してくれるので、一人ひとりが自分で選択して良いということを学んだと思います。今年はラブ&ピースということで、ニュースで見聞きする戦争について家で教えることだけでなく、保育園でも理解を深められるのは大変ありがたいですし、他者を思いやる気持ちを今後も育んでいけると嬉しいです。
・イベントの際にテーマに沿った内容を元に創造することができるとき。去年は大きくなった会の虹色など。
・日常生活の中で、園で扱ったテーマの事など、話してくれたり教えてくれたりしています。SDGsだよ、といいながらペットボトルを洗って家の分別ゴミを整えており、親が教えきれていない事を学んでいるなと感じます。
・テーマとして設定され、繰り返し伝えて頂いていることで会話の中に「みんな違っていいんだよ」「ラブアンドピースだね」というフレーズが自然に出てきます。今まで意識しなかったことを意識したり、自分なりに考えていることがあるように感じます。
・子供がテーマをよく口にしており、友だちを思いやることを意識しているよう感じられるため
・兄弟と喧嘩したときなどラブアンドピースの大事さについて教えてくれました。

（4）テーマ設定について、ご感想、ご意見等ございましたらご記入ください。（抜粋）

・新型コロナウイルスやウクライナ情勢を含めた社会情勢などに敏感に反応し、テーマに取り入れていただいており素晴らしいと思います。 そういった園の姿勢が児童の成長に良い影響を与えて頂いているのだと感じています。今後とも、宜しくお願い致します。
・難しいテーマですが生きていくうえで必要なことなので小さい頃から学べるのはとても良いと思います。
・世の中の動きに沿って選定されているようで、幼児でも世の中を感じて考える機会になっていると思います。色々毎年、工夫して頂き感謝致します。保育者皆の熱意もそれを通じて感じます。日々、ありがとうございます。
・毎回その時々の情勢や子供に伝えたいメッセージが入っており、子供自身もとても興味を持っているのでとても良い取り組みだなと感じています。いつも様々な工夫をしていただきありがとうございます。引き続きよろしくお願いいたします。
・テーマ設定の際にその年からどういった経緯でこのテ

ーマに至ったかをより詳しく説明していただけると納得できるしより理解も深まると思います。
・小さな子供にも分かるような大切なお話をしてくださりありがとうございます。子供達も家庭において保育園で伺った話をしてくれ、幼いながらも他者への思いやりや世界へと心を馳せているのだと感じます。
・色々工夫して頂き、感謝しております。 落ち着いて考えること、何かきっかけが無いと親子で話すことも無いことですが、重要なテーマを選んでくださっていて、またそれをお友達と集団の中で考えたりすることはとても貴重な機会を頂いていると感じております。

3　職員アンケート（2022年7～9月実施　書面及びGOOGLE FORM　回答26人中20～22件）

(1) 保育テーマを設定していることはご存じですか？

はい　21　　いいえ　1

(2) (1)ではいと答えた方へお願いします
①テーマ設定はわかりやすいですか？

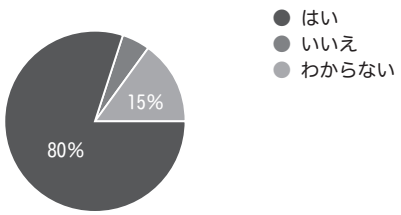
わかりやすい　20　　わかりにくい　1

②子どもたちの育ちに活かせていると感じますか？

はい　18　　いいえ　1　　どちらとも　2

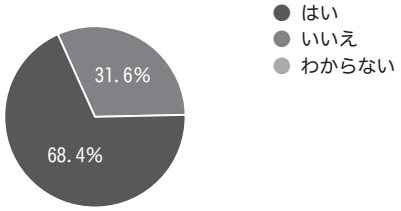
(3)「保護者に保育内容の適切な説明、理解しやすい取り組みになっているのではないか？」

20件の回答



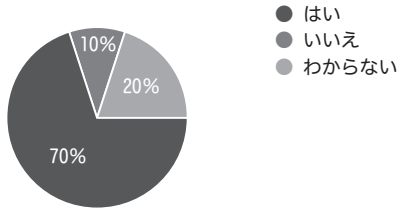
(4)「子どもたちの育みたい資質・能力の育みを一体的に育む機会になっているのではないか？」

19件の回答



(5)「総合して職員の専門性の向上、保育の質の向上につながっているのではないか？」

20件の回答



(6) (2)の②について、どのような時に思いましたか？
・テーマに沿った政策や絵本を通して子どもに浸透し易い、行事等でイメージしやすい。
・テーマ設定により保育内容が充実し、育ちに活かすことができたと感じる。
・絵本や集まりでテーマの話から発展しているとき。
・自由遊びで家族へのプレゼントを作成。
・友だちと協力したり思い合う気持ちが芽生えていると感じたとき。
・ワンフロアで異年齢間での関わりを持ち思いやりを持つというテーマを意識しやすいと感じたとき。
・カラーの際、色の組み合わせで話が盛り上がり色を用いた主活動の遊びが展開されたとき。
・世界の時は国旗に興味、自ら調べ学びにつながった
・日々の中で園児の様子に変化が見られたとき。
・子どもたちと一緒にテーマについて考えたり、行事を通しての取り組みで大きな学びにつながった。

(7) テーマ設定について、ご感想、ご意見ございましたらご記入ください。
・明るく優しいテーマに向かって子どもたちが一つになる姿をとても心あらわれる思い。
・入職前見学で、カラーに沿った保育室のかわいらしさ、元気さにひかれた。テーマに沿った活動は素敵であり、そのすてきな関わりをしたい。
・テーマにより行事もねらいを明確にでき、やりやすい
・職員みなでテーマについて考え、一つの目標にむかうことで同じ気持ちに動けると思う。社会問題や大事にしたいことを子どもたちだけでなく大人もよく考えることができると実感している。
・食育、行事食のおやつなど、テーマに沿ったものを提供できるようにしていきたい。

Ⅴ　考察

1　「園児情報システムKINDYクラス投稿」、「えんだより」の保護者への発信情報、「法人内保育実践発表（職員記載）」などの記録より考察

(1) 2018年度「太陽」

「太陽」というテーマで、太陽や月など自然現象への興味関心が深まり、制作や劇遊びでは試してみようとする姿勢や態度が見られ、協同性、創造性、豊かな感性が育まれ、異年齢保育を構築する１年となっている。

(2) 2019年度「世界」

異文化交流、日常の遊びから世界への関心が深まり、パズル、国旗づくりなど自発的な活動としての遊びの展開が見られている。歌を通して豊かな発想を活かし、やってみようとチャレンジし、やりぬこうとする粘り強さから頑張る力へと自立心の芽生えが培われた。

(3) 2020年度「わ」

コロナ禍、日本に視点を置き、子どもたちは日本の「和」、「輪」、「羽」など主体性を大事にした多くの「わ」に触れ、工夫したり、自発的な活動としての遊びを深めた未来を考え取り組んだ表現発表も行った。職員の実践発表では、コロナ禍における保護者との「わ」も考慮し、家庭との思いを一つに連携、保育内容の説明など理解を深める結果となった。

(4) 2021年度「カラー」

色を楽しむことから始まり、科学的な興味、気づいたり、わかったりと試す体験を積み重ねた。また絵本より、様々な色を個性、気持ちに置き換え、色の違いがあるように様々な気持ちがあってよいことを知る。友だちとの葛藤などがある中で、他者の存在の気づき、認め、個性を尊重し、気持ちに寄り添うことなど道徳性、規範意識の芽生えに繋がり、心の一つひとつを子どもが考える機会となった。

(5) 2022年度「LOVE＆PEACE」

ウクライナの戦争現状を知る子どもたちが、仲よくなればいい、優しくするとよいなど言葉を発し、気づき、心を動かされ、感じたことを考える活動を行っている。

日常に置き換えると、ぽかぽか言葉の大切さ、ちくちく言葉の痛みを知ることに結び付けている。また、平和について、子どもたちが家族、友だちとの生活の大切さを感じ、未来を考えるきっかけとなり、話す、聞くなど言葉への伝え合いが充実した思考力、道徳性、規範意識の芽生えがうかがえる。

2　保護者アンケートより考察

⑴テーマ設定認知度80％、⑵テーマ設定の理解度100％、⑶育ちへの関連性84%との結果から、テーマ設定について高水準で保護者の理解を得ている結果となった。

「大きくなった会」の表現、言葉のやり取り、各テーマによる興味関心の深まり、他者への思いやりの気持ち、一人ひとりの選択権、家庭においても子どもが言葉にしている。社会情勢を反映させ、成長に良い影響を与えている、難しいテーマだが、幼少期から学べることはとても良い、新しいことにチャレンジする考えることはよいこと、友だち、集団で考えることの貴重な体験となっている、などの声から、総合して、保育内容の理解が深まる取り組みになっていることと検証できた。特に思いやりの気持ちの育みや身近な社会情勢への興味関心について評価をされている。

3　職員アンケートより考察

⑴テーマ設定認知度95％、⑵テーマ設定理解後95.2％、⑶育ちへの関連性81.8％、⑷保護者への理解80％、⑸資質・能力のはぐくみ68.4％、⑹質の向上70％との結果となった。

遊びの展開から、発見、学びに繋がることの理解、自発的な活動の一つになること、豊かな体験からの気づき、工夫する力の育ちなどの理解を得ている。特に乳児への取り組みについては、園全体として幼児に向かい伸びていくための保育を構成する力、実践する力を必要であることが分かった。

Ⅵ　まとめ

今回の実践研究では、保育テーマ設定による効果、

・「保育の充実とともに、子どもたちの資質・能力を一体的に育む機会になっているのではないか？」
・「保護者に保育内容の適切な説明、理解しやすい取り組みになっているのではないか？」

について検証を行った。

結果および考察から、保育テーマの設定により、友だちとかかわる中で、やってみようと自信につなげる自立心、工夫、協力する協同性、自分や他者の存在、思いの違いに気づく道徳性、規範意識の芽生え、感じたり、気づいたり、新しい考えを生み出す思考力の芽生え、言葉による伝え合い、自然の事象に興味を促す自然との関わり、目標に向かって一緒に頑張ろうと表現を楽しむ豊かな感性など、自己肯定感を育み、心が動き、意欲・態度など人間力が育ち、よりよい未来へとつなげようとすることなど資質・能力の向上となる取り組みになっていること、また保護者アンケートより保育内容についても、理解を得る機会となっていることが分かった。

引き続き、創意工夫を図り、保育テーマ設定により子どもの主体性、かつ望ましい未来を作り出す力の基礎を培うため、保育内容を充実する取り組みを続けたい。

今後については、子どもたちが、さらに挑戦したり、工夫することができるような環境づくりとともに、保育実践する力を職員間での学びを深め、保護者の信頼また理解が深まる丁寧な質の高い教育保育を実践し続けるよう努力していきたい。

参考文献
・幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿　㈱東洋館出版社　2018　無藤隆
・遊びこそ豊かな学び（株）ひとなる書房　2013　今井和子
・保育所保育指針〈平成29年告示〉2017　厚生労働省
・カラーモンスター　きもちはなにいろ？　永岡書店　アナ・レナス
・まざっちゃおう！　フレーベル館　アリー・チャン

講評：保育テーマ設定による保育内容充実及び保護者への保育内容説明の効果

評者：天野　珠路

2018年に開設以来、毎年、その年度のテーマを設定し、園全体で保育の充実を目指してきた園の取組が記録されています。「太陽」や「世界」、「カラー」、「LOVE & PEACE」などテーマに沿った環境構成や「えんだより」に記載された内容を通して実践が伝わり、テーマの探求が子どもたちの気付きや学びに繋がっている様子がわかります。

保護者アンケートの中に「どういった経緯でこのテーマに至ったかを、より詳しく説明していただけると納得できるし、より理解も深まると思います」という保護者の意見がありました。このあたりを踏まえ、テーマ設定を含めた実践の過程が、より具体的に伝わるとよいのではないかと思います。

コロナ禍、ウクライナ戦争と混迷を極める社会情勢を前に、戸惑い、言葉を失い、心痛めることの多い大人たちです。子どもたちに道徳心を伝えたり教えたりすることの困難さを味わいながら、共に悩み、考え、保育実践の意義を模索していっていただきたいと思います。

評者：馬場　耕一郎

資質・能力を一体的に育む機会に着目した研究であり、大変興味深いものでした。

研究に取り組むにあたり、「保育所保育指針」を丁寧に読み込み、理解を深める事は大変良い取り組みでした。また、保護者にアンケート調査を行い、客観的な指標を用いたことは、保護者との理解を深める上で大変重要な取り組みであると感じました。

保育の質向上に取り組む上で、自園の状況や保護者の理解を数値化することは、大切です。是非、今後も定期的にアンケート調査を実施し、変化を捉えて頂きたいと思います。また、取り組みを継続することで、子どもたちがさらに挑戦し、工夫することができるような環境が整うのではないかと期待しています。

評者：髙木　早智子

本研究の研究者でもあり、施設長でもある岩本氏の自園の保育内容の充実や、保護者への説明を十分にしたいという想いが、読んでいるこちらにも伝わってきて、同じ立場の人間としてとても好感が持てました。テーマに沿った実践も多彩で、子どもたちの姿や、保護者への発信等を興味深く拝見させていただきました。また、保護者や保育者にアンケートをとることで、実践の効果を測定しようとしたことも評価できます。今回、私が気になったことは「このテーマは誰がどのようにして決めているのだろうか？」「アンケートの結果はどのように反映されるのだろうか？」という2点です。保育テーマが子どもたちの中やその姿から発生してきたのであれば、とても素敵なことだと思いますし、アンケートの結果が考察されていますが、同時に課題も浮かび上がっているように思いますので、その部分を分析し、考察を行うことで、今後の現場に生きる研究になるのではないかと思います。

〈自由研究部門〉

運動あそびおよび戸外あそびから育つこと
～コロナ禍を過ごした子どもたち～

京都府・幼保連携型認定こども園 愛光こども園　**堀　友貴奈・岡本　幸子**

１．問題提起

当園では「みんな元気に遊ぼうね」の保育目標を掲げている。健やかで豊かな心とからだが育つように、戸外あそびを中心として、子どもが主体的に遊ぶことの出来る環境を整えている。また、毎朝体操を行い、３～５歳児は鉄棒や跳び箱等に挑戦するサーキットタイムを設けて過ごしている。

十分にからだを動かして遊び、体力がついていると思っていたが、散歩に行った時に帰りまで体力が持たない、友だちとの関わりの中でイライラして感情を爆発させる、力加減が分からない等、体力面やコミュニケーション面において気になる課題が見えてきた。「運動することが日常化すると、体力がついてきます」「戸外でからだを動かして、友だちと一緒に遊びこむことで、体力が高まるだけでなく、移り変わる外部環境に適応する力、理性や感情のコントロールのできる社会性をも育むことができます」[1)] と述べられているように、体力と心の発達が大きく関わっていると感じた。

ここ数年のコロナ禍により、様々な制限の中、余儀なくマスク着用が求められ、外出自粛により、子どもに最も必要な戸外あそびが十分に行われていなかったことが影響しているのか、園でからだを動かす機会が少ないのかと疑問を感じた。当園の保育内容（時間、環境、活動内容、保育者の関わりや援助等）は、子どもたちの運動能力を高め、非認知能力を育てるために充実したものになっているのか、調べてみることにした。

２．研究目的

①子どもたちは実際にどれだけの運動量で１日を過ごしているのか、基本の運動スキルの中の「歩く」に注目し、子どもたちの運動について調べる。
②戸外あそびや運動あそびを通して、身体的な側面だけでなく、心の育ち・社会性等の非認知能力がどのように育っているのかを実践記録を通して考える。
③研究を通して得られる課題から改善点を見つけていく。

３．研究の方法

①歩数計を使用し、園内生活時の子どもの歩数を調査する（４・５歳児）
②実践記録をとり、記録をもとに考察を行う（３・４・５歳児）

４．歩数の調査

当園では、あそびの充実を保障するために、戸外あそびの時間を多く持っている。子どもたちが、クラスの友だちや異年齢の友だちの姿を見て意欲を高め、主体的にあそびに熱中することができるよう時間の確保を心掛けている。

（デイリープログラムより戸外あそびの時間を抜粋）

8:00～9:10	戸外あそび（自由あそび）
9:15～	体操
9:30～9:45 （３～５歳児）	サーキットタイム
10:00～11:00頃	主活動
13:00～15:00 （４・５歳児）	戸外あそび(自由あそび・集団あそび等)
16:00～17:00	戸外あそび（自由あそび）

「保育所に通う、５歳児の午前９時から午後４時までの園内生活時の歩数に注目すると、昭和60年代は12000歩確保していましたが、徐々に減少し、平成10年以降では5000歩台となり、昭和の時代の半分となっています。この状況が毎日続くと、慢性的な運動不足の状態になっているかもしれません。」と述べられている。[1)]

そこで、どのようなあそびをどのくらい行えば、運動量を確保することが出来るのか、４歳児26人（男児12人、女児14人）、５歳児26人（男児14人、女児12人）の中から毎日５人に歩数計をつけて、その日の活動や１日の歩数を計測した。

計測初日は肩に付けている名札と共に、歩数計を付けて計測した。しかし、腕を動かすだけでカウントされてしまい、失敗に終わった。正確に計測するためにはどこに付けるのが良いのかと検討し、９月以降は靴下の中に入れて計測することにした。

＜計測結果＞

※下記の数値は、計測期間中の平均値

①　約１時間の遊びの歩数

散歩（片道約１㎞）	4994歩～6301歩
ままごと	1322歩
キックバイク	1693歩～2385歩
おにごっこ	2708歩～3151歩
大縄跳び	949歩～1619歩

② １日（午前８時30分～午後５時）の歩数

４歳児	7543歩～11380歩
５歳児	9859歩～15466歩

＜考察＞

その日の活動や男女差、あそびの内容によって、歩数に差が出ることは予想していた。しかし、その日の活動によって違いはあるが、平均すると１日で約１万歩近く歩いているという結果が出た。

運動量が足りないのではないかという疑問については、想像していたよりもからだを動かして遊んでいるということが分かった。歩くことに着目すると、園外に出て歩く散歩は、同じ１時間であっても、園内での活動の２～３倍の運動量が確保出来ることが分かった。

５．実践記録と考察

＜実践１＞

３歳児 「周囲への興味の広がり」

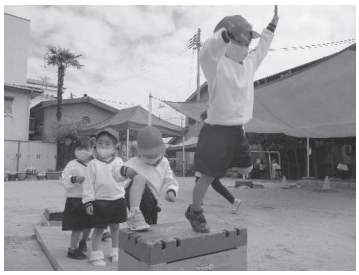
（４月）

毎朝のサーキットタイムに初めて参加し、その時間を楽しむところから始まった。４・５歳児に混じり、鉄棒にぶら下がったり、ぶら下がって足を動かしたりして参加していた。サーキットタイム中、コースを回って楽しんでいた。

数人は、サーキットが始まっても興味関心がなく、自分の気の向いたままに固定遊具で遊んだり、走り回ったり座り込んだりする姿があり、参加しようとしなかった。

保育者は、少しでも運動あそびに興味が持てるように「一緒にしよう。」と誘い、鉄棒に触れる機会を作った。出来た時には「挑戦出来てすごいね。」等十分に認めるようにした。

Ａ児は、鉄棒に触れることが出来たら保育者とハイタッチをして喜び、満足感を得るようになった。



（５月）

サーキットタイム後も保育環境を構成する中で同じような運動用具を使ってコースを作り、何度も遊べるようにした。興味を持った他児はくり返し遊び、楽しそうな表情で声をあげ取り組んでいた。

Ａ児は、友だちの様子を見て運動あそびに興味を示し、「１回だけ」「もう１回だけ」と満足するまでくり返し運動あそびを楽しむようになった。

（６月）

Ａ児はサーキットタイムに、徐々に参加できるようになってきたが、順番に並んで待つことが出来ず、保育者に声を掛けられることが多かった。４・５歳児が、保育者の姿を真似て「こっちに並ぶねんで。」と声を掛けたり、手を繋いだりしてくれた。何度も声を掛けてもらう中で、周りの様子を見て自ら列に並んで順番を待つようになった。

友だちとの関わりを深めるため、お店屋さんごっこをテーマにクラスで楽しんだ。様々な素材を使用し、お店屋さんの看板やお金、買い物かばん、商品等を作り、それを使って物のやり取りをしていた。また、お店屋さんとお客さんに分かれ、「いらっしゃいませ！」「これ、ください。」「少々お待ちください。」と言葉を交わし、ごっこあそびを楽しむ姿があった。

Ａ児は、お店屋さんになることを喜び、積極的に参加していた。料理を作ろうと一人で黙々と砂と水を混ぜ、出来上がるとお客さんに「どうぞ、ハンバーグです！」と受け取ってもらうことに喜びを感じていた。

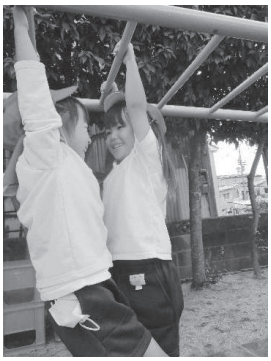
（７月・８月）

水あそびが始まり、Ａ児は色水あそびを積極的に楽しんだ。色水を作ることが出来ると、相手に認めてもらいたい気持ちが強く、「見て。」「すごい？」と保育者や友だちに同調を求めていた。また、作っている色水の色が同じ友だちを見つけ「一緒だね。」と見せ合う姿があった。少し周りの友だちのあそびや姿に興味が向いてきた。片付けの時間までくり返し同じあそびを楽しみ、充実感や満足感を味わっていた。

（９月）

Ａ児は、毎日鉄棒に触れる中、ぶら下がったり、保育者の補助を受けながら逆上がりをしたりと前向きに取り組むようになった。ある日、Ａ児が順番を待っていると、友だちが前回りをしていた。それを見て「おおーＢくんすごい！」と拍手をして保育者にも共感を求めていた。Ａ児の順番が来ると「ぼくもやる！」と言って、前回りに挑戦し成功した。その後も何度も前回りに取り組み、保育者と出来たことを喜び合った。

運動会当日、生き生きと鉄棒や跳び箱に挑戦し、保護者にも見てもらうことが出来た。



＜考察１＞

Ａ児は４月頃、鉄棒や跳び箱を用いた運動あそびや集団あそびに興味がなく、自由に固定遊具で遊んだり走り回ったりすることに楽しさを感じていた。園生活を送る中で、具体的に出来たこと一つひとつを十分に認め、一緒に喜び合ったことで、認められた喜びから自信を持ち、「やりたい」という気持ちに繋がったと考えられる。運動あそびだけでなく、戸外ではお店屋さんごっこや色水あそび､製作あそびなど様々なあそびの経験を重ね､徐々に友だちや周囲への環境に興味が湧き、友だちとの共有を楽しんだ。自分が認められることで、友だちへの思いやりの気持ちが育ち、また、集団でのあそびにも楽しんで参加するようになっていった。活動に意欲的になるともっとあそびを楽しみたいと感じるようになり、更にルールを守ればより遊びが楽しめることに気づき始めた。他児への興味から憧れの気持ちを持ち、「自分もやってみたい。」という思いに繋がったと考えられる。遊びから得られた成功体験から、保育者に認められ、運動への意欲や有能感が育まれ、自発的にからだを動かす姿が見られた。意欲的に取り組む態度を養う機会となった。

＜実践２＞

４歳児　「目標に向かって友だちと一緒に」

ある日の夕方、園庭で遊んでいた女児３人。鉄棒での連続逆上がりに挑戦していた。保育者を見つけると「逆上がりの連続がしたいねんけど、難しい。」と話す。保育者は「どうしたらいいかな？」と問いかけ、子どもたちがどのような発言をするのかと見守ることにした。すると、「どうしたら出来るかな？」「早く回ってみる？」と３人で話し合う姿があり「それも良いね。」と共感すると、鉄棒のところへ行き挑戦し始めた。そこへ「私もやりたい！」と同じクラスの友だちが来て、連続逆上がりをした。それを見た３人は、「すごいな。」「もっと頑張ればできるかな！」と声を掛け合いながら、順番に逆上がりをしていき、何度も挑戦を続けた。出来なくても「あともうちょっとやな。」「がんばれ！」と手を叩いて応援し合っていた。

暫くして、２人が「休憩したい。」と違うあそびに行ったが、１人だけは残って「逆上がりの連続が出来るようになりたい。」と保育者に話した。「もっと足を振ってみたら？」と伝えると「分かった。やってみる！」と言い、足を勢いよく振り上げたり、鉄棒を持つ手の位置や角度を変えたり、違う高さの鉄棒に移動してみる等工夫し、やがて連続逆上がりに成功した。保育者とハイタッチをして喜んだ後、友だちのところに駆け寄り「回れた！」と一緒に喜び合っていた。

＜考察２＞

「連続逆上がりを成功させたい」という共通の目標をもとに、それぞれが鉄棒に取り組み経験したことから想像力を発揮し、どうすれば出来るようになるのかを考え、試行錯誤していた。出来た喜びや出来ない悔しさを友だちと共有し、根気強く挑戦する様子が見られた。友だちと共通する目標を実現させ、その喜びや充実感を共に味わうことが出来た。保育者は、子どもの思いや考えを読み取り、見通しが持てるように励ましながら見守った。子どもの心に寄り添い支えることで、自信をもって前向きに取り組む姿に繋がったと考えられる。

＜実践３＞

５歳児　「友だちや保育者の気持ちに触れて…」

（４月・５月）

戸外に出ると、男児たちは、ただ走って友だちと追いかけっこをしたり、相手のしたことが自分の思っていることと違うとすぐに怒って手を出したり、あそびをやめてしまう姿があった。

保育者が仲立ちとなり「どうしたかったの？」「どう思っているの？」等、子どもの思いを具体的に聞いて言葉にし、相手に伝えるように関わった。すると、上手くいかないことが起こると、言葉で伝えようとしたり、保育者を頼ろうとしたりする姿が見られてきた。しかし、相手の思いを聞き入れようとせず、あそびが続かないことも多かった。

＜考察３－１＞
４月当初、感情を押さえられずにイライラしていた子どもたちは、トラブルを止めに来た保育者から逃げ、自分の気持ちを話そうとしなかった。しかし、保育者がくり返し子どもの思いを受け止めていくことで、温かく見守られている、ありのままの姿を認めてもらえていると感じ始め、自分の思いを素直に話そうとする姿に変わりつつあった。

（６月）
４～５人が、毎朝の体操には参加しようとせず、離れた場所に座って様子を見ている。保育者に声を掛けられ、渋々クラスの場所に行くが、体操をしようとはしなかった。その後のサーキットには参加するが、ふざけて鉄棒の下を走り抜けたり、並んでいる時に友だちを押したりするなどのトラブルが頻繁に起こっていた。サーキットが終わり、保育室に戻る際には、保育者の様子を伺いながら園庭で座って喋り続け保育室に入ろうとせず、１人で思いを主張するというよりは、他児と一緒にルールを守らないことを楽しんでいるかのような様子が見られた。
クラスでリレーを行った時には、負けていることが嫌で走ろうとしなかったり、負けたことが悔しくて感情を爆発させたりする姿があった。

＜考察３－２＞
保育者は、園生活には様々なきまりがあることや、きまりの必要性をくり返し伝え、少しずつ自分を抑制し、ルールを守って遊ぶ楽しさを味わってほしい、という願いを持ち関わってきた。しかし、自分の気持ちばかりを優先し、保育者の思いを受け入れられない場面が多かった。
なぜ相手の思いを受け入れられないのか振り返ってみると、こちらの思いばかりを伝えすぎていたのではないか、寄り添い関わっているつもりだったが、子どもが求める関わり方が出来ていなかったのではないかと考えた。一人ひとりとの信頼関係が築けているかという原点に立ち返り、見直す必要性を感じ、子どもの心のよりどころとなるようしっかりと受け止めていくことを保育者間で確認した。

（７月・８月）
水あそびが始まり、３～５歳児が３つのコーナーに分かれて、自分の興味のあるあそびを選んで遊んだ。異年齢の友だちと一緒に遊ぶ中で、自分の思い通りにならないことがあっても我慢し、どうすれば解決できるかを考え、工夫したり保育者を頼ったりしながら、あそびを楽しむ姿があった。クラスの活動になると自分の思いを譲ることが出来ずにトラブルになることがあった。

＜考察３－３＞
異年齢交流の中で、年下の友だちに優しく接し、自分の思いがあっても強く主張することなく、相手の思いを受け入れようとする姿があり、思いやりの気持ちは育まれていると感じた。また、あそびをより楽しくするために考えたり、工夫したりする力を発揮することが出来ていた。しかし、クラスの友だちとの関わりになると、相手の気持ちに気づいてはいても、受け入れることが出来ないという葛藤が感じられる。

（９月）
ある日、Ｃ児は「だるまさんがころんだをやりたい。」と友だちを誘っていた。ルールを守って楽しく遊べるように、始める前に友だちにルールを伝えていた。あそびが進んでいくが、ルールを守らない友だちが出てくる度に中断して確認し合っていた。以前は思い通りにいかないことがあるとすぐに怒っていたが、相手の思いを予想し、うまくいかなくてもどうすれば楽しく遊べるかを根気よく考え、くり返し伝えていた。

＜考察３－４＞
保育者への信頼感が深まり、自分の考えや思いが受け止められた喜びを味わったことで、相手にも伝えてみようという気持ちが生まれたように感じる。ルールのある集団あそびを通して、楽しく遊ぶにはどうすれば良いか、どのように言えば友だちに伝わるのかを考え、自分なりの言葉で表現して伝えようとする姿が見られた。うまくいかないことも経験しながら、人間関係が深まってきていると考えられる。友だちとのあそびをより良くするために、自分の気持ちを調整し、きまりを守る必要性に気づき始めている。

６．おわりに
運動量の調査において、子どもたちは日々よく動いて遊び、からだを動かすことの楽しさや気持ち良さを感じている子が多いということが感じ取れた。さらに子ども

の運動あそびが発展していくためには、魅力ある環境を整えるための工夫や、子どもに関わる保育者が魅力ある人的環境となっていくことが課題である。

戸外あそびや運動あそびを通して、「３つの柱」や「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」等の非認知能力の育ちが見られた。子どもたちは、自己を発揮し、主体的に伸び伸びと遊びながら、子どもの中にある潜在能力を発揮しつつ、心とからだを育んでいる。保育者は、より丁寧に子どもの姿や発達を的確に捉え、計画し、常に振り返り、改善しながら、園でしか味わえない多種多様な経験を積み重ね、働きかけていく必要があると感じた。特に現在の５歳児においては、人間関係（自立心、協同性、道徳性、規範意識の芽生え）に課題が見えた。乳幼児期の年齢にふさわしい体験が不足していることが影響していると感じる。乳児期、幼児期の体験は、子どもの育ちに密接に繋がっていることを改めて実感した。

今回の研究を行うにあたり、子どもの育ちについて振り返っていく中で、少なからずコロナ禍の影響があったのではないかと考えた。コロナ禍を過ごし３年目、発達途上の子どもたちに黙食などの食事中の規制、友だちとの触れ合いの減少、マスク着用等により、相手の表情を読み取る力の未熟さ、コミュニケーション能力の低下に繋がったとつくづく感じた。幼児期の始まりに経験するはずだった個の成長と集団としての活動が十分に行われなかったことが背景にあるのではないかと考える。その時期を取り戻すことは出来ないが、今後、様々な体験を重ね、楽しいと思える魅力的な環境の中で主体的に遊び、友だちの姿に刺激を受け、学びながら、成長していけるよう保育を行っていきたい。また、課題が明らかになったので、職員間で共有し検討を重ね、子ども一人ひとりが着実な発達を遂げていくために、専門的な質の高い保育を目指していきたい。

最後に、保育を見直すきっかけを与えて頂いたことに感謝したい。

＜参考文献＞

１）石井浩子：幼児の運動あそびおよび外あそびの重要性、キリスト教保育９月号、pp.6-13、2022年
２）幼保連携型認定こども園　教育・保育要領解説、内閣府・文部科学省・厚生労働省、フレーベル館、2018年

講評：運動あそびおよび戸外あそびから育つこと ～コロナ禍を過ごした子どもたち～

評者：小林　芳文

コロナ禍により、子どもたちの戸外遊びが十分に行われていなかったことの疑問により問題提起され、どれだけ運動量が確保されているのか、歩数計の使用や実践記録を分析した実証的な研究として興味をもって拝見しました。歩数の計測方法を工夫されたことや、遊びの場面も加えてデータを取られたことで、想像していたより身体を動かして遊んでいることがわかったこと、また散歩の歩数との比較等運動量の可視化をされたことなど、大変良かったと思います。実践記録で取り上げている実践１のＡ児について、継続的に遊びや友達とのかかわり、心の成長の状況等が記録されており、その発達の変化がきちんと整理されています。願わくは本児についての発達特性について細かな事例紹介が欲しかったところです。なぜ研究で対象児が取り上げられたかも理解でき、研究により厚みができたと思います。実践２、実践３についても分りやすく考察にあげているように、運動遊びで育まれる成就感、達成感等非認知能力が育っていることや自己コントロールも育まれていることがわかりました。

評者：馬場　耕一郎

子どもたちの「歩く」ことに注目し、子どもたちの運動について調査した研究は、コロナ禍を過ごした子どもたちを理解する上で大変重要なテーマだと思います。子どもたちの活動を客観的に理解することは、環境整備や保育内容を考える上で重要なことです。散歩の活動量と園内での活動量の差に気づかれたことは、素晴らしいと感じました。また、子どもたちの活動を十分に認め、一緒に喜び合ったことが、子どもたちの自信に繋がり、「やりたい」という気持ちに繋がったことは、多くの園の参考になると思います。今後も多種多様な経験を積み重ね、乳幼児期にふさわしい体験が重ねられることを期待しています。

評者：髙木　早智子

この研究で私が一番興味を惹かれたのは、歩数計を使用し、園内生活時の子どもの歩調を調査したという点です。歩数計を用いて子どもたちの活動量を数値化し、可視化したデータとなっていることは評価に値します。実際の歩数を目の当たりにすることで、気づきを得られている点も良いと思います。続く実践記録と考察でも、丁寧な記録と子どもたちに寄り添う視点の考察には好感が持てます。惜しい、と感じたところは、歩数調査と実践記録、考察に関連性がみられないことです。また、問題提起やおわりの部分で、コロナ禍の影響について触れられていましたが、今回の研究において、検証が見当たらなかったことが残念でした。今後の課題も「魅力ある環境・人的環境」と抽象的でしたので、研究結果を踏まえた上で具体的に表記することで、さらに実践研究報告として内容が濃いものになったのではないでしょうか。引き続き実践研究に取り組まれることをご期待申し上げます。

〈自由研究部門〉

「生きる力」を育む保育を目指して
～園庭環境を見直す取り組み～

鹿児島県・幼保連携型認定こども園 建昌こぎく保育園　**横井　香澄・森　悠希**

1．園の概要

当園は、九州地方の南端に位置する鹿児島県の中央部、姶良市にある。姶良市は、2010年（平成22年）３月23日に、姶良郡蒲生町・姶良町・加治木町が合併して発足した。活火山である桜島を眺めることができる環境の中で、平成25年に60名定員の保育園として開設。現在は定員70名の幼保連携型認定こども園に移行し、９年目を迎えた園である。

「元気で 思いやりのある こぎくの子」～丈夫な体と豊かな感性、仲間を思いやる心をはぐくみ「生きる力」を身につけた子どもを育てる～という教育保育目標を掲げ、様々な家庭の労働形態や環境などに対応するためにニーズに合わせた教育保育に取り組んでいる。また、隣接する同法人の老人施設や保育園、障がい児・者施設などとの交流を図りながら、子どもたちの社会性や思いやりを育んでいける取り組みに努めている。

2．テーマの設定理由

平成30年度の教育保育要領の改訂を受け、法人では、これまでの「保育者が設定した遊びや活動」を保育の中心にした実践方法から､「子どもが自由に選択できる」｢子どもが主体的に活動できる」など、子どもが中心となる保育へ移行し、法人の保育目標にある「生きる力」を育むことの実現について再考することになった。

園としてはまず、教育保育要領の改訂内容を知ることから始め、少しずつこれまでの取り組みを見直した。特に、３歳以上児がドキュメンテーションを使った日誌や、３歳未満児の付箋を利用した全保育者の意見を抽出する日誌など、書式等の工夫をスムーズに行うことが出来た。

しかし、根本的な保育や活動の内容については、「主体的保育」＝「自由保育」なのか？保育者が設定する一斉的な保育は取り入れられないのか？自由な選択で基本的生活習慣が身につくのか？等、色々な課題や悩みがあり、これまでの保育から変えることができない状況だったが、その中でも、園内の勉強会や外部研修・視察等に積極的に参加し、学んだ内容を少しずつ保育に取り入れていくことで、「主体的」＝「自由」ではないことや主体的な保育や活動の良さ、一斉的な保育の必要性など、実際の子どもたちの遊びや、活動時の姿の変化や違いに気づき始めることができ、取り組みの重要性を感じることが出来た。

そして今年度、さらに取り組みを深めるために、園の理念や目標の再確認・理解を行いながら、「子どもたちが主体的に遊び込める仕掛け作り」をしていきたいと思い、特に園内環境の充実・整備を図ることにした。また、ドキュメンテーション日誌や月案などを活用した、子どもや保育の共通理解についても並行して取り組むことにした。

3．研究の目的

子どもたちが「主体的に・選択ができる」保育を実現し、保育目標である「生きる力」を育めるように、２つの取り組みを実践していく。

① ドキュメンテーション形式での、日誌や月案の充実を図り、子どもやクラスの様子を園全体（子ども・保護者・職員）で把握し、子どもたちの育ち（継続した育ち）を見守ることが出来るようにする。

② 「環境」についての勉強会（園内研修）を充実させ、積極的に環境を変えていく試みをすることで、子どもたちがじっくりと遊び込める場所づくりに取り組む。特に、園庭の環境づくりに力を入れ、ダイナミックな遊びを多く取り入れることで、心身ともに健やかに穏やかな育ちに繋がる支援を目指す。

4．研究対象及び実施期間

1）対象
　建昌こぎく保育園　全園児

2）実施期間
　令和３年４月から令和４年３月

3）倫理的配慮
　園児の写真掲載については、保護者承諾済み

5．研究方法

○園内研修の充実（教育要領及び参考文献を読む等）
○実際の園内活動場面の観察と見直し
○環境整備を計画的に進める

6. 研究の実践（具体的実践内容）

①主体的保育に取り組むためのねらいと記録を考える
＜４月＞

子どもたちの遊びの展開や興味の持ち方を観察し記録することで、次の遊びへのヒントを見つけることが大切。

昨年度までの日誌の書き方を再検討し、日々の保育の中で、10の姿を意識して書けるように項目を設けた。また、これまでクラスだよりの中に、月案として目標と日々の活動計画をのせていたが、主体的な保育に取り組むことを考えると、毎日の活動が決まっているのはおかしいのではないかという意見もあり、これまでなかった月案の必要性にも目を向け取り組むことにした。月案を書くことで、目指す子どもの成長を具体的に表すことができ、次月への振り返りもしやすくなるのではと考えた。まとめとして、ドキュメンテーション形式でひと月を振り返るように決め取り組んだ。

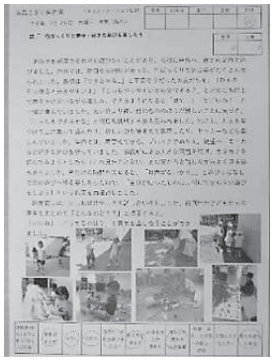
＜8月＞

４月から７月までの４ヶ月の日誌・月案への取り組みについて振り返りを行う。全クラスの日誌・月案をみんなで見て、良い点が工夫されているところを出し合い、振り返る。未満児と以上児では、その月のまとめ方に違いがあり、「どういう形でまとめるべきか迷う」という意見もあった。月案については、昨年度はなかったが、ねらいや取り組みについて記載することで、振り返りもしやすくなり、あった方がよいという意見がでた。

○４・５月の面談、送迎の際、理事会などで保護者に日誌・月案などの感想を求めた。

ドキュメンテーション日誌

１日の活動内容の振り返りや、子どもの育ちを感じられる事柄をピックアップして保護者に伝えることができた。



▶保護者からの声

・お迎え時の話題や、親子・家族との話題に繋がっている。
・子どもの遊び、友だちとの関わりなど、１日の様子が写真も掲載されているのでわかりやすい。
・保護者同士、保育者とのやり取り（会話）もしやすくなった。
・行事への取り組みなどつながりが見える。

月案まとめ

月毎でねらいに沿った活動や、子どもたちが興味をもって主体的に活動したこと、挑戦していることなどをまとめている。活動の移り変わり、変化展開などがわかりやすい。

▶保護者からの声

・活動の意図や、遊びの繋がり
・子ども同士のつながり、関わりなどがわかる。
・子どもが楽しんでいるのが伝わる。

②園の理念・方針・目標を再確認し、園庭環境について考える（意見交換）

今年度初めに「教育・保育課程」を見直し「生きる力」を育むために大切にしたいものをあげ、記載した。その後も私たちが考える「生きる力」とは何かを話し合う機会を設け共通理解を図ってきた。

具体的に「生きる力」とは？

・基本的生活習慣を身につけ、自己肯定感を持つ
・自分で物事を考え判断できる力
・他者との関わりを持ち共感できる力
・自分の考えや思いを伝えられる力
・好奇心、探求心、行動力、挑戦できる力

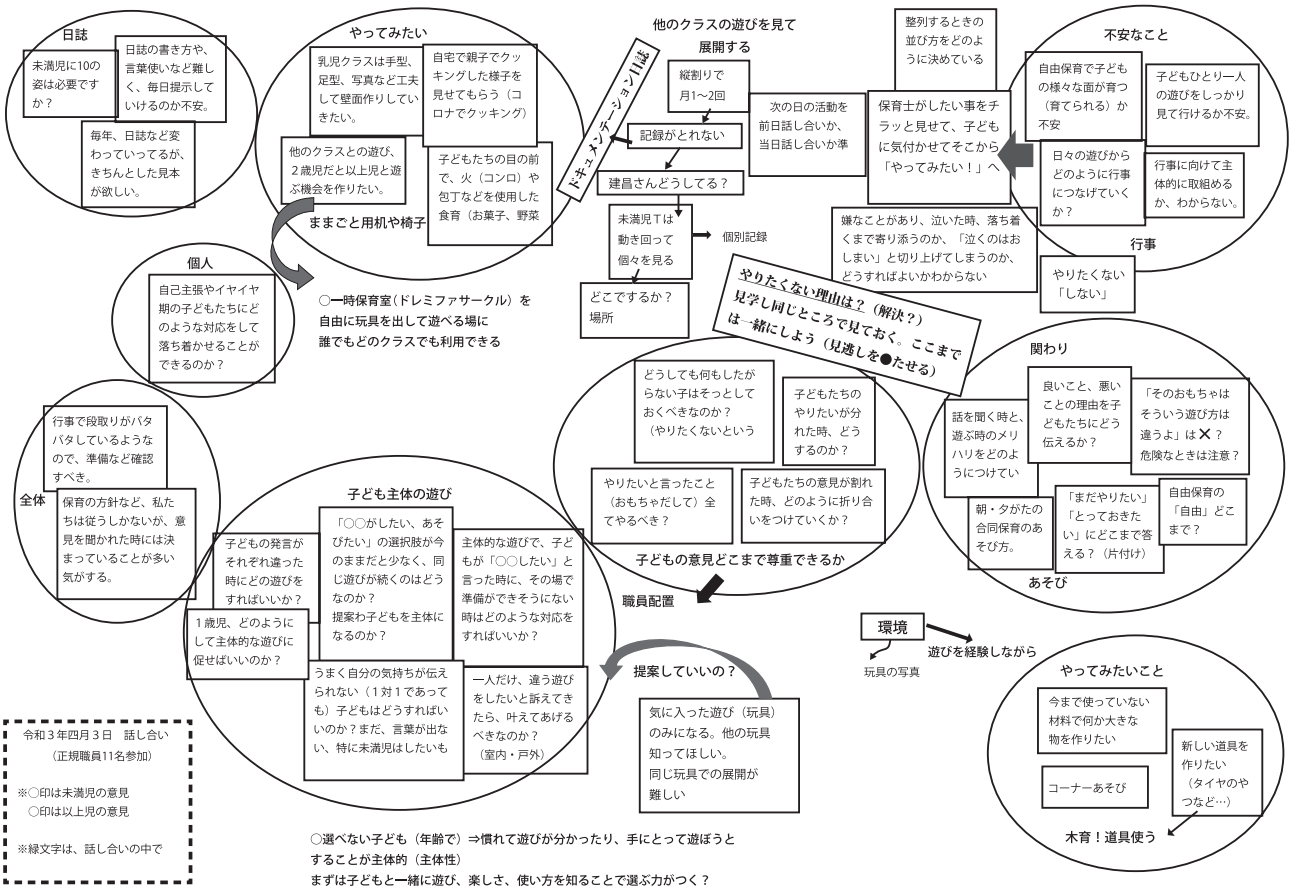
などがあげられた。

「主体的保育を考える」（意見交換・共有）

３歳以上児・３歳未満児で分かれて、環境構成を考えて意見を出し合う事で、それぞれが不安に思うことや理解が不十分なところなどが出てきた。

意見を一覧に上げ、４月時点では、まだ主体的な保育について具体案は出なかったが、昨年度の反省点に基づいて、少しずつ出来るところから始めようと締めくくる。

・子どもの遊び方の観察・園庭環境（遊具・砂場等）の見直し。



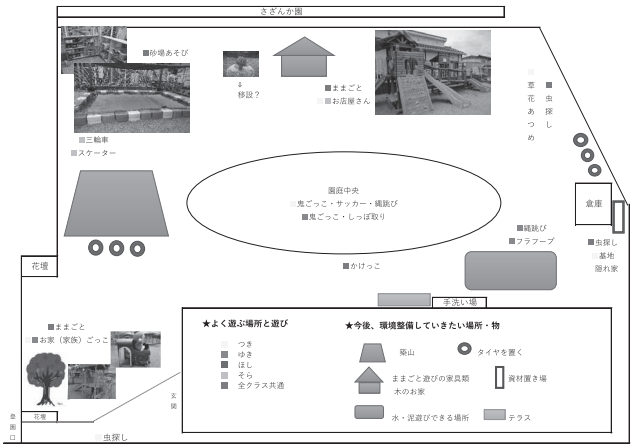
＜４月＞

園庭マップに子どもたちが普段よくしている遊びや遊んでいる場所をクラスごとに書き入れ検討する。

また、今後園庭の遊具など環境を改善するとしたら、どうしたいかも書き足していき園内研修等で話し合う。

遊びの内容は、以上児と未満児とでは少し違ったが、砂遊び・ままごと遊びなどはどのクラスも共通で、遊びの幅を広げていく工夫をしたいという意見が多かった。

子どもたちの遊びの中から身体を動かす活動が少ないので、遊具としてタイヤや木材を利用したものも設置できないかという声も上がった。同時に遊具の設置場所などによって見守りの仕方など、ヒヤリハットについても考え、共有する。



○子ども視点
・子どもたちの流行りの遊び
・好きな場所・人気の玩具（道具）

○職員視点
・死角になる場所
・実際事故や、ケガのあった場所（危険個所）
・子どもたちに興味を持ってほしいこと

＜5月＞

運動会実施のために総合遊具を移設したことをきっかけに、思い切って固定遊具を動かし、子どもたちが遊びやすい園庭環境案を話し合い、環境づくりに取り組む。

キャラクター型の総合遊具を二つに分けて設置。（遊具内に 入り遊ぶことが多く、死角になりやすかった）分けたことにより、出入りしやすくなり、子どもたちの遊びも広がった。また、職員の目も行き届きやすい。

砂場周りの環境も見直し、これまで園庭裏に片づけていた砂場の玩具を、砂場横に棚を設置して子どもたちが取りやすく、片付けも自主的にできるよう工夫した。

＜7月＞

運動会のグランド整備の為に入れた土が小山のようになっていたところで、子どもたちの遊びが始まったことをきっかけに、築山づくりの取り組みがはじまった。5歳児が協力し合って、土運びをして築山を大きくしていった。その様子を見て、他のクラスでもまねしてバケツや台車を使って運ぶ様子が見られた。

職員の話し合いの中では、

・木材や古タイヤを使った遊びに変化を持たせる。
・土の中に何かを入れて掘り当てる楽しさを味わう。
・椅子やテーブルを用意して、砂遊びからごっこ遊びへと幅を広げられるようにする。

など色々な工夫をしていきたいと意見が出た。

子どもたちの遊びの様子や反応を見ながら、じっくりと遊び込める環境を作り始める。

更に、子どもたちが興味を持ち、遊び始めた事もあり、築山用の土を園庭に入れる。初めはブルーシートの上に登ったり、滑り降りたりして楽しんでいた。築山の上で高くなる目線を感じて喜んでいる様子だった。

＜9～10月＞

2回目の土を入れ、築山の存在に慣れてきた子どもたちは穴掘りをはじめ、大きな石が出てくると「恐竜の卵だ！」と想像も膨らみ、発掘現場を囲って立ち入り禁止区域にして複数で数日発掘遊びをするなど、継続した遊び方が見られるようになってきた。

こぎくのシンボル「くろがねもちの木」に新しいロープをつけ、木登りやタイヤブランコも楽しむ。5歳児を真似てほかのクラスも遊ぶように…

＜11月以降＞

築山の土もしっかりとかたまり、三輪車や段ボールなどを利用して、滑り降りる遊びなど楽しむ姿が見られた。以前だと「危険だから」と止められた活動だが、子どもたちが自分で「怖い」と感じたり、「危ない」と感じることでスピードを調整したり、他の子の様子を見たりして挑戦する姿があった。

○その他の活動（野菜の栽培・木（竹）育）

年長組が、昨年度の卒園児が残したひまわりの種を植え、キュウリやピーマンの栽培を始める。その様子を見て、他のクラスの子どもたちも取り組む姿が見られた。オクラやトマト、ナスなどの野菜が実り収穫を楽しんだ。

自分たちで育てた野菜を食べる経験が、食育にもつながっていることを感じる。

竹や木を使った遊びや活動にも取り組み始めた。

そうめん流しでは、自分たちの箸を削って作るなど年中組も一緒になって取り組み活動の幅も広がった。

また、竹ぽっくり・竹のベンチなどを作ってもらうと、興味を持って遊び始め、３歳未満児の子どもたちも楽しそうに竹ぽっくりを乗りこなす姿も見られた。

竹を使った遊びだけでなく、木切れを使った積み木作りや丸太の手作りのテーブルや椅子なども、子どもたちの遊びに大いに役立ち、ままごと遊びの幅が広がり、体を思いきり動かして遊ぶというダイナミックな経験にもつながっている。

５．結果と考察

①　月１～２回の園内研修、合計21回での学びや話し合いの中で、日々取り組んだドキュメンテーション形式の日誌は、昨年度より内容も充実し、子どもたちの遊びの様子や成長の過程を感じる事ができ、職員間でも、保護者とも共有できるものになっている。

「育って欲しい10の姿」を意識することによって、私たち保育者が、遊びを子ども目線で見て、時には参加して、子どもたちの発信する言葉や行動の意味、前後の事柄を、より理解しようと身をかがめ受け止めようとする姿勢にもつながった。

安全面への配慮で「危ないから」と禁止してしまっていた行動も「こういう配慮や補助があればできるかもしれない」と考えたり、子どもたちと一緒にルールなど考えたりする機会に変わってきた。

今年度から取り入れた月案と、まとめのドキュメンテーションも「育ってほしい10の姿」を考えながら作るようになり、それぞれのクラスの様子や成長の姿がわかりやすく、月を追うごとに良いものになっていると感じる。

② 「環境」についての取り組みは、固定遊具の移設や築山を作るという大規模なものから、自然（竹や木、花や野菜）に関わりながら遊びを展開していくという身近なものまで、いろいろなことに取り組んだ。これらを積極的に取り入れていくことで、遊びの幅がぐんと広がったと思う。さらに「主体的な」というキーワードを常に考えることによって、子どもたちの思いをくみ取り、考えを聞きながら、遊びの展開を取り入れられるようになった。子どもたちも「危ないのでは…」という理由から却下されていたことも、意見が聞き入れられることで、子どもたちが「こんなことやってみたい」と声を上げてくれ、発想力も広がりダイナミックに遊べるようになった。

６．まとめ

昨年度は、ドキュメント方式の日誌を取り入れ、「主体的保育とは何か？」の学びの中で色々な葛藤があり、今年度は、子どもたちがのびのびと遊べる環境を作るために考え、取り組み始めた築山づくりや、その他のいろいろな素材（自然に触れ合うような）を取り入れ、子どもたちの様子や活動をじっくりと観察しながら、ともに楽しむ保育を目指した。

アイデアを出し合い色々なことを実践していくうちに、子どもたちの「何だろう？」「やってみたい」という気持ちや嬉しそうな顔、意外な反応や子どもたちの発想、遊びの展開に驚かされることも多く、園庭での活動的な遊びや自然物が色々な玩具になり、工夫しながら楽しむことが、子どもたちの心身の発達につながるのだと痛感した。

「やってみる事」、「やってみよう」と思えること、「今日出来なくても次の日にまたチャレンジしよう」とする気持ちが何よりも大切で、それこそが子どもたちの「生きる力」を育むということに繋がるのではないだろうか。子どもたちの力を信じることが必要だと感じている。

今後の課題としては、園庭での活動量が、年齢によって大きな差があることから、主体的な遊びを取り入れた異年齢での活動が、触れ合いや学び合いの絶好の機会になると同時に、ケガや事故につながる恐れも十分にあることも感じ、話し合いを持つこともあった。

活動の仕方については、保育者間での意識の共有が必須で、園庭でもコーナーを設けて遊ぶなど、今年度も工夫を凝らした。子どもと一緒に楽しむ事と、活動を盛り上げながらの見守りの仕方について今後も考えていきたい。

また、子どもたちが主体的に取り組み始めた遊びも、継続していくことや、さらなる遊びへの展開へと盛り上げていくことの難しさも感じ、その時だけで終わってしまう遊びもあった。遊具などの設置だけでなく、保育者のちょっとしたきっかけづくり、遊びの仕掛け作りも大切な要素となると感じた。そのためにも、まずは保育者自身が子どもたちの思いを受け止めようとする心構えや、一緒に楽しむ「好奇心」・「探求心」を忘れずに取り組んでいきたい。

毎日の保育を保育者同士で語り合い、子どもたちのエピソードを伝え合いながら、その成長を喜び、「次はどんなことをやろうか？」と考えられるような環境でありたいと思う。築山や園庭の環境整備は今後も取り組み続け、自然とのふれあいの中で、「生きる力」を身につけられるよりよい保育を目指していきたい。また、毎年実施している保護者アンケートの中から、「家でなかなかできない遊びをたくさん経験させてもらい、子どもも楽しかった」「園での活動の楽しみ」等、うれしい声もいただいた。

参考文献

高嶋　景子／三谷　大規
・「語り合い」で保育が変わる （子ども主体の保育をデザインする研修事例集）
学研教育みらい　第１刷発行2020年６月９日　第２刷発行2020年12月２日

・ほいくあっぷ「生きる力」は園で育つ
学研教育みらい　2021年３月２日発行

文京区立お茶の水女子大学こども園
・遊んで感じて自分らしく思いをつなぐ保育の環境構成
２・３歳児クラス編
・遊びを広げて学びに変える思いをつなぐ保育の環境構成
４・５歳児クラス編
中央法規　2020年３月１日発行

講評：「生きる力」を育む保育を目指して ～園庭環境を見直す取り組み～

評者：小林　芳文

子どもたちの「生きる力」の保育に向けた環境構成つくりをねらいとした、大変わかりやすい素晴らしい取り組みで、テーマ設定も今日的であり説得力のある研究になっています。研究の手順もきちんと踏んで実践研究として重みを感じました。特に、研究動機での「主体的に取り組む活動」の保育のために、園内環境を見直したり充実させたり、子どもの育ちを見守ることができるように配慮されたこと、ドキュメンテーション形式の日誌等の活用も保育の見える化において良かった点です。子どもたちの遊びに、身体を動かす活動が少ないことに気付き、タイヤや木材の活用、築山用の土での遊びの発展、しっかり固まった土の山での三輪車や段ボール利用による遊び等、動的な活動の実践からいきいきとした自発的な子どもの姿、環境との好循環の対話が伝わってきました。

「まとめ」であげられたことを、今後の更なる研究課題として取り組んでほしいと思います。

評者：石川　昭義

この研究は、保育者主導の保育から子どもが中心となる保育への移行を目指して取り組んだ記録です。「主体的保育を考える」をテーマに、保育者が意見交換を重ね、子どもたちが主体的に遊び込める仕掛け作りに取り組みました。「主体的に・選択ができる保育」を目標に掲げたことも良かったと思います。写真やイラスト付きの文章から、その様子が伝わってきました。

月案を記載するようになったことやドキュメンテーション形式でひと月を振り返るようにしたことも取り組みの成果として良かったと思います。

ドキュメンテーション日誌や月案まとめを保護者にも公開していると思われる記載がありましたが、保護者と情報共有する内容と、園として保存・保管する内容（個人情報を含む）は分けて考えるほうが良いのではないかと思われます。「生きる力」について話し合う機会を設けて取り組んできたことから、子どもが自分で考えるとか、自分で選択するといった場面を収集して、「生きる力」と実践とのつながりを考察していってほしいと思います。

評者：日吉　輝幸

建昌こぎく保育園では、「生きる力」を育むことを法人の保育目標としており、平成30年の教育保育要領の改訂に合わせて、子どもが主体的に活動できるようにするなど、子どもが中心となる保育に移行するにあたり、「生きる力」の実現について再考しています。まずは「子どもの主体性」に注目し、保育内容や記録を見直しつつ、園全体で共有できるように、ドキュメンテーション形式で計画立案や記録ができるようにしているのは良いと思いました。また、「生きる力」の共通理解を図る機会を設けたとの記述がありますが、法人の掲げた保育目標を保育士たちが意見を出し合い、共通理解を得ようとしていることは組織運営の手本と言っても過言ではありません。しかしながら、研究レポートでは様々な事例が記述されていますが、本研究のテーマとしている「生きる力」が育まれていると感じられる記述が希薄であったため、もっと具体的・詳細に記述してあるとよいと思います。

最後に、レポート中に“保育者自身が子どもたちと一緒に楽しむ「好奇心」・「探求心」を忘れずに取り組んでいきたい”との記述がありましたが、とても大切な心構えであると共感しました。

（3）奨励賞

〈課題研究部門〉

・課題研究部門①人との関わり

ペア活動を通して育まれる心の成長

長谷川　瞳（大阪府・幼保連携型認定こども園成育児童センター）

《課題研究部門》

課題研究①　人との関わり
ペア活動を通して育まれる心の成長

大阪府・幼保連携型認定こども園 成育児童センター　**長谷川　瞳**

１．はじめに

当園では、異年齢児との関わりを大切にして、教育・保育を行っている。戸外では０、１歳児が外に出る際に４、５歳児が自ら近づき、「お手伝いしようか？」と靴を履かせてあげようとする姿をよく目にする。また、各年齢１クラスずつの小規模な園ということもあり（４歳児は17名、５歳児は19名の定員の為４、５歳児の合計が最大36名となる。４、５歳児の対応人数が30対１のため、必然的に縦割り保育となる）、このような環境からクラスを越えて他クラスと一緒に活動したり、交流したりする機会も多い。４、５歳児の縦割り保育をするにあたり、４歳児と５歳児がより関わりを持ち、互いに刺激し合えるかを考えた時、縦割りのペアを作り、活動していくことで、心の成長が育まれるのではないかと考えた。実際に行った内容は、縦割り保育の中で４歳児と５歳児で２人組のペア、ペアを４組掛け合わせてチームを組み、『ペア』や『チーム』での活動を取り入れている。この異年齢児との関わりを経験することが、子どもの育ちとどう関係しているのかを、エピソードを基に明らかにすることを本研究の目的とする。

２．４・５歳児クラスのクラス編成

研究を行った令和３、４年度のクラス編成は以下の通りとなる。

	令和３年度		令和４年度	
	４歳児	５歳児	４歳児	５歳児
女	７名	７名	９名	８名
男	８名	１０名	８名	９名
計	１５名	１７名	１７名	１７名
総合計	３２名		３４名	

３．実践１
～ペアの組み方による関わり方の違い～

４、５歳児のペアの組み方はその年によって異なり、子ども達の様子に合わせて決めてきたが、令和３年度は、５歳児に自分がペアを組みたいと思う４歳児を選んでもらい、ペアを組んだ。ペアを組みたい子どもが重なった場合は、指導者がなぜその子とペアを組みたいのか聞き、他の仲の良い子どもや、選んだ子どもに似た性格の子どもを提案しながら話し合い、ペアを決めていった。４、５歳児で人数が違った為、３人組のペアも２つ存在した。

令和４年度は指導者がペアを決めた。ペアの組み方としては、性格が似ている子ども同士（おっとり、世話好き、活発、よく話す、じっくり等）を組み合わせるようにした。

自分たちで選んで組んだペアと、指導者が意図的に似た者同士を組み合わせたペアでは、関わりにどのような違いが生まれるのかを観察していく。

～観察方法～

表を用いて、自由遊びの時間に誰と関わったのか、表に正の字でチェックを入れながら確認していった。時間は１回につき30分から１時間程度で、遊びの内容や場所は毎回替えながら、様々な遊びでチェックするようにした。

～考察～

結果として、自分達で選んで組んだペアに比べ、指導者が組み合わせたペアの方が関わりを持つ回数が多かった。自分たちで選んで組んだペアでは、同じ空間にはいるが、４歳児は４歳児、５歳児は５歳児でまとまって遊ぶ姿が多く見られ、異年齢児同士の関わりは少なかった。

一方で、指導者が組み合わせたペアでは、自分たちで選んだペアより、関わりを多く持つ姿が見られた。これは性格が似ている子ども同士を組み合わせたことで、遊びや会話も似たようなものを好む傾向にあることが理由と考えられる。

しかしながら、自由遊びでの異年齢児と関わる時間は、目的のある活動をしている時に比べて少ないように感じた。そのため、意図的に異年齢児と関わる活動を多く取り入れることで、異年齢児との関係がより深まるようにした。

環境設定１．ペア・チームとの交流を深めるために

進級当初は、ペアを組んですぐということもあり、ペア・チームの子どもと関わりたいが、自分から関わっていくことができず戸惑ったり、距離感が分からずトラブルになったりする様子が見られる。そこで集団でのゲーム遊びを通し、ペア・チームに子ども同士の交流を深めるようにしている。

令和４年度４月は、集団でのゲームとして、コーン倒しを行った。ルールは、コーンを倒すチームと起こすチームに分かれ、どちらが多いかを競うというものである。

４歳児は今まで行ったことがなかったので、５歳児が見本を見せながら、ルールを説明していった。４歳児はただ言葉で説明を受けるだけでなく、実際に５歳児に見せてもらうことですぐにルールを理解していた。また、５歳児に４歳児は初めて行うということを伝えると、ゲーム中や待っている間に「倒れているコーンを起こすんやで」「ずっと同じコーン守ってるのはあかんで」と、ペアや同じチームの４歳児に声を掛けルールを伝える姿が見られた。また、ルールが分からず止まっている時は、手を引いたり声を掛けたりしながら一緒にしようとしていた。４チームの総当たり戦で行ったので、待ち時間も生まれる。この待ち時間にもどうやったら勝てるのかを話し合ったり、他愛もない会話をしたりしながら、関わりを深めていた。

こうした集団でのゲーム遊びを通し、ペア・チームの友達同士で協力することを経験していく中で、徐々に関わりが増えてくるようになる。

環境設定２．当番活動

当園では、毎朝９時20分から朝の体操を行っており、５歳児が毎朝当番活動として園内放送をしている。体操曲を決めて放送で伝え、（放送設備が１階にあるため）１階０歳児クラスで体操をした後、１日の予定、今日の天気、誕生児がいる日は祝うために放送で伝えている。

放送は毎回年長児２人で行い、その際にペアの４歳児は５歳児の放送の姿を見ながら当番活動の仕方を学んでいる。放送当番は季節に応じて、育てている野菜や植物の水やりをすることで、自分の学年で育てているもの（５歳児はアサガオとゴーヤ、４歳児はひまわりとミニトマト）の生長だけでなく、他の学年の栽培物にも興味を持てるようにしている。体操の曲・誰が放送に行くのかはその日の担当のチーム全員で話し合いをして決め、５歳児だけでなく、４歳児も一緒に話し合いに参加することで、自分の意見を人に伝えることや周りの意見を聞くことを経験したり、話し合いの進め方を学んだりできるようにしている。体操曲のレパートリーは約30曲あり、その中から自分たちで曲を決めていくのは難しいことである。進級当初はどう進めていったらよいか分からず意見を出さずに止まっていて、ただ時間が過ぎたり、意見が上手くまとまらずに言い合いになり、意見が通らず泣いてしまったりすることもある。しかし、１年間を通して行っていくことで、“前回自分がやりたい曲に決まったから、今回は譲る”という姿があったり、話し合いが進まない時は多数決やジャンケンで決めるという選択をしたり、徐々に子ども達だけで話し合いをすることができるようになってくる。この話し合いの中で５歳児はリーダー的な役割をすることで責任感が芽生えるようになる。また、４歳児は話し合いの仕方を学んでいく。

写真１　放送の様子

３月に入ると、朝の放送を４歳児１名、５歳児１名のペアで行うようにしている。これまで５歳児が放送しているのをそばで見ていた４歳児は実際にマイクを向けられるととても緊張をする。そばにいる５歳児が耳元で優しく放送する内容を教え、その言葉を聞いてやっと放送できる４歳児も多い。また、『やっと自分たちの番！！』と嬉しくてはしゃぎながら放送をする４歳児には、なだめるようにして落ち着いて放送するように導く様子は、微笑ましいやり取りで、５歳児の成長に嬉しくなる場面である。４歳児もこの経験で年長児になる事を少しずつ意識するのではないかと考える。

エピソード１．和太鼓

５歳児は音楽活動の一環として和太鼓を取り入れている。４歳児がお客さんとして和太鼓の練習を見る機会も多い。その影響もあり、「早くみどりくじら組（５歳児）になって和太鼓したい」と４歳児のうちから和太鼓に興味を持ち、進級を心待ちにする姿が見られる。そして、５歳児に進級すると「みどりくじら組（５歳児）になったから和太鼓かっこよく叩きたい」と活動へのやる気に繋がっている。これは、５歳児が４歳児のモデルとなり、自分もそうなりたいという憧れの存在になっているのだと思われる。

また、年度末には５歳児から４歳児に和太鼓の叩き方を教える機会を持つことで、５歳児は自分たちがやってきたことを４歳児に伝える経験から、人に丁寧に教える術を学んでいる。また４歳児は年上の子どもの姿から覚え、挑戦しようとする意欲を持つようになる。

写真２　和太鼓１
（手前右４歳児　左５歳児
奥右 ４歳児　左５歳児）

写真３　和太鼓２
（右４歳児
左５歳児）

エピソード２．恥ずかしがりのＡちゃん

４歳児のＡちゃんは、自分から他の年齢の子どもと関

わることが苦手で、他の年齢の子どもが話しかけても反応しないことが多かった（クラス内では仲良しの友達も決まっていた）。また、人前に出ることを恥ずかしいと感じており、クラスの友達の前で話をすることや運動会や発表会での発表を苦手としていた。しかし、ペアの５歳児のＢちゃんとの関わりが始まると嫌がることはなく、お世話してもらったり、教えてもらったりしながら一緒に活動することを喜んでいた。５歳児Ｂちゃんの自然と接する優しさに触れたのではないかと思う。

写真４
右→４歳児Ａちゃん　左→５歳児Ｂちゃん
皆に観られる活動は苦手だったが運動会に
楽しく参加した

そしてＢちゃんは小学校へ進学し、Ａちゃんが進級し５歳児になり、４歳児のＣちゃんとペアを組むことになった。関わり方が分からず戸惑いを見せるのではないかと思っていたが、自らＣちゃんに声を掛け、関わろうとする姿がみられた。また、５歳児になって頑張りたいことを発表する機会を設けると「小さいお友達に優しくしたい」と言う姿が見られるようになった。指導者がどうして小さい子に優しくしたいと思ったのか尋ねると、「Ｂちゃんがいっぱい優しくしてくれたから。自分もしてあげたい」と答えていた。以上のことから、年上の子どもに優しくしてもらった経験により、思いやりの気持ちが芽生え、自分よりも小さな子どもに優しく接することができる様になっているのだと感じた。

エピソード３．制作

令和３年７月に共同制作として「空に絵を描こう」をテーマに透明のビニールシートに絵を描き、描いたビニールシートを外に飾り、下からのぞいてみるという活動を行った。題材は、当園の各クラス名が海の生き物の名前（かに組、くじら組など）ということで「海の生き物」にした。描く場所はペアの子ども同士が隣り合うように設定した。活動を始めると５歳児はすぐに描きたいものを決めて描き始めていたが、４歳児は何を描いて良いか分からず手が止まっている子どもが多かった。指導者は参考になるような絵本や図鑑を手の取れるところに置いたりしながら様子を見守った。すると４歳児は次第に、５歳児に「何描いてるの？」と声を掛け、描いている様子をじっと見るようになった。そして、５歳児が描いているものを真似して自分も描いてみる姿が見られるようになっていた。５歳児は同学年の友達に自分の作っている物や行動を真似されると「真似せんといて」と怒ってトラブルになる姿も多かったのだが、４歳児が真似をして描いても怒る様子はなく、完成した絵を一緒に見ながら隣り合った自分たちの絵を見て「一緒やな」と喜ぶ姿が見られていた。

写真５　制作１
右４歳児　左５歳児
５歳児がどんどん描いている
横で見つめる４歳児

写真６　制作２
右４歳児　左５歳児
「何、描いてるの？」と聞き
ながら描き始める

令和３年３月、５歳児のみで卒園制作として、前回同様シートに絵を描いた。今回のテーマは自分たちで話し合って街を描くことにした。また、街の中に自分とペアの友達を描いた。ペアと自分の絵を描く中で、「△君と僕、同じ色のズボンにする」「○○ちゃんピンクが好きだからピンクの服にしてあげる」とペアの相手を思って集中して書く姿が見られた。このことから１年間を通して関わることで、ペアの子どもとの関係が築かれ、絆が生まれているのだと感じた。

写真７　出来上がった作品を空に映して

写真８　卒園制作
街の中にペア同士の絵が描かれた

エピソード４．帰りの支度

毎日、おやつの前の時間に、帰りの支度として鞄に持ち帰る荷物を片付けている。４歳児は午睡後ということもあり、ボーッとしていてなかなか支度が進まないことも多い（５歳児は午睡を行っていない）。指導者が声を掛け、手伝おうとしてもなかなか支度が進まなかった４歳児のＤちゃんに「ペアのお友達に手伝ってもらおうか？」と提案した。すると、すぐに頷いたため、Ｅ君（Ｄちゃんのペアの５歳児）に支度を手伝ってもらうことにした。Ｅ君は手先が不器用で衣類を畳むことが苦手だったため、Ｄちゃんが自分でした方が綺麗に畳めていたと思うが、ＤちゃんはＥ君に手伝ってもらえたということが嬉しかったようで手伝ってもらいながら自分でも支度を進める姿が見られた。そして、支度を終えると自分からＥ君に「ありがとう」と声を掛けていた。その日の終わりの会で、Ｄちゃんは今日１日の感想として、活動に関することではなく「Ｅ君に支度を手伝ってもらったのが嬉しかった」と発表していたので、手伝ってもらったことによるＤちゃんの喜びがうかがえた。また、Ｅ君もＤちゃんに頼られたことや、手伝ったことを保育者に褒めてもらうことで、自信を持つことに繋がっている様子だった。

エピソード５．新たな接点

発達に遅れがあり、同年代の子どもの遊びにはついていけずに一人遊びをしていることが多かった５歳児のＦ君。４歳の頃から一人遊びをすることはあったが、５歳児になって、他の子ども達の遊びがより複雑になったことでその回数が増えていた。夕方、２～５歳児で合同保育をしている際に、Ｆ君がブロックで作った作品を２歳児のＧ君が気になって、少し離れたところから様子をうかがっていた。そこで保育者がＦ君に「Ｇ君が一緒に遊びたいみたいだよ」と声を掛けてみた。するとＦ君はＧ君に「一緒に遊ぼう」と声を掛け一緒に遊び始めた。Ｇ君に「これは何？」と質問されると、説明して、同じものを作ってあげたりして関わっていた。Ｆ君はお世話してあげたい気持ちは以前からあったが、なかなか自ら年下の友達に関わることができずにいたので、Ｇ君との関わりについては、指導者に「Ｇ君にロボット作ってあげたよ」と嬉しそうに話していた。また、Ｇ君との関わりが自信に繋がり、別の日の合同保育でも他の異年齢児を遊びに誘ったり、ペアの４歳児に自分から話しかけたりするようになった。同年代の友達との遊びが難しい場合も、他の年齢の友達となら一緒に遊べるという姿を見ることができた。

エピソード６．似たもの同士

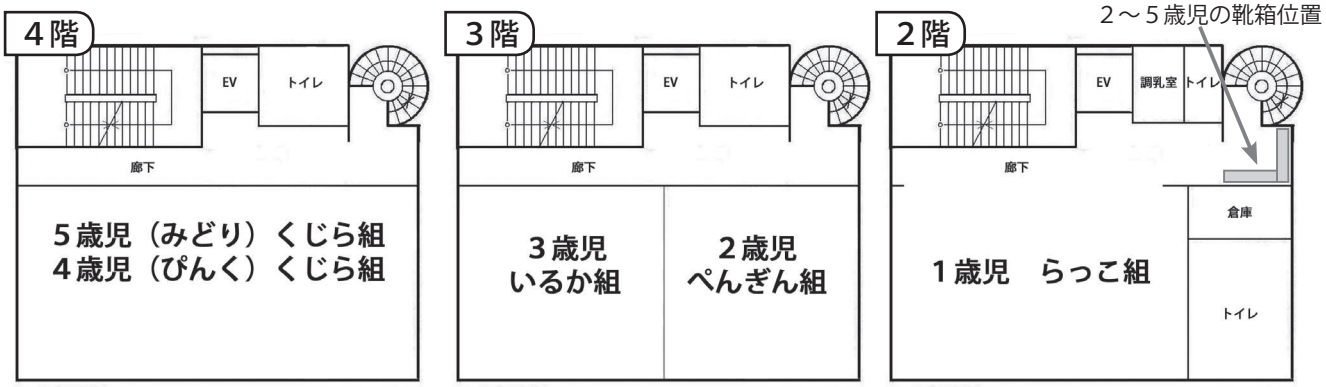
令和４年度の性格が似た者同士で組んだペアの中には、普段自分の思いを人に伝えることが苦手で、同年齢の中では意見を発することが少ない４、５歳児のペアがあった。ペアで話し合いをする機会があると、最初は２人とも意見を出さず、保育者が仲立ちしながら考えを引き出していたが、徐々に２人でなら互いに意見を出し合えるようになってきた。

また、納得いかないことがあると癇癪を起こし、泣いて訴えることが多かった５歳児のＨちゃんは、同じく癇癪を起すことがあった４歳児のＩ君と一緒に活動している時は、Ｉ君がゲーム遊びで負けて怒っている時に、優しく慰め声を掛けたり、普段５歳児だけで活動していて、自分が泣いたときに周りの友達がしてくれているのと同じように対応する姿が見られた。

以上のことから、似た者同士でペアを組むことで、互いに助け合う関係が発展していくのだと感じた。これは、似た者同士だからこそ生まれる関係であり、自分たちで選んで組んだペアでは見られなかった関係性だった。

参考①～園舎の構造と異年齢児の交流～

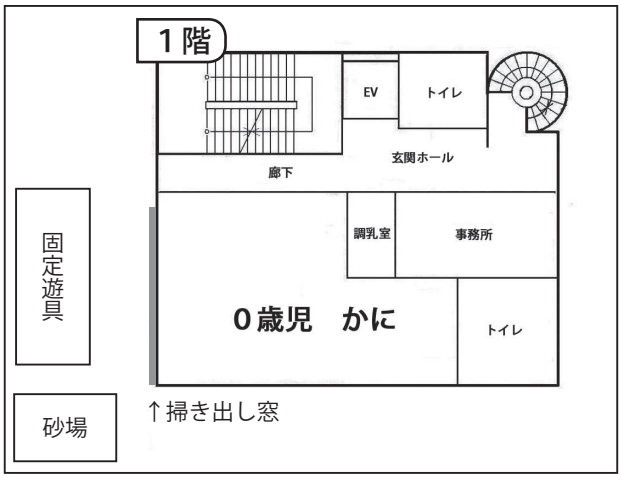
園舎は４階建てである。２～５歳児が戸外に出るたびに２階廊下を通ることで１歳児の部屋を覗いている。園庭は、０歳児クラスの掃き出し窓と繋がっているため、外遊びをしながら０歳児クラスを覗いたり、０歳児は外の様子を日々眺めている。掃き出し窓から園庭に遊びに行こうと職員が靴を準備し始めると、外遊びをしている異年齢児が靴を履くお手伝いに自然と集まってくる。４、５歳児は縦割り保育になるが、０～３歳児の間も自然と異年齢クラス交流がある。新型コロナウイルス感染拡大予防のため、意図的な集団での交流機会は減っているが、個々の関わりや、自然と発生する関わりは、この園舎の



構造にあるのではないかと考える。

２階が２～５歳児の出入り口になっており、靴箱が２階にあることで、戸外に出るときは必ず２階の廊下を通るので、１歳児に手を振るなど互いに意識し合っている。

掃き出し窓のウッドデッキに座り、０、１歳児が靴を履き始めると、４、５歳児がいつの間にか手伝っている。０、１歳児も４、５歳児も互いに嬉しい様子である。園庭遊びの時は０歳児との交流が始まる。いつの間にか０歳児の保育室に入り、遊んでいることもある。



縦長の園舎で、交流が難しそうに思うが、０歳児の大きな掃き出し窓や２階の靴箱までの経路など、乳児クラスをいつでも覗ける環境は異年齢を自然と意識でき、交流できる環境にある。

写真９　靴を履かせる１

写真10　靴を履かせる２

写真11　靴を履かせる３

写真12　掃き出し窓

参考②～１年を通して交流～

１年を通して様々な場面で異年齢との交流があり、その場面１つ１つが自然であるにも関わらず、印象的で素敵な時間を過ごしていると感じている。

春から夏にかけて虫とりが遊びの中心になり、年長児（エンジ色帽子）が取ったダンゴ虫やセミを年中児（白色帽子）に見せながら虫の説明をしている。

写真13　虫取り１
「ダンゴムシの赤ちゃんやで」

写真14　虫取り２
「セミの体の裏に橙色があるからオスやねん」

色を塗っていくビンゴゲーム。塗れているかを見つめるが、急がさず見守り体制。「はみ出さないように塗ってね」と、アドバイスをする年長児。塗り終わった後は「ここが一緒だったね」と年長児が率先して話しかける。

写真15　ビンゴゲーム１

写真16　ビンゴゲーム２

年長児に話しかけられ緊張する２歳児。そっと寄り添いながら関わることで年上の友達にも慣れていく。関わり方を心得ている年長児。

写真17　２歳児に話しかける年長児

運動会４、５歳児の競技では互いに息を合わせる。ボールが落ちると年長児がさっと拾いに行く姿が印象的だった。

写真18　運動会競技

年長児のお別れ会ではペアの友達に贈り物を作成。ペアの友達の好みの色をつぶやきながら作っていた。渡すときはとても照れていた。

写真19　お別れ会

卒園式間近、ペアの友達同士写真を撮ろう！ということになり１組ずつ屋上で撮影会。どんなポーズで撮るかをそれぞれのペアが考えて撮影をした。この時ばかりは、年中児が年長児にしてほしいことをリクエストし、年長児は快くそれに応えていた。

写真20　ペア写真１

写真21　ペア写真２

写真22　ペア写真３

写真23　ペア写真４

まとめ

『ペア』を作ることになった経緯であるが、平成22年９月に開園した当園は、０歳児から５歳児を預かる園としては法人内で最も少ない定員の園となり、建物の構造上４、５歳児は１つのクラスとして運営していくこととなった。開園当初は３歳児が最年長で、ちょうどその時に４、５歳児の縦割り保育についての研修があり、『ペア』を作りながら保育をしている園があることを知り、当園でも取り入れてみようということになり現在に至っている。

４、５歳児の縦割り保育では、どうしても年長児にスポットが当たる活動や行事が多くなる。５歳児と一緒に生活をする中で、４歳児の発達や成長を見逃さずに活動するために、５歳児の活動の中に４歳児を常に意識するようにしたというのが『ペア』の始まりである。

今回は２年間で「年長児がペアになりたい４歳児を選ぶ」と「（保育者が決めた）性格が似ている２人のペア」を比較して考察を行った。

観察・エピソードから異年齢児と関わる中で、『相手を思う気持ち』『優しさに触れた時の気持ち』『人の役に立ちたいという思い』は、子どもたちが自ら考え、自発的に行動することに繋がっており、子どもの心が大きく成長をしていると考える。同年齢の子ども同士での関わりでは生まれない関わりや育ちが縦割り保育や異年齢児保育によって生まれている。

今後も異年齢児との関わりを大切にしながら保育を行っていくとともに、縦割り保育・異年齢児保育を行うことが園内で“当たり前”のこととなってしまうのではなく、しっかりと意図を持って行っていきたいと考える。

講評：ペア活動を通して育まれる心の成長

評者：天野　珠路

４歳児と５歳児のペア活動を継続的に取り入れてきた園の様子が伝わり、異年齢での関わりが大切であることが伝わってきます。二人組のペアとともに、ペアを４組かけ合わせた８人のチームでの活動も繰り広げられ、楽しく遊んだり気持ちを通わせたりする姿は微笑ましいものです。少子化が進み、きょうだいがいない、または、少ない子どもが多い中、異年齢保育や縦割り保育は、子どもの心の成長によい影響を与えることがわかります。

作品（記録）の中で､保育者のことを「指導者」と記したり、大人主導の意図的な活動を重視したりしている感じを受けました。自由遊びの場面でも、子どもはその子なりの目的をもって遊んでいますし、異年齢、同年齢に関わらず、子ども同士の自然な関わりをより大切に保育実践を重ねていただきたいと思います。

評者：田和　由里子

各年齢１クラスずつの小規模園の４・５歳児の縦割り保育での実践報告です。互いに刺激を持ち合うために、縦割りでの２人組の「ペア」を作り活動を行っています。「ペア」の組み方も５歳児がペアを組みたい４歳児を選んだ時と、保育者が性格の似ている（おっとり、世話好き、活発、よく話す、じっくりなど）組み合わせとの違いがどのようなのか、興味深い内容でした。結果として、保育者が選んだ「ペア」の方が遊びや会話も似たような傾向にあるために、関わりを多く持つことが多かったようでした。それぞれのエピソードに写真もあり、わかりやすいです。異年齢児で関わる中で「相手を思いやる気持ち」「優しさに触れた時の気持ち」「人の役に立ちたいという思い」が生まれてきて、子どもの気持ちが大きく成長をしてきていると感じました。今後も縦割り保育を通して育まれる心の成長の実践を行って頂きたいです。

評者：日吉　輝幸

成育児童センターでは、日頃から異年齢児の関わりを大切にした幼児教育・保育を行っているとのことです。本研究は、縦割り保育を行う中で４、５歳児の“ペア活動”を通して育まれる、心の成長の考察が主でした。様々なエピソードの記述から、成育児童センターが“ペア活動”で意図していることが、年上児が年下児に対して「いたわりの気持ちをもつ・積極的に活動に取り組む姿を見せる」、また年下児が年上児に対して「お世話をしてもらった・活動のお手本になる存在」という意識づけにより、“共に育ちあう経験が、脈々と伝承されていく”ということだと推察できます。

レポート中に記述があるとおり、「小さい子に優しくしたい」というＡちゃんが、その理由として「Ｂちゃん（年上児）がいっぱい優しくしてくれたから。自分もしてあげたい」と話しているように、意図通りの結果が表れていることが分かります。

今後は、本研究中に記述があった、園児が自ら選んだ相手とのペアと、保育者が意図的に組ませたペアとの差異が、端的に表れるような取り組みを試みてはいかがでしょうか。更なる活動の深まりを期待しています。

第17回　保育実践研究　報告集

令和５年３月31日発行
発行：社会福祉法人　日本保育協会　保育科学研究所

〒102-0083 東京都千代田区麹町１―６―２　６階
TEL　03－3222－2111（代）
FAX　03－3222－2117